

近畿自動車道(勢和～伊勢)

埋蔵文化財発掘調査報告

—— 第 1 分 冊 ——

佐奈水銀鉱山跡
牛バサマA遺跡
牛バサマB遺跡

1992・3

三重県教育委員会
三重県埋蔵文化財センター

近畿自動車道(勢和～伊勢)

埋蔵文化財発掘調査報告

—— 第 1 分冊 ——

序

近畿自動車道関・伊勢線にかかる現地の埋蔵文化財発掘調査は第8次区間（久居～勢和）が昭和63年度に終了し、その年度後半から第9次区間（勢和～伊勢）が開始され現在に至っております。第9次区間は多気町、玉城町、伊勢市に所在する30遺跡を調査対象とし、昭和63年度から調査を行ってまいりました。

第9次区間については平成5年に予定されている伊勢神宮式年遷宮、および翌平成6年の世界祝祭博開催を臨んだ県行政の大幹に関連した道路建設であり、当事業にかかる埋蔵文化財の保護とその円滑な調整については鋭意努力いたしているところであります。

第9次区間の路線となる前述の市町が所在する地域は、古来から伊勢神宮との関連が深いことがわかっております。この地域に考古学的なメスを入れることは、当該地域の歴史を考えていくうえで、重要な資料を提供することになりましょう。またこの調査によって得た資料を基に、当該地域の歴史を考えていくことも発掘調査を行った我々の大きな責務のひとつであり、ここに公刊する佐奈水銀鉞山跡ほか7遺跡についても同様であります。開発と文化財の保存との接点を学術的な方面に求めることも重要なことといえましょう。

調査に際しては日本道路公団、県土木部近畿道対策室、伊勢市建設部近畿自動車道対策室、三重県土地開発公社、並びに伊勢市、多気町、玉城町の各関係機関、および地元各位の多大なるご理解とご協力を得ることができました。文末となりましたが、ここに心からの御礼を申し上げます。

平成4（1992）年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 中 林 昭 一

例 言

1. 本書は平成3年度に三重県教育委員会が、日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した近畿自動車道関・伊勢線第9次区間（勢和～伊勢）建設予定地内にかかる埋蔵文化財発掘調査（整理・報告書作成業務）のうち、佐奈水銀鉱山跡ほか7遺跡の発掘調査報告書（第1分冊）である。

2. 調査（整理・報告書作成業務）にかかる費用は、日本道路公団の全額負担による。

3. 調査（整理・報告書作成業務）の体制は下記のとおりである。

- ・調査主体 三重県教育委員会
- ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター調査第2課第1係
- 調査第2課課長 新田 洋
- 主事 河瀬信幸
- 主事 河北秀実
- 主事 角谷泰弘（伊勢市教育委員会から派遣）
- 主事 稲本賢治（多気町教育委員会から派遣）
- 主事 前川嘉宏（玉城町教育委員会から派遣）
- 室内整理員 反町瑩子
- 室内整理員 谷久保美知代
- 室内整理員 采野妙子
- 室内整理員 竹内ゆかり

4. 本書作成にかかる各整理は上記体制で行い、報文の執筆分担については目次、及び各文末に明記した。調査当時、発掘調査担当者であった山崎恒哉（現三重県立桑名北高等学校教諭）、江尻健（現一志郡三雲町立鶴小中学校教諭）の両氏には、報文執筆の一部をお願いした。

遺物整理、報文執筆にあたっては、下記の方々からご指導・助言を賜った。また磯部克氏からは玉稿を賜った。記して謝意を表する。（順不同、敬称略）

磯部 克（三重県立津西高等学校教諭）

奥 義次（三重県立松阪高等学校教諭）

5. 本書に報告した遺跡については既に刊行した『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』（三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990.3）にその調査概要を公表しているが、本書をもって最終的な報告とする。桃谷古墳、ツツジ古墳、矢倉戸前古墳については、当初古墳と想定したが、調査の結果、古墳ではないことが判明した。

6. 本書に報告した各遺跡の記録類および出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

7. 本書に使用した遺構表示略記号は下記のとおりである。また遺構実測図作成にあたっては国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。

S B 掘立柱建物 S D 溝 S K 土坑 P 柱穴、小穴

8. **スキヤニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。**
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目 次

序	
例 言	
目 次	
図版目次	
挿入目次	
表 目 次	
I. 前言	(河北 秀実) 1
II. 位置と歴史的環境	(河瀬 信幸) 9
III. 佐奈水銀鉱山	(田村 陽一) 13
IV. 牛バサマA遺跡・牛バサマB遺跡 17
1. はじめに	(山崎 恒哉・河瀬 信幸) 17
2. 調査方法	(山崎 恒哉・河瀬 信幸) 19
3. 牛バサマA遺跡	(山崎 恒哉・河瀬 信幸) 20
4. 牛バサマB遺跡	(江尻 健・角谷 泰弘) 26
V. 範囲確認調査遺跡	
1. 王子谷遺跡	(伊藤 裕偉) 43
2. 桃谷(古墳)	(伊藤 裕偉) 45
3. ツツジ(古墳)	(伊藤 裕偉) 47
4. ヒジヤロ古墳	(小坂 宜広) 49
5. 矢倉戸前(古墳)	(伊藤 裕偉) 51
VI. 付編	
1. 佐奈水銀鉱山跡の地質学的調査	(磯部 克) 55
2. 水谷鉱山跡の地質学的調査	(磯部 克) 61
3. 中央構造線付近(多気町前村～伊勢市楠部町間)の地質・鉱物及び岩石	(磯部 克) 65
4. 佐奈水銀鉱山跡の写真測量	(河北 秀実) 73

図 版 目 次

佐奈水銀鉱山跡		PL 3 牛バサマB遺跡西区全景	37
PL 1 1号坑と2号坑	15	牛バサマB遺跡中央区全景	37
1号坑	15	PL 4 牛バサマB遺跡東区全景	38
PL 2 1号坑口	16	牛バサマB遺跡中央区SB1・SB2	38
2号坑口	16	PL 5 牛バサマB遺跡出土遺物	39
牛バサマA遺跡・牛バサマB遺跡		PL 6 牛バサマB遺跡出土遺物	40
PL 1 牛バサマA遺跡東区全景	35	王子谷遺跡	
牛バサマA遺跡西区全景	35	PL 1 調査前風景	44
PL 2 牛バサマA遺跡出土遺物	36		

桃谷（古墳）	
P L 1	調査トレンチ…………… 46
	土器採集地点…………… 46
ツツジ（古墳）	
P L 1	調査前風景…………… 48
	調査トレンチ…………… 48

ヒジャロ遺跡	
P L 1	西半部調査前風景…………… 50
	東半部調査前風景…………… 50
矢倉戸前（古墳）	
P L 1	調査前風景…………… 52
	調査トレンチ…………… 52

挿 図 目 次

前 言	
第 1 図	発掘調査遺跡位置図…………… 8
位置と歴史的環境	
第 2 図	遺跡分布図…………… 9
佐奈水銀鉞山跡	
第 3 図	坑口位置図…………… 13
第 4 図	1・2号坑口付近地形測量図…………… 14
牛バサマA遺跡・牛バサマB遺跡	
第 5 図	遺跡地形図…………… 17
第 6 図	調査区位置図…………… 18
第 7 図	地区割図…………… 19
第 8 図	東区・西区遺構平面図……………21～22
第 9 図	遺物実測図…………… 23
第10図	土層断面図…………… 26
第11図	遺構配置図…………… 27
第12図	S B 1・S B 2・S B 3実測図…………… 28
第13図	東区S K 8付近実測図…………… 28
第14図	出土遺物実測図…………… 32
第15図	出土遺物実測図…………… 33

王子谷遺跡	
第16図	出土遺物実測図…………… 43
第17図	遺跡地形図…………… 43
第18図	発掘区位置図…………… 43
桃谷（古墳）	
第19図	採集遺物実測図…………… 45
第20図	遺跡地形図…………… 45
第21図	発掘区位置図…………… 45
ツツジ（古墳）	
第22図	遺跡地形図…………… 47
第23図	発掘区位置図…………… 47
ヒジャロ遺跡	
第24図	採集遺物実測図…………… 49
第25図	遺跡地形図…………… 49
第26図	発掘区位置図…………… 49
矢倉戸前（古墳）	
第27図	遺跡地形図…………… 51
第28図	発掘区位置図…………… 51

表 目 次

前 言	
第 1 表	遺構実測図・遺物実測図整理番号 一覧表…………… 3

第 2 表	発掘調査遺跡一覧表…………… 5
第 3 - 1 表	発掘調査遺跡一覧表…………… 6
第 3 - 2 表	発掘調査遺跡一覧表…………… 7

I. 前 言

1. 調査に至る経過

近畿自動車道関・伊勢線は三重県鈴鹿郡関町を起点とし、伊勢市楠部町までの全長約68kmの自動車専用道路である。

この路線は三重県の中南勢地域と、近畿および中京経済圏を結ぶ重要幹線道路の役割を担うものとして重要な位置を占める。また一般国道23号線、同42号線の交通混雑の緩和とともに、伊勢湾沿岸や内陸部の産業開発、あるいは伊勢志摩や紀州方面への観光など、今後とも増大が予想される交通面に大きな使命を担っている。建設工事は平成5年の伊勢神宮の式年遷宮、および翌平成6年に計画されている世界祝祭博覧会にあわせた形で急ピッチで進められている。

近畿自動車道関・伊勢線のうち、関～久居間（第5次区間）の約21kmは昭和50年10月に既に供用されており、また久居～勢和（第8次区間）の約26kmは平成2年12月に供用開始されている。

第9次区間は第8次区間（久居～勢和）の延長路線として、勢和・多気インターチェンジから仮称伊勢インターチェンジまでの延長21.5kmの建設計画であり、行政区画としては、勢和村、多気町、玉城町、伊勢市をほぼ東西に横断する形をとっている。

近畿自動車道関・伊勢線の第9次区間（勢和～伊勢）の建設区間については、昭和47年に基本計画が、昭和57年整備計画が、そして昭和60年2月に建設大臣から日本道路公団に施工命令が出されている。また翌月の3月には実施計画認可と路線発表がなされている。

第9次区間（勢和～伊勢）の建設にかかる埋蔵文化財の保護、調整協議については昭和50年段階に建設省名阪国道工事事務所、県道路建設課と県教育委

員会文化課との協議と立会い調査という形で開始された。また事業地内にかかる埋蔵文化財の分布調査については昭和53・55・56年の3次にわたって県教育委員会文化課が県文化財調査員等の協力を得て実施し、昭和56年3月14日付、教文第429号で道路建設課あてに「近畿自動車道伊勢線関係遺跡分布調査結果報告について」として文書通知をしている。

現地での具体的な遺跡の取扱については、昭和61年度に県教育委員会文化課と日本道路公団松阪工事事務所との間で、試掘調査の計画等について調整・協議を開始するに至った。昭和62年度初めには再度、第9次区間（勢和～伊勢）の建設予定地の遺跡確認と分布調査を実施し、日本道路公団に26遺跡、面積114,200㎡を提示した。

以上のような経過を経て、現地における埋蔵文化財発掘調査は昭和63年度の後半期から開始することとなった。

その後、新発見等の協議を経て、玉城町で1件（泉貢窯跡）、多気町で1件（佐奈水銀鉱山跡）、伊勢市で2件（大谷古墳、古市・中之地蔵町遺跡）の遺跡が追加されている。最終的には遺跡は計30件となった。

最後となりますが、調査の円滑な推進にあたりましては、日本道路公団松阪工事事務所、県土木部近畿道対策室、伊勢市建設部近畿自動車道対策室ほか、伊勢市・多気町・玉城町の各教育委員会に、また現地にあっては、地元自治会長をはじめ、多くの方々のご理解とご援助をいただきました。加えて、発掘業務については、三重県土地開発公社のご協力をいただきました。文末ながらここに記して厚く御礼申し上げます。

2. 調査および整理の方法

1. 現地調査の方法

近畿自動車道関・伊勢線第9次区間（勢和～伊勢）にかかる遺跡の発掘調査方法については、第8次区間の方法をほぼ踏襲したが、以下に原則的な方法を記す。

地区割

地区割は4m方眼で設定し、各調査遺跡毎に適切な2本の道路センター杭を結び延長線方向に、西から東へ数字を、これと直交する方向で南から北へアルファベットを与え、各グリッドの南西の坑をグリッドの名称とする。

遺構カード

遺構カードは原則として4×4mのグリッド毎に作成する。遺構検出後、掘り下げまでに略図を記入し、遺構の重複関係、土質、出土遺物等の現場で判明した情報を可能な限り記入する。

遺構番号についてはピットは各グリッドごとに通し番号を付すこととし、竪穴住居・溝・土坑等の大きな遺構は遺跡ごとの通し番号とする。

写真撮影

遺構等の写真撮影は原則として6×7cm版（モノクロネガ、カラーリバーサル）及び35mm版（モノクロネガ、カラーリバーサル）による。また35mmデータカメラ（カラーネガ）でも同一カットの撮影をし、さらに作業進捗状況にあわせて日誌としての撮影も行った。

使用したカメラはアサヒペンタックス67（6×7cm版）、ニコンF-501AF（35mm版）である。

遺構実測

道路工事計画に関する杭が国土座標に基づいており、将来予想される隣接地での発掘調査との関係が把握できるように、遺構実測は国土座標に基づいて行った。遺構実測は遺り方実測（測量）を原則とし、各々の遺跡の状況に合わせて、空中写真測量、平板測量も行った。なお当地域の座標系は第VI系である。

2. 資料整理の方法

遺構実測図等

遺構実測、断面実測等の図面は、航測図面のような特殊なものを除き、原則として50×35cmの方眼紙（2mm方眼）を使用し、各々に6桁の番号を付す。番号のうち上2桁は、調査対象遺跡の番号とし、下4桁を各遺跡ごとの図面の通し番号とする。これらの図面はA2版の図面ファイルに収納し、図面番号、図面の内容、縮尺等を記入した一覧表を2部作成し、1部を各図面ファイルに貼付、他の1部を綴じ込んで図面台帳とする。なお各図面ともマイクロ撮影も行い、同様に6桁の通し番号を付した後ファイルへ整理する。

遺物実測図

出土遺物のうち実測可能なものは、原則としてすべて実測する。そして各々の遺物に6桁の通し番号を付す。番号のうち上2桁を調査対象遺跡の番号とし、下4桁を遺物の通し番号とする。これらの図面はA2版ファイルに収納し、各遺物の番号、種類、名称、法量等のデータを記入した一覧表を2部作成し、1部を各図面ファイルに貼付、他の1部を綴じ込んで図面台帳とする。なお遺物実測図はマイクロ撮影を行い、データを記入した後ファイルする。また、実測不可能な遺物でも特にピックアップしたものには6桁の通し番号を与え、一覧表に記載する。なお、6桁の通し番号の与えられた遺物については遺物及び遺物ラベルにも、その番号を注記する。

遺構写真

モノクロ写真はベタ焼きとともにネガアルバムに貼付整理し、各コマ毎に地区名、遺構名、撮影方向等のデータを記入する。

カラーライドは、図面及び遺物と同様の方法により、各コマ毎にファイル枠に6桁の通し番号を付す。そして、地区名、遺構名、撮影方向等のデータを記入した一覧表を作成し、1部を台帳として保管する。

遺物写真

モノクロ、カラーとも各遺物に付された6桁の通し番号によって整理を行う。整理方法は遺構写真と同様である。

拓本

拓本は、台紙に貼り付け、遺物に付された6桁の
通し番号を記入し、クリアーファイルへ保管する。
報告書図版等に使用する時はコピー等によって複写

したものを使用する。

本報告書に所収の遺跡の各図面および遺物に付し
た6桁の通し番号は第1表の通りである。

3. 調査の体制

調査は、三重県教育委員会が主体となり、三重県
埋蔵文化財センターが担当した。

以下は、平成元・2年度の調査体制である。

平成元年度

調査第2課第1係

主幹兼課長 山澤義貴

主 査 新田 洋

主 事 田村陽一

主 事 河北秀実

主 事 小坂宜広

主 事 山崎恒哉

主 事 江尻 健

主 事 角谷泰弘 (伊勢市教育委員会より派遣)

主 事 稲本賢治 (多気町教育委員会より派遣)

主 事 前川嘉宏 (玉城町教育委員会より派遣)

室内整理員 反町瑩子

室内整理員 谷久保美知代

室内整理員 采野妙子

室内整理員 吉村道子

室内整理員 白石みよ子

室内整理員 山分孝子

室内整理員 竹内由美

室内整理員 田中智子

室内整理員 反町有子

室内整理員 中山 学

平成2年度

調査第2課第1係

次長兼課長 山澤義貴

主 査 新田 洋

主 事 河北秀実

主 事 増田安生

主 事 齋藤直樹

主 事 伊藤裕偉

技 師 大川勝宏

主 事 角谷泰弘 (伊勢市教育委員会より派遣)

主 事 稲本賢治 (多気町教育委員会より派遣)

主 事 前川嘉宏 (玉城町教育委員会より派遣)

臨時調査員 川崎正幸

室内整理員 反町瑩子

室内整理員 谷久保美知代

室内整理員 采野妙子

室内整理員 吉村道子

室内整理員 白石みよ子

遺跡 番号	遺跡名	遺構実測図	遺物実測図
1	王子谷遺跡	—————	1-0001~1-0007
2	桃谷(古墳)	—————	2-0001~2-0002
3	ツツジ(古墳)	—————	—————
4	牛バサマA遺跡	4-0001~4-0004	4-0001~4-0033
5	牛バサマB遺跡	5-0001~5-0078	5-0001~5-0080
6	ヒジヤ口遺跡	—————	6-0001~6-0002
14	矢倉戸前(古墳)	—————	—————
28	佐奈水銀鉱山跡	28-0001~28-0002	—————

第1表 遺構実測図・遺物実測図整理番号一覧表

室内整理員 山分孝子
室内整理員 乾ひとみ
室内整理員 上村かおり
室内整理員 竹内由美
室内整理員 反町有子
室内整理員 中山 学
調査補助員 森田幸伸 (皇學館大学学生)
調査補助員 近藤大典 (皇學館大学学生)

調査指導 (平成元・2年度、順不同、敬称略)

水野正好 (奈良大学教授)
泉 拓良 (奈良大学助教授)
玉田芳英 (奈良国立文化財研究所文部技官)
八賀 晋 (三重大学教授)
広岡公夫 (富山大学教授)
渡辺 寛 (皇學館大学教授)
西山要一 (奈良大学助教授)
植野浩三 (奈良大学助手)

菅原正明 (叻和歌山県文化財センター次長)
中井 均 (滋賀県米原町教育委員会技師)
千葉 豊 (京都大学埋蔵文化財調査研究センター助手)
橋本久和 (大阪府高槻市埋蔵文化財センター技師)
磯部 克 (三重県立津西高等学校教諭)
奥 義次 (三重県立松阪高等学校教諭)
小玉道明 (三重県総務部学事文書課主幹)
広瀬和久 (三重県農業技術センター主任研究員)
原 正之 (三重県農業技術センター研究員)

発掘調査土木工事部門担当

三重県土地開発公社
堀内信吾
稲葉庄衛
平生 憲
浜口安光
下地 茂

(河北秀実)

No.	遺跡名	所在地	確認面積 (㎡)	調査面積 (㎡)						合計		
				昭和63年度		平成元年度		平成2年度			平成3年度	
				試掘	本調査	試掘	本調査	試掘	本調査		試掘	本調査
1	王子谷遺跡	多気町前村字王子谷	1,000	48	144						192	
2	椋谷(古墳)	〃 前村字椋谷、五桂字ツツジ	100		27						27	
3	ツツジ(古墳)	〃 五桂字ツツジ	100		20						20	
4	牛ハサマA遺跡	〃 野中字牛ハサマ、字定越	1,500	304		3,000					3,304	
5	牛ハサマB遺跡	〃 野中字牛ハサマ、字ナルコ	4,700	336	(1,200)	5,500					5,836	
6	ヒジャロ遺跡	玉城町字ヒジャロ・国東河内	5,600	288							288	
7	のせんじ遺跡	〃 種良字のせんじ・泉貫	1,000	96							96	
8	浦ノ内遺跡	〃 種良字浦ノ内	2,800	192	(2,000)	2,500					2,692	
9	上ノ垣内遺跡	〃 山神字上ノ垣内・坂ノ辻	3,400	208							208	
10	富ヶ城跡	〃 山神字西老谷・追谷	2,000				286	2,180			2,466	
11	山神東城跡	〃 山神字東老谷	2,700				441	3,922			4,363	
12	里山(古墳)	〃 山神字里山・東岡谷・仲山	100		30						30	
13	楠ノ木遺跡	〃 勝田字楠ノ木・二ノ谷・ヤケ山他	39,000		2,032	6,890					8,922	
14	矢倉戸前(古墳)	〃 宮古字細谷	100		20						20	
15	岐山遺跡左郡地区	〃 岩出字塚名・左郡	10,000	587		11,300					12,087	
16	岐山遺跡所り垣地区	〃 岩出字塚名・所り垣	2,300	144		3,200					3,344	
17	中ノ垣外遺跡	伊勢市佐八町字中之垣外	4,400		400	2,100					2,500	
18	寺原B遺跡	〃 佐八町字寺原	2,400		224	500					724	
19	ハノカ遺跡・口山田遺跡	〃 佐八町字向口、津村町字ハノカ他	10,000		792		147	2,800			3,739	
20	落合古墳群	〃 津村町字口山田	1,200		151			3,165			3,316	
21	井戸谷遺跡	〃 前山町字井戸谷	400		336						336	
22	河原谷遺跡	〃 前山町字河原谷	100					100			100	
23	亀谷郡C遺跡	〃 前山町字亀谷郡	3,500		312			2,195			2,507	
24	中起遺跡	〃 勢田町字中起	3,500				257				257	
25	蛸尾遺跡	〃 久世戸町字蛸尾	520							32	32	
26	奥遺跡	〃 楠部町字奥	11,800				494				494	
27	泉貫築跡	玉城町種良字泉貫・向山丑岡	4,500		330			2,556			2,886	
28	佐奈水銀鉱山跡	多気町前村字井戸谷	400			400					400	
29	大谷(古墳)	伊勢市佐八町字大谷	120				120				120	
30	古市中之地蔵町遺跡	伊勢市中之町・桜木町	5,000				127				127	
	計		124,520	2,203	(3,200)	35,590	1,872	16,918		2,500	2,612	
	合計			2,203+	(3,200)	40,408	18,790		3,164		64,426	

第2表 発掘調査遺跡一覧

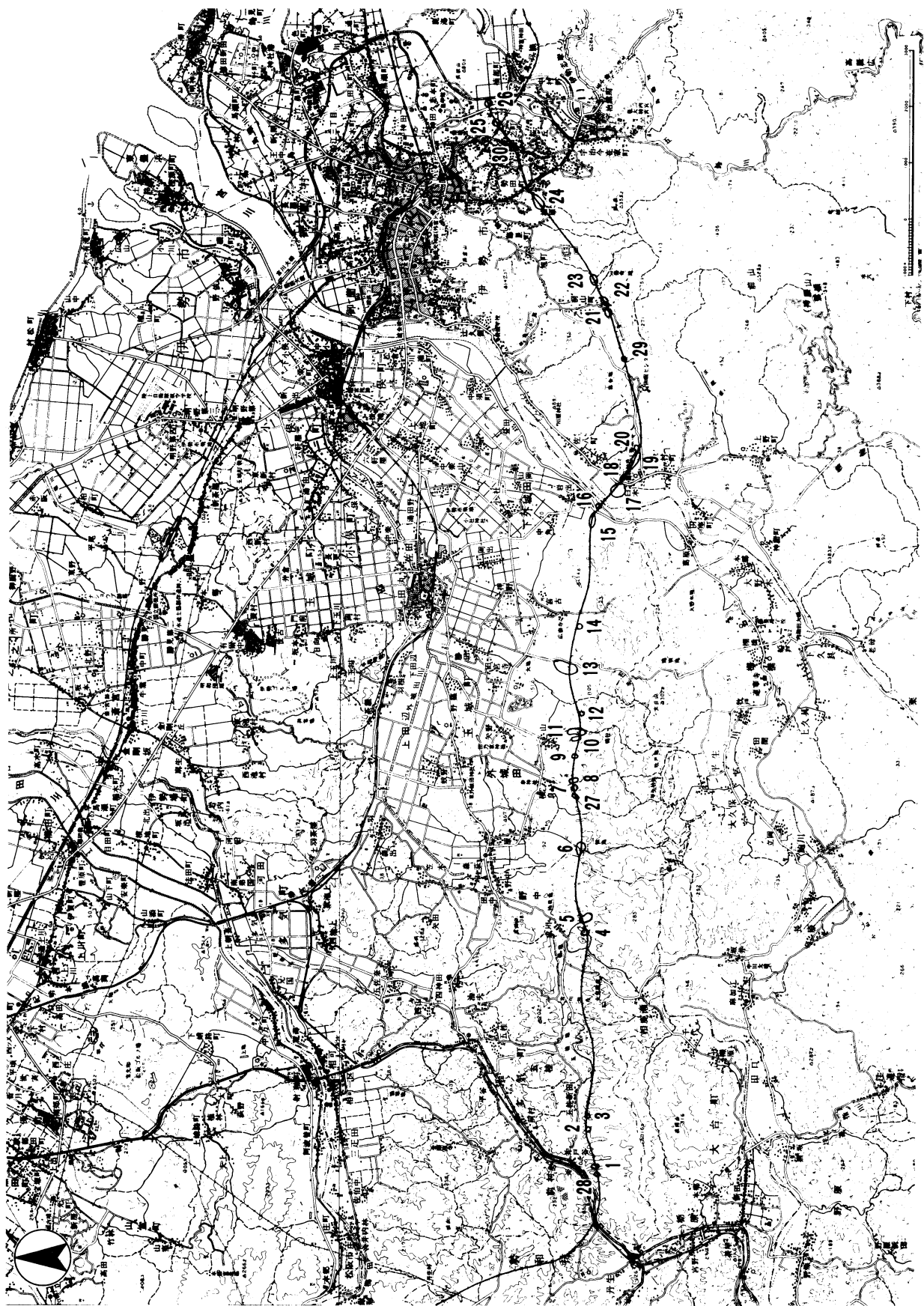
番号	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)		調査期間	担当者	概要	所収分冊	
1	王子谷遺跡	多気町前村	48	計192	1989.2.6～2.7	小坂 宜広 山崎 恒哉	(試掘) 遺構なし、遺物細片	1	
			144		1990.1.12～1.18	伊藤 裕偉	(試掘) 遺構なし、遺物細片		
2	桃谷(古墳)	多気町前村 五柱	27	27	1990.1.18～1.22	伊藤 裕偉	(試掘) 遺構・遺物なし		
3	ツツジ(古墳)	多気町五柱	20	20	1990.1.22～1.23	伊藤 裕偉	(試掘) 遺構・遺物なし		
4	牛バサマA遺跡	多気町野中	304	3,304	1989.1.9～2.7	山崎 恒哉	(試掘)		
			3,000		1989.11.17～1990.1.11	山崎 恒哉	縄文時代以降の土器出土		
5	牛バサマB遺跡	多気町野中	336	5,836	1988.12.12～1989.1.19	山崎 恒哉	(試掘)		
			5,500		1989.5.22～8.8	江尻 健	鎌倉時代の掘立柱建物検出		
6	ヒジャロ遺跡	玉城町原	288	288	1988.11.28～12.1	小坂 宜広 野田 修久	(試掘) 遺構なし、遺物少量		
7	のせんじ遺跡	玉城町積良	96	96	1988.12.2～12.7	小坂 宜広 野田 修久	(試掘) 遺構なし、遺物少量		2
8	浦ノ内遺跡	玉城町積良	192	2,692	1989.2.22～3.3	小坂 宜広 野田 修久	(試掘)		
			2,500		1990.2.8～3.22	江尻 健	縄文時代以降の土器出土		
9	上ノ垣内遺跡	玉城町山神	208	208	1988.12.20～12.26	小坂 宜広 野田 修久	(試掘) 遺構なし、遺物少量		
10	山神城跡西老谷地区 (富ヶ城跡)	玉城町山神	286	2,466	1990.5.15～6.1	稲本 賢治	(試掘)		2
			2,180		1990.7.20～12.27	稲本 賢治 大川 勝宏	中世の堀切など検出		
11	山神城跡ベト谷地区 (山神東城跡)	玉城町山神	441	4,363	1990.5.15～6.1	稲本 賢治	(試掘)		2
			3,922		1990.7.20～12.27	稲本 賢治 大川 勝宏	中世の堀切・墓など検出		
12	里山(古墳)	玉城町山神	30	30	1990.2.13～2.14	江尻 健	(試掘) 遺構・遺物なし		
13	楠ノ木遺跡	玉城町勝田	2,032	8,922	1990.5.16～6.5	田村 陽一	(試掘)	3	
			6,890		1990.6.29～11.17	伊藤 裕偉	平安時代末～室町時代後半の屋敷地や墓地を検出		
14	矢倉戸前(古墳)	玉城町宮古	20	20	1989.9.1～9.6	伊藤 裕偉	(試掘) 遺構・遺物なし	1	
15	蚊山遺跡左郡地区 (蚊山遺跡)	玉城町岩出	587	12,087	1989.1.10～2.2	小坂 宜広 野田 修久	(試掘)	6	
			11,500		1989.5.16～1990.3.20	小坂 宜広 稲本 賢治 角谷 泰弘 前川 嘉宏	古墳の周溝、中世の掘立柱建物跡・墓など多数検出		
16	蚊山遺跡所り垣地区 (宮地遺跡)	玉城町岩出	144	3,344	1989.1.26～2.2	小坂 宜広 野田 修久	(試掘)	4	
			3,200		1989.5.22～9.2.1	山崎 恒哉 稲本 賢治	平安時代末の墓、鎌倉時代の掘立柱建物など検出		

第2-1表 発掘調査遺跡一覧(太ゴチックは本書所収遺跡)

番号	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)		調査期間	担当者	概要	所収分冊
17	中ノ垣外遺跡	伊勢市佐八町	400	2,500	1989.9.18～10.3	田村 陽一	(試掘)	5
			2,100		1989.11.13～12.23	前川 嘉宏	平安時代末葉の掘立柱建物検出	
18	寺原B遺跡	伊勢市佐八町	224	724	1989.9.18～10.3	田村 陽一	(試掘)	5
			500		1989.11.14～1990.1.14	角谷 泰弘	鎌倉時代前半の掘立柱建物検出	
19	ハノカ遺跡	伊勢市津村町	208	3,739	1990.2.14～3.27	角谷 泰弘 前川 嘉宏	(試掘)	5
			147		1990.5.31～6.11	角谷 泰弘	(試掘)	
	2,100	1990.5.31～8.1	角谷 泰弘		縄文時代・鎌倉時代の土器出土			
	584	1990.2.14～3.27	角谷 泰弘 前川 嘉宏		(試掘)			
20	落合古墳群	伊勢市津村町	700	3,316	1990.5.31～8.1	角谷 泰弘	集石遺構検出	7
			151		1990.2.14～3.27	角谷 泰弘 前川 嘉宏	(試掘)	
21	井戸谷遺跡	伊勢市前山町	336	336	1990.3.14～3.27	角谷 泰弘 前川 嘉宏	(試掘) 明確な遺構なし	8
			100		1990.10.11～10.17	角谷 泰弘 川崎 正幸	遺物少量出土	
22	河原谷遺跡	伊勢市前山町	100	100	1990.10.11～10.17	角谷 泰弘 川崎 正幸	遺物少量出土	8
			312		1990.2.14～3.27	角谷 泰弘 前川 嘉宏	(試掘)	
23	亀谷郡C遺跡 (世義寺跡)	伊勢市前山町	2,195	2,507	1990.5.7～7.9	齋藤 直樹 前川 嘉宏	経文が記された陶経筒片出土	8
			257		1990.10.16～10.23	伊藤 裕偉	(試掘)	
24	中起遺跡	伊勢市勢田町	257	257	1990.10.16～10.23	伊藤 裕偉	(試掘)	2
25	蝮尾遺跡	伊勢市久世戸町	32	32	1991.8.19	河瀬 信幸	(試掘) 遺物・遺物なし	
26	奥遺跡	伊勢市楠部町	494	494	1990.10.23～11.1 1991.1.14～1.16	齋藤 直樹	(試掘) 遺構なし、遺物少量	2
27	泉貢窯跡	玉城町積良	330 2,556	2,886	1989.5.22～5.29 1990.8.28～11.20	伊藤 裕偉 前川 嘉宏	(試掘) 10世紀前半頃の須恵器窯 1基検出	
28	佐奈水銀鉱山跡	多気町前村	400	400	1990.1.16～3.30	田村 陽一	2基の採掘坑口周辺を調査	1
29	大谷(古墳)	伊勢市佐八町	120	120	1990.7.2～7.7	前川 嘉宏	(試掘) 遺物・遺物なし	8
30	古市・中之地蔵町遺跡	伊勢市中之町 桜木町	127	2,287	1990.10.22～11.5	角谷 泰弘	(試掘)	
			850		1991.6.22～8.31	角谷 泰弘 河北 秀実 稲本 賢治	近世以降の町並の遺構を検出。	
			420		1991.8.20～9.16	前川 嘉宏 角谷 泰弘		
			220		1991.11.18～12.8	角谷 泰弘		
670	1992.1.～3.31	河北 秀実						

※調査総面積は64,086㎡、ただし本調査面積に試掘面積が重複する遺跡あり。

第2-2表 発掘調査遺跡一覧



第1図 発掘調査遺跡位置図 (1 : 100,000)

Ⅱ. 位置と歴史的環境

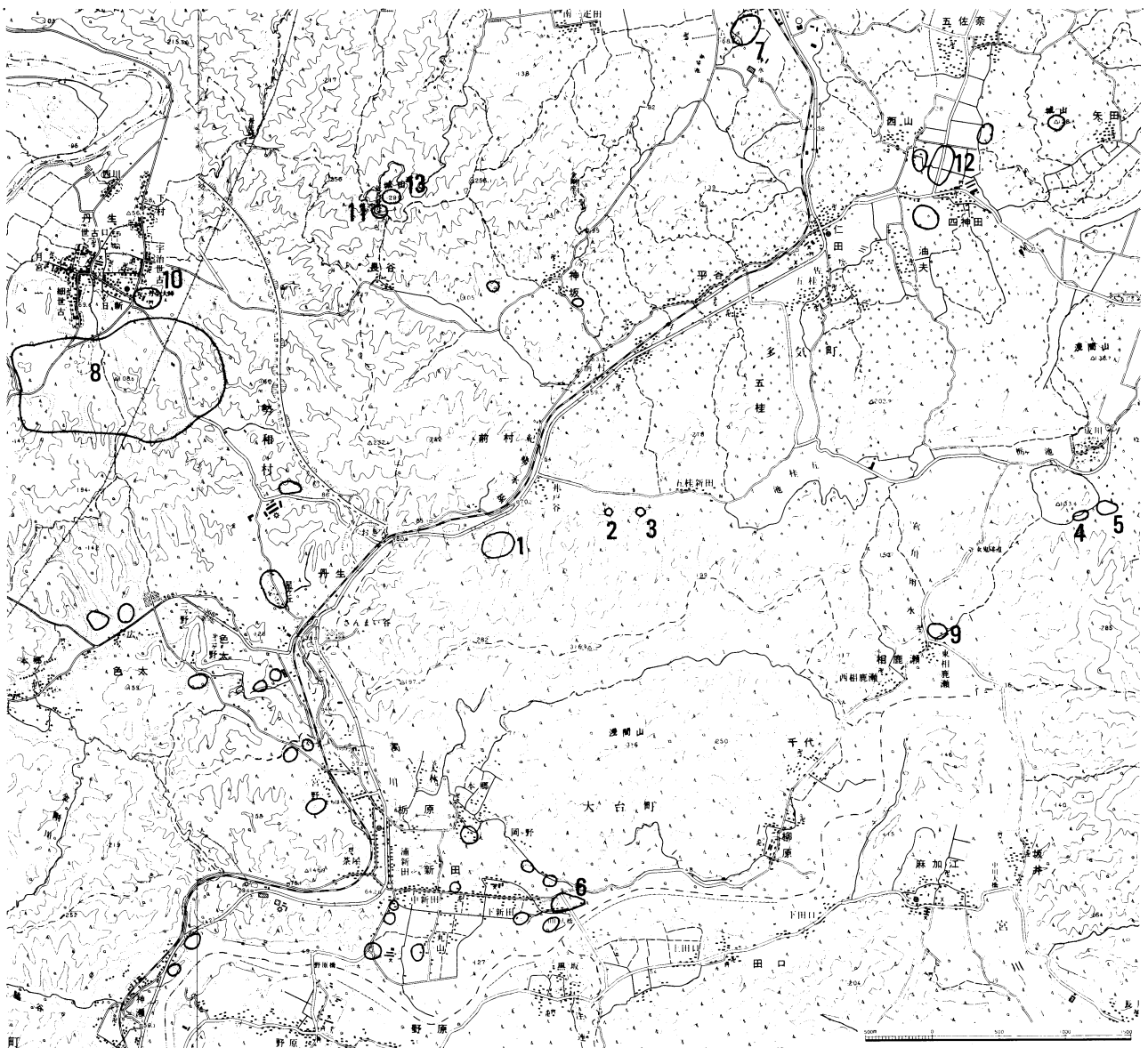
三重県のほぼ中央を東流する宮川・榑田川の2大河川は、いずれも奈良県境に源を發し、伊勢湾に注いでいる。両河川は中流域、特に多氣郡勢和村及び多氣町・大台町付近で最も接近しており、そして、この地域は西日本中央構造線の近畿地方での東端部に位置している。

さて、この項では前記の3町村が接する宮川・榑田川中流域の歴史的な環境を概観してみたい。

この地域の特徴の一つは、旧石器時代から縄文時代全般にかけての遺跡が多く存在することである。

特に宮川に臨む段丘上には出張遺跡(6)^①があり、その出土遺物量などから、県下最大規模の旧石器時代の遺跡とされている。また、榑田川流域では上ノ広遺跡^②、牟山遺跡^③(7)などでは旧石器時代末期から縄文時代早期にわたる石器、土器が出土している。また、縄文時代各時期を通じての遺跡は、勢和村片野地区や、宮川支流の濁川流域に数多く分布しており、三重県内でも屈指の密集地帯の一つである。

弥生時代の遺跡は先の旧石器・縄文時代に比べその数は少なく、中流域で遺構・遺物が確認されたの



第2図 遺跡分布図(1:50,000)(国土地理院1:25,000国東山・横野)

は櫛田川右岸段丘上の花ノ木遺跡^①があるのみである。全体として弥生時代の遺跡の分布は櫛田川・宮川ともに下流域にさしかかる付近からであり、水稻耕作との関連が考えられよう。

古墳時代になると希に単独に立地する古墳が見られるものの、遺物散布地はさらに希薄になり、単独の古墳や群集墳が多く分布するのはさらに下流域の丘陵上などになってくる。

古代に於て当地域が文献上に現われるのは、まず現多気町内佐奈周辺についてのものである。それは『古事記』^②・天孫降臨段の「次手力男神者、坐_二佐那那_一也」との記事が初見で、ついで同じく開化天皇段にも「故、兄大俣王之子、曙立王。次菟上王。二柱 此曙立王者、伊勢之品遲郎君、伊勢之佐那造之祖。」という記事が見える。さらに時代は下るが、平安時代初期延暦23年(804)成立の『皇太神宮儀式帳』^③にも「佐奈乃_二県造御代宿祢_一」、また鎌倉時代中頃に成立したとされる『倭姫命世記』^④でも「次佐奈_二県造弥志呂宿祢命_一」などの記事が散見される。しかしこれらはいずれも神話・伝説的な域を出ないものであり、確実な史料といえるものではないが、平安時代前期に編集された『延喜式・神名帳』^⑤には、多気郡52座のうちこの地域周辺では「須麻漏_二壳神社_一」と「佐奈神社二座」が記されている。これらのことから考えると、佐奈を中心とする地域には「佐那_二県_一」といえるかどうかは別として、「造」級の豪族が勢力を張っていたという想定は可能であろう。

多気町の西に位置する勢和村丹生は古来より水銀の産地として知られ、『続日本紀』^⑥・文武天皇2年9月条に「伊勢国朱沙雄黄。」、同じく和銅6年(713)5月条に「伊勢水銀」などの水銀に関する記事が見えている。また『延喜式』^⑦にも、内蔵寮に「伊勢国租税水銀四百斤」、民部省に「交易者雑物伊勢国水銀四百斤」、典薬寮に「年料雑物伊勢国水銀十八斤」などの貢納に関する記事も散見し、さらに『今昔物

語』^⑧にも水銀に関わる説話がある。これらのことから丹生を中心とした地域は水銀採掘によって賑わいを見せたであろうし、『延喜式・神名帳』にも飯高郡「丹生神社」、「丹生中神社」の社名が記されている。また中世には神宮や撰関家などを本所とする「水銀座」^⑨も成立し、水銀採掘は鎌倉時代を最盛期として、室町～江戸時代と続いたが、明暦年間(1655～58)頃にはとだえたと*も*いわれている。現在でもその廃坑跡(8)は残っている。

奈良時代にはじまる神仏習合によって、各地の神社に神宮寺が併設されるようになると、当地域にも神宮寺が建立されはじめる。その代表的なものが、「逢鹿瀬寺」と「丹生神宮寺」である。逢鹿瀬寺(9)は『太神宮諸雑事記』^⑩・神護景雲元年(767)10月3日条に「逢鹿瀬寺、永可_二為_一太神宮寺_二之由_一」との記事が見えることから伊勢太神宮寺に比定^⑪されている。現在も寺跡と推定される範囲からは多数の古瓦が採集されている。丹生神宮寺(10)は平安時代初期の弘仁6年(815)に開基され、空海によって伽藍が整えられたといわれ、境内には現在でも丹生神社が鎮座している。その他、平安時代に建立された寺院としては近長谷寺(11)があり、国重要文化財の木造十一面観音菩薩像が安置されている。

中世の飯高・多気郡はいわゆる神三郡に含まれ、当地域にも神宮領である御_二菌_一・御_二厨_一が多く、内宮領の前村御_二菌_一、神坂御_二菌_一、相鹿瀬御_二菌_一などが点在し、小字地名も神田・社田・神楽田など残っているとこもある。

その他、中世を中心とする遺跡は多気町四神田周辺の山間の平地に多く見られ、ミゾコ遺跡(12)^⑫などがある。また鎌倉時代後期から室町時代に至る時期には動乱の世を反映し、山頂部や丘陵上の見通しの良好な場所には多くの城砦が築かれており、中でも近長谷城(13)^⑬はその代表的なものであろう。

(河瀬信幸)

〔註〕

- ① 三ツ木貞夫・森田尚宏ほか 『出張遺跡調査報告書』 大台町出張遺跡調査会 1979
 - ② 田村陽一ほか 「上ノ広遺跡」 『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告―第1分冊1―』 三重県教育委員会 1989
 - ③ 奥 義次 「相可牟山遺跡試掘調査略報」 『牡鹿』 2号 相可高校郷土クラブ 1963
 - ④ 田村陽一 「花ノ木遺跡」 『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告―第1分冊1―』 三重県教育委員会 1989
 - ⑤ 『古事記』 岩波日本古典文学大系本 岩波書店 1973
 - ⑥ 『皇太神宮儀式帳』 群書類従・第1輯・神祇部 続群書類従完成会 1987
 - ⑦ 『倭姫命世記』 （岩波日本思想大系本 『中世神道論』 所収）岩波書店 1986
 - ⑧ 『延喜式（前篇）』 新訂増補国史大系本 吉川弘文館 1979
 - ⑨ 『統日本紀』 新訂増補国史大系本 吉川弘文館 1979
 - ⑩ 註⑧（中・後篇）参照
 - ⑪ 『今昔物語』 岩波日本古典文学大系本 岩波書店 1972
 - ⑫ 『建久九年内宮假殿遷宮記』 続群書類従・第1輯上・神祇部 続群書類従完成会 1984
 - ⑬ 『太神宮諸雜事記』 群書類従・第1輯・神祇部 続群書類従完成会 1987
 - ⑭ 鈴木敏雄 『三重縣古瓦圖録』 樂山文庫 1933
松永恵一 「逢鹿瀬廃寺」 『歩跡』 2号 1672
岡田 登 「伊勢大神宮寺としての逢鹿瀬寺について」 『史料』 第85号 1986
 - ⑮ 『神鳳抄』 群書類従・第1輯・神祇部 続群書類従完成会 1987
 - ⑯ 増田安生 『ミゾコ遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1985
 - ⑰ 『三重の中世城館』 三重県教育委員会 1976
- その他、この項を書くに際し、下記の文献を参照した。
- ① 吉田東伍 『大日本地名辞書・上方編』（増補版） 富山房 1972
 - ② 清水正健編 『莊園志料・上巻』 角川書店 1978
 - ③ 『三重県の地名』 日本歴史地名大系24 平凡社 1983
 - ④ 『角川日本地名大辞典・24・三重県』 角川書店 1983
 - ⑤ 松田寿男 『丹生の研究―歴史地理学から見た日本の水銀―』 早稲田大学出版部 1974
 - ⑥ 『多気町史・史料集』 多気町 1991
 - ⑦ 『多気町の歴史散歩』 多気町郷土史研究会・多気町教育委員会 1989

Ⅲ. 多気郡多気町前村 佐奈水銀鉍山跡

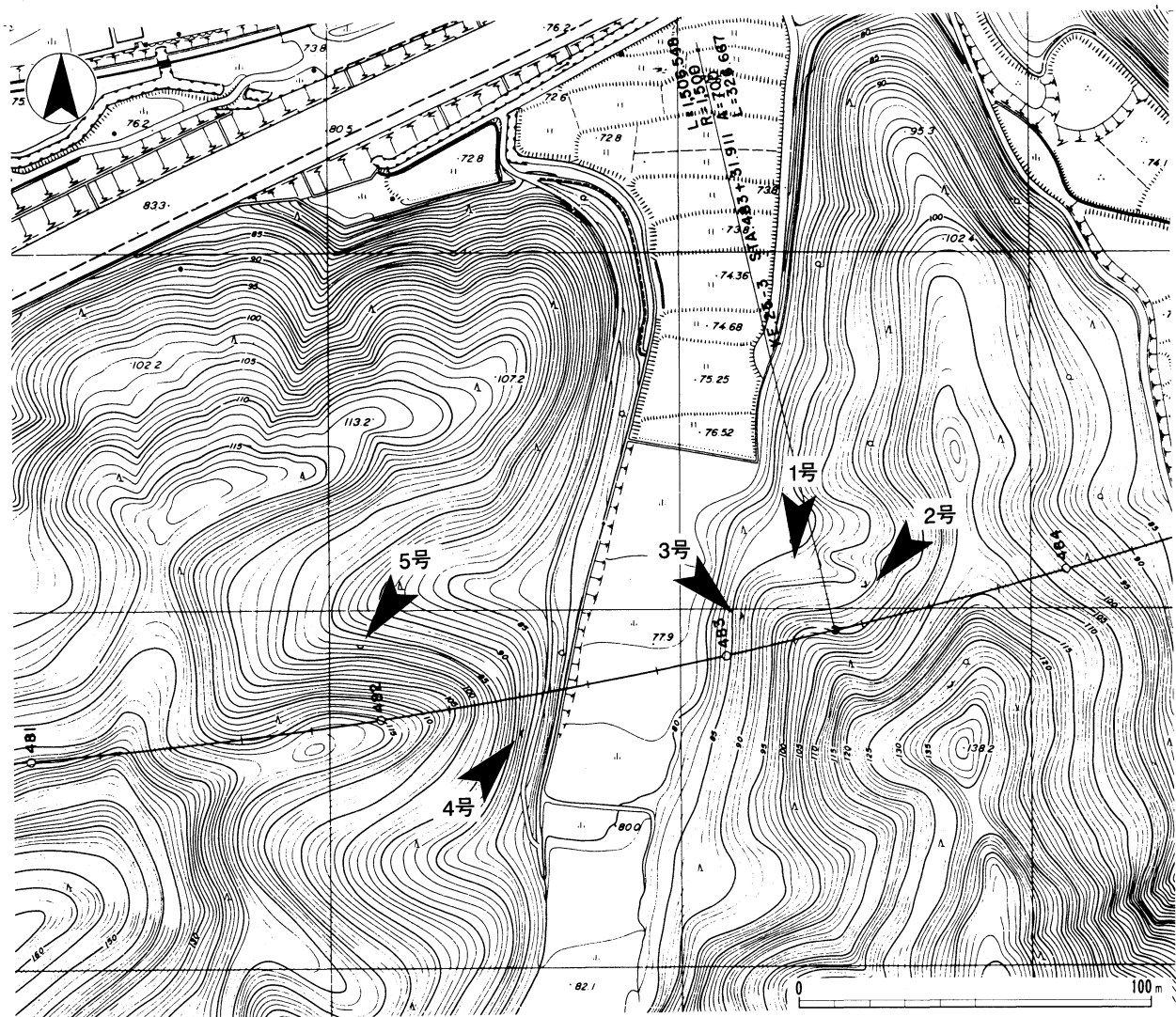
多気郡勢和村の丹生は、『和名抄』『続日本紀』『延喜式』などに伊勢国の特産物として、当時の都に水銀を献納した地であることが記され、古くから開発された水銀鉍山として著名である。この丹生の東方約3kmに佐奈水銀鉍山跡がある。行政上は多気郡多気町大字前村字井戸谷に属する。

櫛田川の支流である佐奈川に流れ込む小谷を挟んで、東西の標高85~100mの丘陵斜面に5カ所の坑口が残されている。

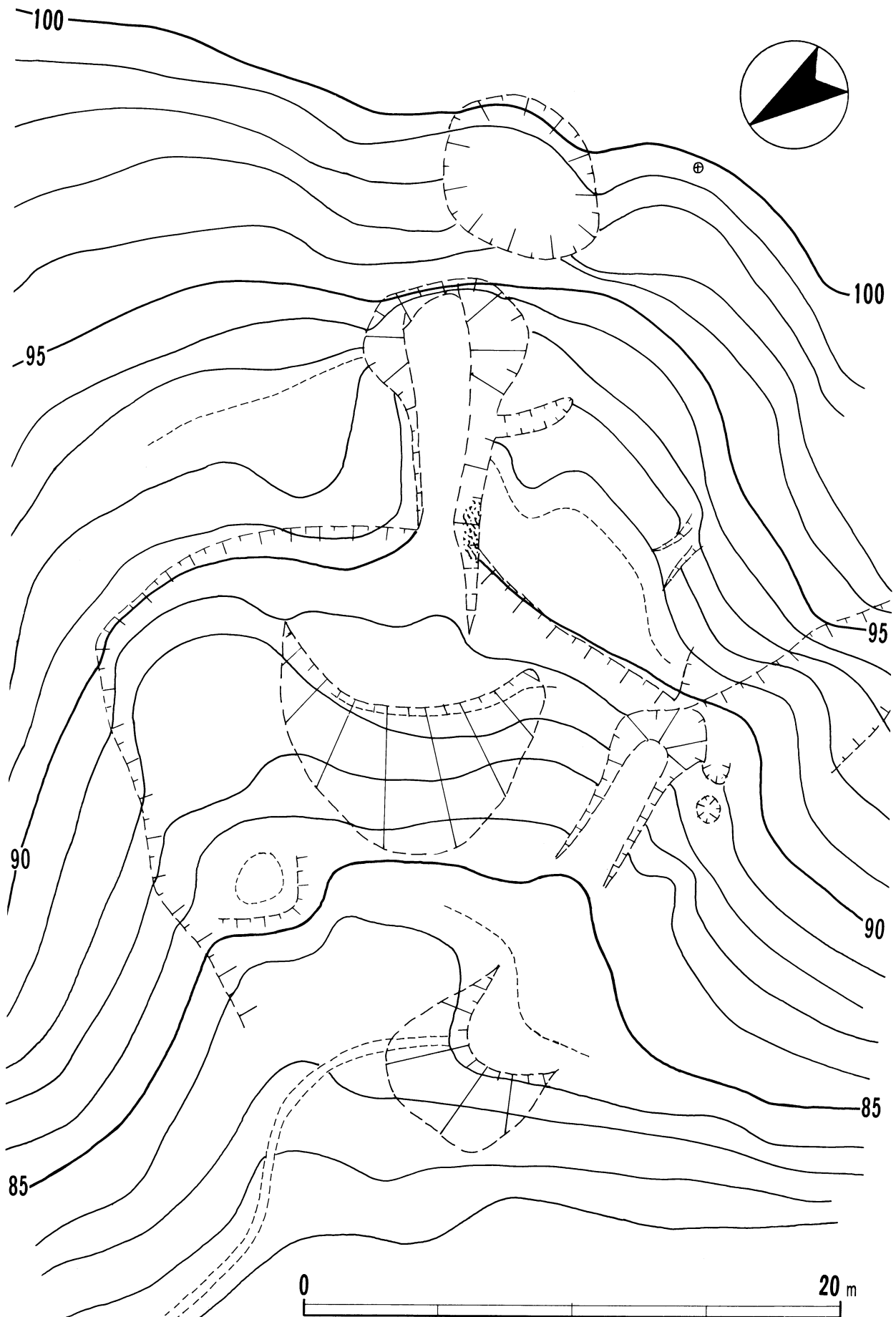
調査当初にはこの鉍山跡についての資料が得られ

ず、鉍山の開発年代等は不明であったが、最も遺存状況の良い1・2号坑口周辺を対象に、測量および写真撮影を実施した。またあわせて坑内の略測等を行った。坑口の周辺にはズリと思われる岩石片が散在したり、作業場のような平坦地がいくつか見られたほか一部に石垣も確認できたが、遺物は全く出土せず、これらの時期等については不明である。坑内については主として地質学的な見地からの調査を実施した。詳細は付編1を参照されたい。

(田村陽一)



第3図 坑口位置図 (1:2,000)



第4图 1·2号坑口付近地形測量図(1:200)

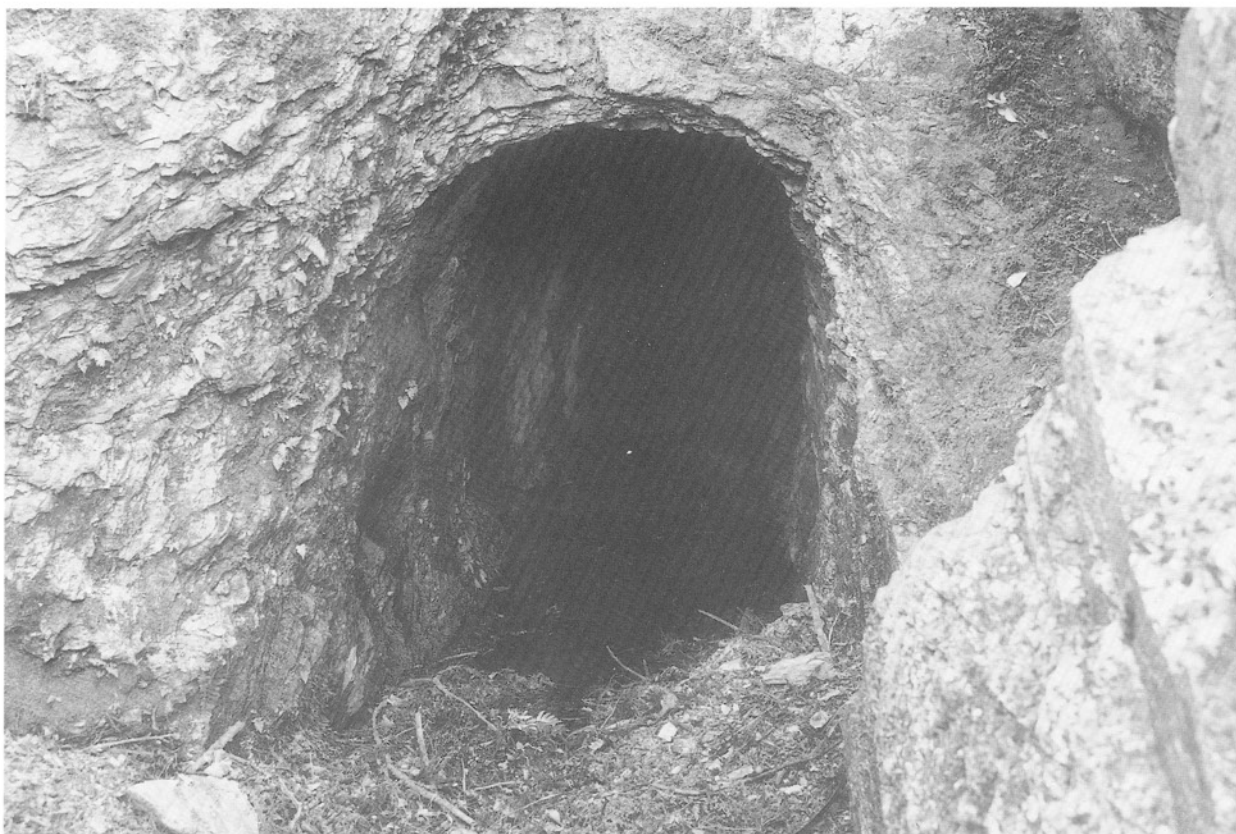


1号坑 (右) と2号坑 (左)



1号坑

PL 2



1号坑口



2号坑口

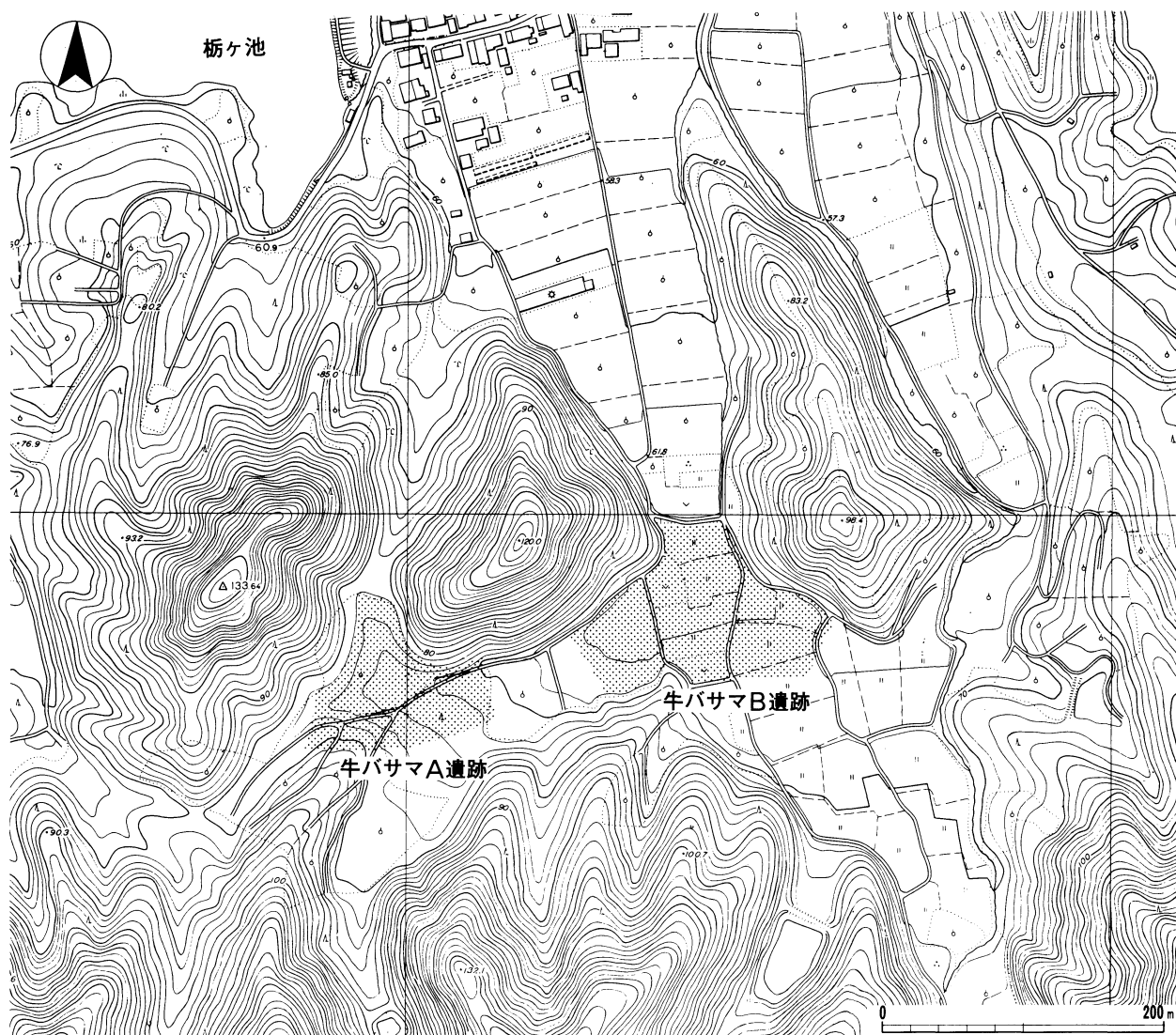
IV. 多気郡多気町野中 ^{うし}牛バサマA遺跡・^{うし}牛バサマB遺跡

1. はじめに

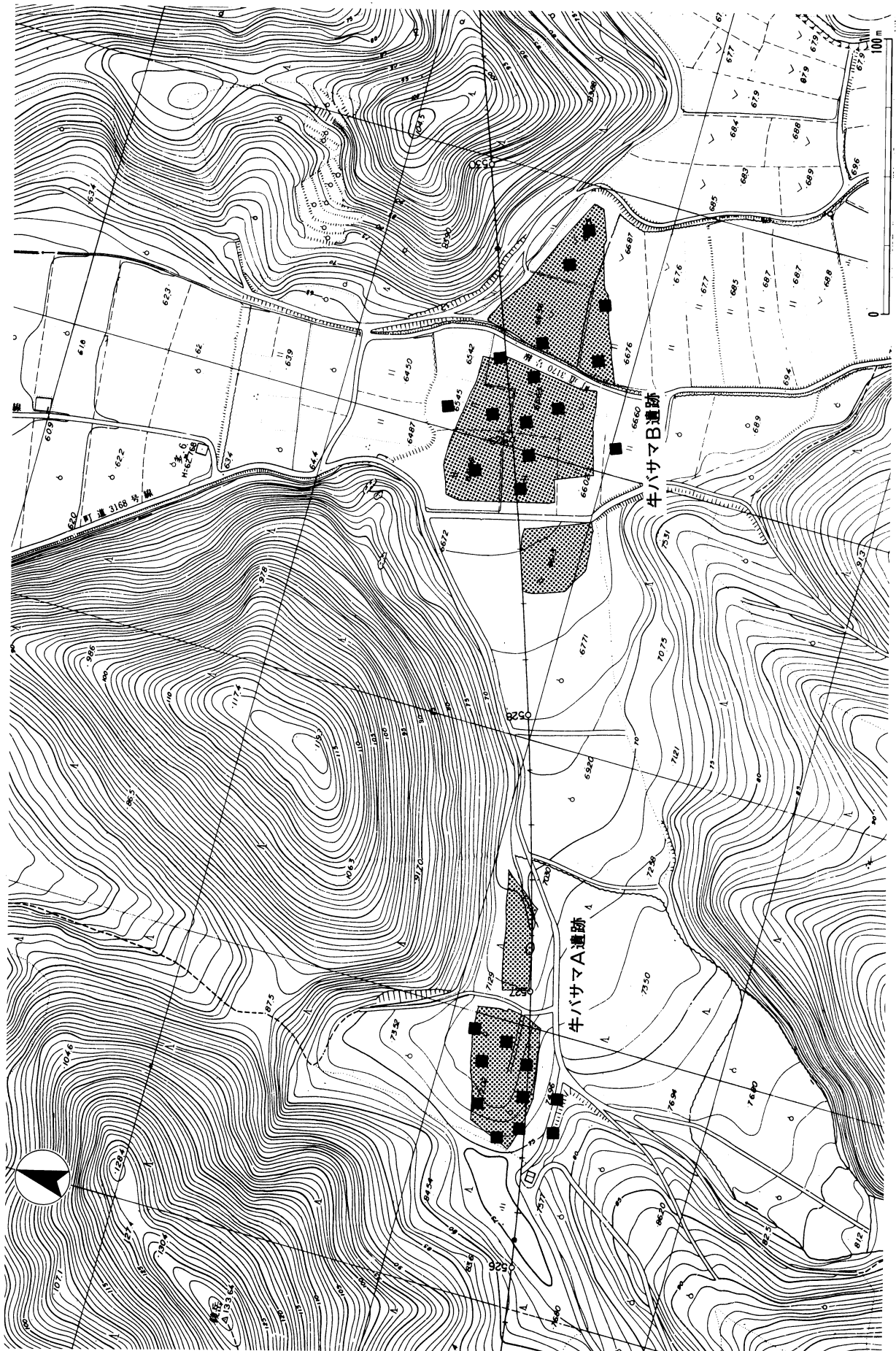
牛バサマA遺跡は多気町野中字牛バサマ・定越、牛バサマB遺跡は同じく字牛バサマ・ナルコに所在し、国東山北麓に形成された小さな扇状地のほぼ出口の部分にあたる。調査前の現状は、牛バサマA遺跡が果樹園（柿畑）、牛バサマB遺跡は水田であり、隣接する東の丘陵尾根は度会郡玉城町との町境となっている。

両遺跡は、性格をほぼ同じくする遺跡であること

が分布調査段階で予想され、遺跡名は比較的遺物散布の多い「牛バサマ」の小字名を取った。そして東に向って開けた標高70m前後の緩斜面に位置する箇所を牛バサマA遺跡、谷の終点は同じではあるものの、支流の異なる標高65m前後の斜面に位置する箇所を牛バサマB遺跡と名付けた。調査面積は、牛バサマA遺跡が約3,000㎡、牛バサマB遺跡が約5,500㎡であった。



第5図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第6図 調査区位置図 (1 : 2,000)

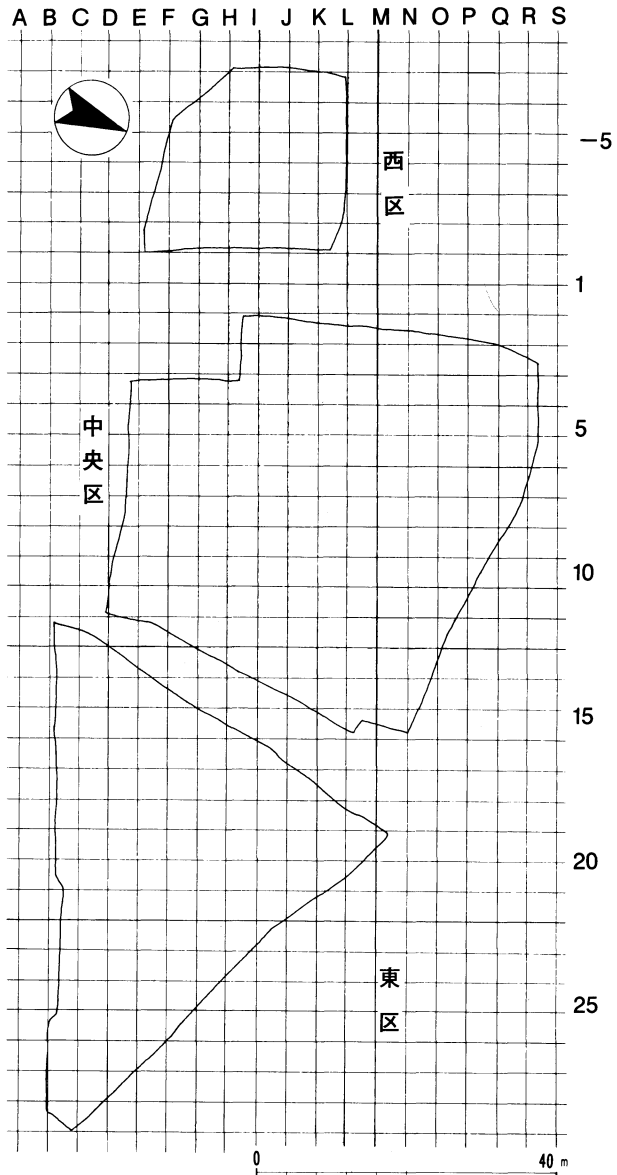
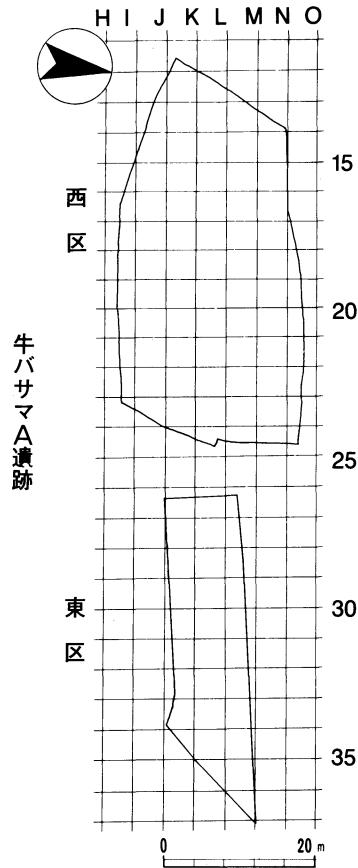
2. 調査方法

牛バサマA・Bいずれの遺跡も、農道やその他の制約により分割した調査を行わざるを得なかった。

牛バサマA遺跡は西から東へと傾斜する谷筋に位置し、谷道が通っていることから、谷道を隔てて西側を西区、東側を東区とした。地区設定はS T A 526+40・+80を基準とし、その延長線をもとに4×4 mの方眼を設定、南から北にアルファベットを、西から東へ数字を与え、南西隅を地区名とした。調査区が扇状地を横切る形となったため、伏流水対策

の排水溝を東区・西区ともに予め掘削した。

牛バサマB遺跡は、農道により3分割され、東から東区・中央区・西区と呼称し調査を行った。地区設定はS T A 528+80とS T A 529+60を基準とし延長線をもとに4×4 mの方眼を設定、南から北にアルファベットを西から東へ数字を与え、その南西隅を地区名とした。牛バサマA遺跡と同じく湧水に対する心配があったが、比較的湧水も少なく調査は順調に進められた。



第7図 地区割図 (1 : 1,000)

うし 3. 牛バサマ A 遺跡

(1) 遺 構

東区・西区のいずれも検出された遺構は少ない。西区で検出された主な遺構は、古墳時代の土坑1基、奈良時代の土坑1基、その他時期不明の溝2条、及びピット群などである。基本的な層序は、発掘区西寄りでは砂質土が2～4層に分かれ厚く堆積しているのを除けば、上から礫を含む砂質土（柿畑の置土）、旧耕作土を含むやや明るい灰色の粘質土の大きく2つに分かれる。

東区で検出された主な遺構は、時期不明の浅い溝が4条検出されたのみであった。基本的な層序は、東寄りでやや幾層にも分かれるものの、上から褐色の砂質土、灰色がかかった粘質土と大きく2つに分かれる。東区・西区とも丘陵尾根の裾部にあるために、その土層は土質の似通う幾層もの堆積になっているが、基本的にはいずれも大別すれば2層に分けることができる。

この項では、以下に西区で検出された主な遺構について述べたい。

A. 土坑

SK1 長径1.4m、短径1.0mの楕円形を呈し、深さは5～12cmと浅い。古墳時代前期と考えられ、S字状口縁台付甕片（5）が出土している。

SK2 長径2.9m、短径2.4mの楕円形を呈し、深さは10cmと浅い。奈良時代と考えられ、須恵器杯蓋片（11）が出土している。

B. 溝

SD3 幅約1.2m～3.5mで、深さは6～15cmと浅い。流れは、西から向い、ほぼ直角に折れて北に向っている。比較的しっかりした溝であり、自然流路的なものとは考えがたい。出土遺物がほとんどないために時期不明である。

SD4 幅0.9m～8.0m、深さ25～35cmの溝である。西から東へ流れており、検出状況から自然流路と考えられる。底から鎌倉時代に属する山茶碗底部が出土した。

(2) 遺 物

出土遺物はコンテナに6箱程度で、破片が多い。しかし、各時代少量ながら縄文時代をはじめ、古墳時代～近世にかけての土器が出土している。西区からの出土のものが大半を占めるが、遺構出土は少なく、そのほとんどが包含層出土のものである。

A. 遺構出土の遺物

①SK1 出土の土器 S字状口縁台付甕の口縁部片（5）が出土している。推定口径16cmで、口縁端部の外反はやや弱い。頸部内面に櫛目が残り、頸部外面には、櫛目が、肩部には平行線文が施されている。胎土は細砂粒をやや含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。安達分類のⅡ類^①に属し古墳時代前期ものと考

えられる。

②SK2 出土の土器 須恵器杯蓋片（11）が出土している。口径その他は不明だが、若干のつまみ痕跡が残る。色調は青灰色を呈する。奈良時代前期のものであろう。

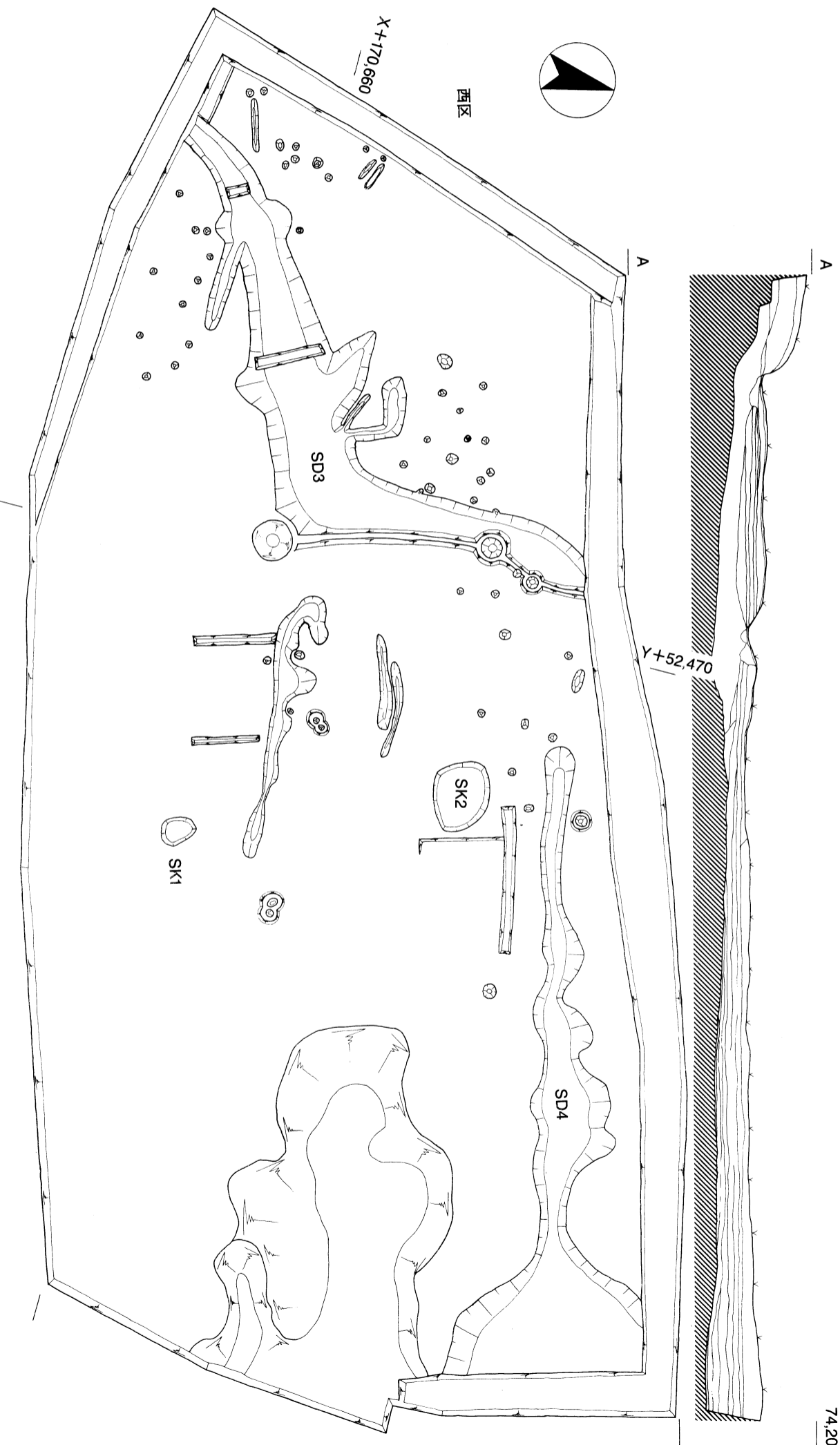
③SD4 出土の土器 山茶碗底部（19）が出土している。高台径は推定6.5cmで、低くつぶれている。色調はにぶい灰白色を呈する。鎌倉時代のものであろう。

B. 包含層出土の遺物

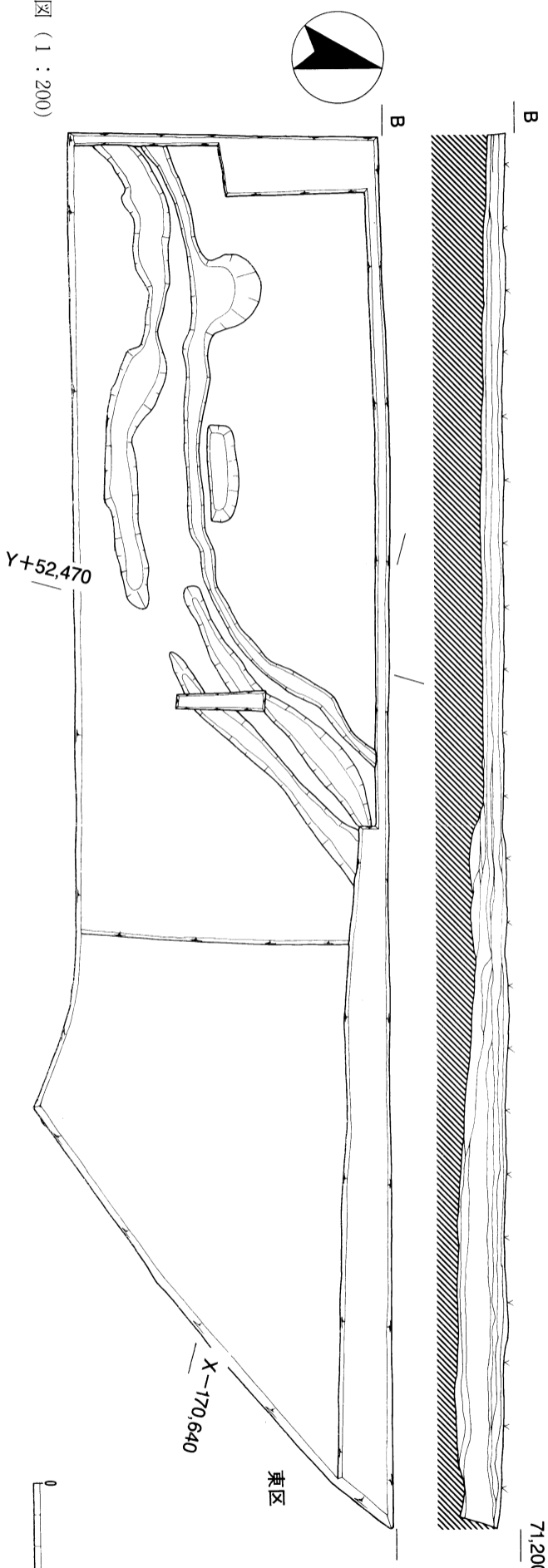
① 縄文・弥生時代の土器

縄文土器（1～4） 1は早期のもので、外面は

74,200m



71,200m



第8图 东区·西区遺構平面図 (1:200)

風化のためによくわからないが、内面には斜行沈線が施される。胎土は細砂粒を含み、色調はにぶい褐色を呈する。2は竹管による刺突文が施される。胎土は細砂粒が、また繊維も含まれる。色調は淡黒褐色を呈する。早期末に属すると考えられる。3は縄文が施され、沈線で区画されたもので、中期のものであろう。4は底部のみの出土である。晩期頃と考えられるが、弥生時代に下る可能性もある。

② 飛鳥時代の土器

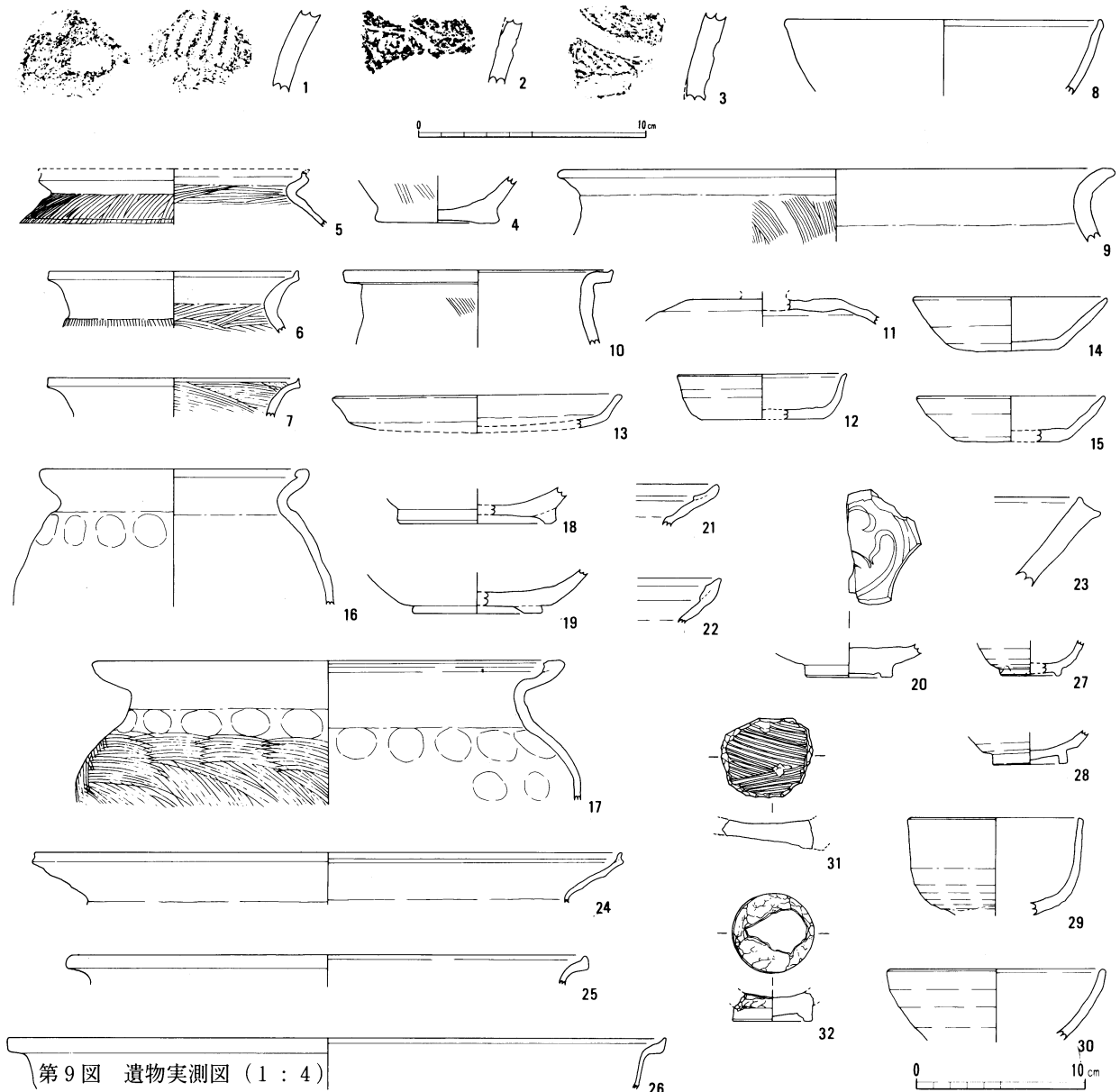
土師器甕 (6・7) 6は推定口径14.6cm、口縁部は「く」字状に外反し、端部はつまみ上げられている。体部内外面ともにハケ目調整が施され、口縁部はハケ目調整のあとヨコナデされている。胎土は粗砂粒を含むが、焼成は良好で、色調は淡黄褐色を

呈する。7も6と同じように「く」字状に外反する口縁部をもつと考えられる。口径は14.8cmと推定され、口縁部内面にはハケ目調整が残る。

③ 奈良時代の土器

土師器杯 (8) 推定口径18.4cmのやや大ぶりの杯である。口縁部はヨコナデされ端部はやや内傾する。胎土は良く、色調は橙褐色を呈する。

土師器甕 (9・10) 9は推定口径32.6cmの大形の甕片である。体部はハケ目調整されているが残り悪い。口縁部はゆるやかに外反し、ヨコナデされている。焼成は甘く、色調は淡橙褐色を呈する。10は推定口径15.8cmで、頸部は直立、口縁部はほぼ水平に外反し、端部はややつまみ上げられている。頸部外面にはハケ目調整が若干残っており、口縁部は



第9図 遺物実測図 (1 : 4)

ヨコナデされている。胎土・焼成とも良く、色調は黄褐色を呈する。

須恵器杯 (12) 口径は9.6cmと推定され、色調は暗青灰色である。ロクロ回転方向は時計まわりである。

④ 平安時代の土器

土師器皿 (13) 推定口径16.8cm、口縁部はヨコナデされ、底部外面はユビオサエ及びナデである。胎土、焼成とも良く、色調は橙褐色を呈する。

須恵器杯 (14・15) 14は口径11.2cm、15は口径11.0cmと推定される。いずれも口縁部は直線的に外方に開き、ロクロ回転方向は時計まわりである。色調は14・15ともに青灰色を呈する。

土師器鍋 (16・15) 16は推定口径15.6cm、口縁端部は丸く折り返され、口縁部はヨコナデされている。体部内外ともにナデが施されているが頸部付近には指頭圧痕が残る。胎土はやや粗いが、焼成は良く、色調は淡黄橙褐色を呈する。15は口径29.4cmと推定される。口縁部は強く外反し、頸部は内傾気味に立ち上がる。口縁端部は折り返され、ヨコナデによる稜線が見られる。体部内面はユビオサエされ、外面は頸部に指頭圧痕が残り、体部にハケ目調整が施される。胎土は粗く、色調は褐色を呈する。新田分類では15が3類に、16は5類に属すると考えられる。

⑤ 鎌倉時代～室町時代末期の土器

山茶椀 (18) 底部のみであるが、高台径は8.8cmと推定され、色調は淡白灰色を呈する。鎌倉時代前期頃のものであろう。

磁器碗 (20) 底部のみの出土で、内底見込みに

は意匠不明の片彫りが施されている。龍泉窯系と考えられ13世紀中頃に比定できよう。

土師器鍋 (21・22) いずれも小片で全体は不明である。口縁端部の折り返しは、21は薄く、22は厚い。色調は21が灰黄褐色、22はにぶい橙褐色で、胎土はいずれも細砂粒を含み、外面には煤が付着している。21・22ともに新田分類の6類と考えられる。

陶器鉢 (23) 口縁部のみであるが、常滑産の播摺鉢で、16世紀前半頃のものであろう。

土師器鍋 (24・25・26) 24は推定口径34.8cmで、口縁端部は小さく折り返され、つまみ上げられている。胎土は細砂粒を含み、焼成はやや甘い。25は推定口径30.4cm、26は推定口径40cmで、いずれも口縁部は短く水平に外反し、端部はつまみ上げられている。胎土、焼成とも良く、色調は橙褐色を呈する。いずれも器壁は薄く、新田分類では24が7類、25・26は8類に属すると考えられる。

⑥ 江戸時代の土器

陶器 (27～32) 27は高台径が3.4cmと推定される淡黄緑色の灰釉がかかった小碗である。28は高台径4.4cmの天目茶碗底部である。鉄釉がかかり、ロクロ回転は時計まわりである。29は内外面に鉄釉のかかった推定口径10cmの丸碗である。30は推定口径12.6cmで、濃緑色の釉薬がかかった平茶碗である。31は播鉢の高台部に近い体部を円形に加工したもので、32は天目茶碗の底部を円形に加工したものである。31を除き、いずれも胎土は精良で、焼成も良好である。これらは瀬戸・美濃系に属すると考えられ、28と29は18世紀頃のものである。また、31・32は円形加工陶磁製品^②と呼称しているものである。

(3) 小 結

牛バサマA遺跡で検出された遺構は少なく、また時期のわかる遺構も数ヶ所にとどまる。しかし、出土した土器は量こそ少ないものの、縄文時代から、古墳～近世までのものが出土しており、このことは断続的ではあるが、各時代にわたる生活の場が遺跡周辺に小規模ながらも存在した可能性を示している。東に隣接する牛バサマB遺跡では、鎌倉時代後期の掘立柱建物3棟などの遺構が検出されており、

小規模ながらも集落の存在が確認されている。牛バサマA遺跡はこうした小規模な集落の周辺が縁辺に相当するものと考えられる。牛バサマA・B遺跡は、いずれも標高の低い山々に囲まれた山間に立地している遺跡である。このような遺跡は比較的に見過ごされがちな存在であったが、今回の調査により各時代にわたる土器の出土や、遺構が確認されたことは、今後これに類する遺跡を調査する際の指針を与え

てくれるとともに、その性格を解明する上での好資料を提供してくれているといえよう。

(山崎恒哉・河瀬信幸)

〔註〕

- ① 木下正史・安達厚三 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号 1974
以下、出土土器の時期 判断は次の文献等による。
○中村浩編 『陶邑』Ⅲ 大阪府文化財調査報告書第30 大阪文化財センター 1980
○「斎宮跡の土師器」『三重県斎宮跡調査事務所年報』 1984
○横田賢次郎・森田勉 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978

- 新田洋 「平安時代～中世における雑炊用具－「伊勢型」鍋－に関する若干の覚書」『三重考古学研究』Ⅰ 1985
○藤澤良祐 「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」Ⅰ 瀬戸市歴史民俗資料館 1982『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ 瀬戸市歴史民俗資料館 1987
② 山崎恒哉 「円形加工陶磁製品について」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅵ 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990

うし

4. 牛バサマB遺跡

(1) 遺 構

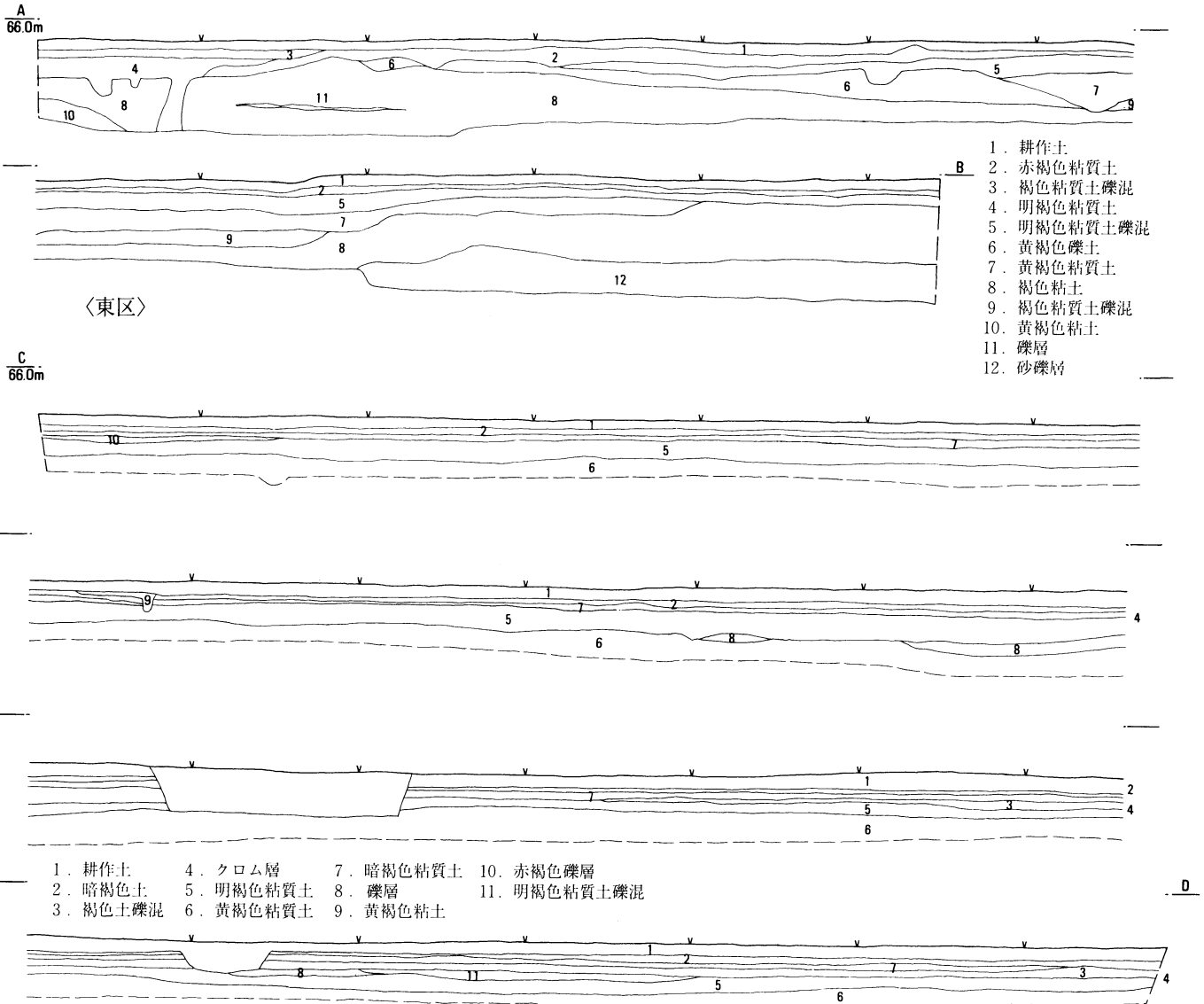
牛バサマB遺跡は牛バサマA遺跡の東約150mに位置する。調査区は東西に広がり、調査面積は約5,500㎡である。農道によって三つに分かれているため、便宜的に西区・中央区・東区と呼称し調査を行った。

主な遺構としては、西区では調査区を西から東へ縦断する溝が2条、中央区では掘立柱建物が3棟、

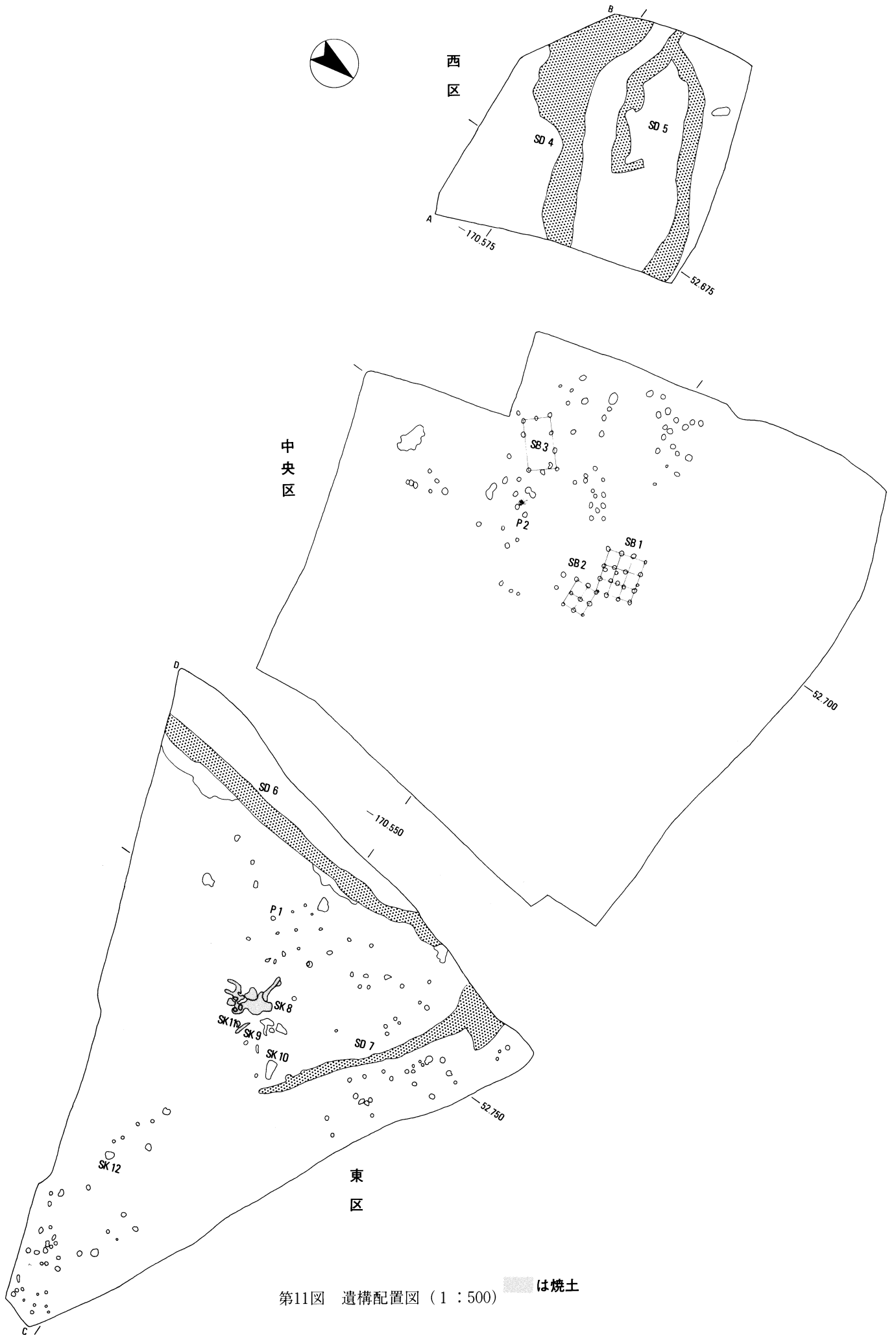
〈西区〉

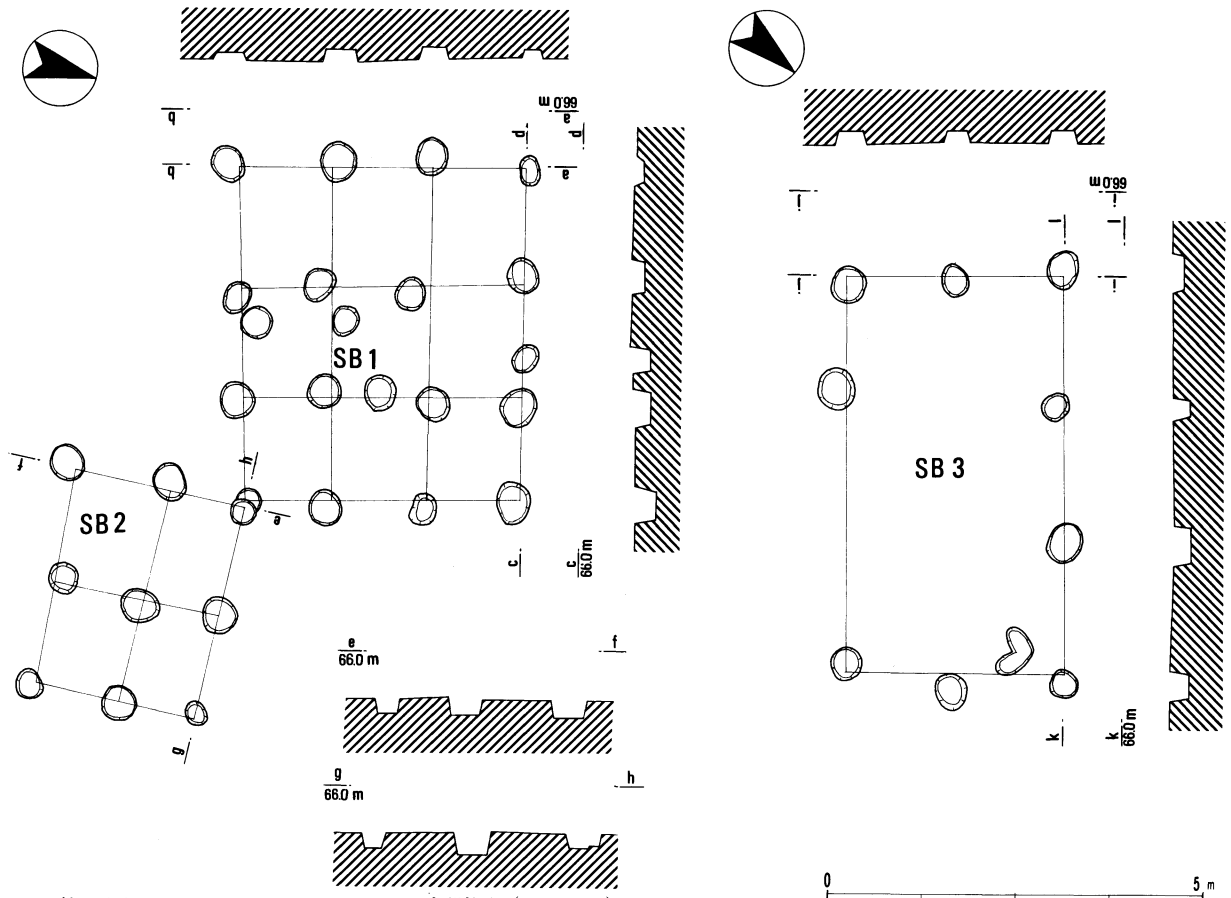
東区では溝が2条、土坑3基が検出された。

土層の基本的な層序は、東区・中央区においては地表から耕作土・床土・礫混褐色土・礫混褐色粘質土・砂礫土の順で、遺構検出は礫混褐色粘質土上面で行った。西区は礫混褐色粘土の上面で検出を行った。以下、地区別に述べる。

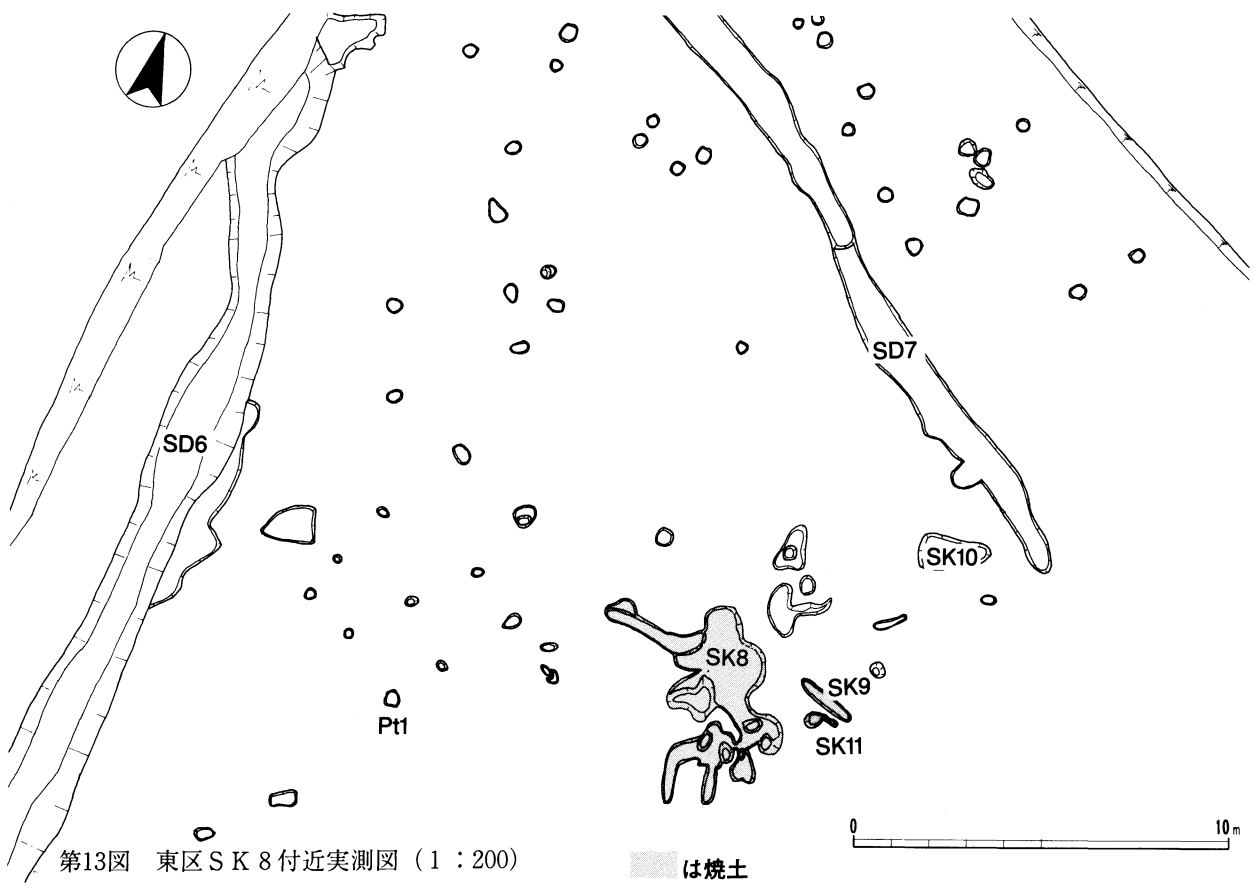


第10図 土層断面図 (1 : 100)





第12図 SB1・SB2・SB3実測図 (1:100)



第13図 東区SK8付近実測図 (1:200)

① 西区の遺構

A. 溝

SD4 幅2.0～6.5m、検出面からの深さは10cm前後で浅い。埋土は礫混暗褐色土である。出土遺物はない。

SD5 西端で二股に分かれる。南側の溝は幅0.7m～1.9m、検出面からの深さは20cm前後である。北側の溝は幅1.2～2.5m、検出面からの深さは20cm前後である。埋土は暗褐色土で礫を含む。出土遺物はない。

② 中央区の遺構

A. 掘立柱建物

SB1 3間×3間の総柱建物で、発掘区のほぼ中央に位置する。桁行4.4m、梁行3.8m、柱間は桁行で1.3m+1.5m+1.6m、梁行で1.3m+1.2m+1.3mである。棟方向はE20°Nである柱堀形は直径30～50cm前後と大きく、検出面からの深さは14～26cmで根石はない。埋土は礫混褐色土である。6箇所の柱穴から土師器鍋(23)片等が出土した。南東隅の柱穴がSB2の北西隅柱穴と重複する。

SB2 2間×2間の総柱建物で、SB1の南東に重複して位置する。桁行2.9m、梁行2.3m、柱間は桁行で1.5m+1.4m、梁行で1.1m+1.2mである。棟方向はE10°Nである。柱堀形は直径30～50cm前後と大きく、検出面からの深さは19～33cmで根石はない。埋土は礫混褐色土である。3箇所の柱穴から土師器片が出土した。

SB3 3間×2間の建物で、SB1から南西約10mに位置する。桁行5.4m、梁行2.9m、柱間は桁行北側柱で1.7m+1.8m+1.9m、梁行西側柱で1.4m+1.5mである。棟方向はE50°Nである。柱堀形は直径40～50cm前後と大きく、検出面からの深さは15～38cmで根石はない。埋土は礫混褐色土である。4箇所の柱穴から土師器片が出土した。

B. その他の遺構

P2 SB3の東5mに位置し、長径52cmのほぼ円形を呈する。検出面からの深さは23cmある。埋土は礫混褐色土である。土師器小皿(22)片等が出土した。

③ 東区の遺構

A. 溝

SD6 幅2.0m前後、検出面からの深さは60cm前後の溝で、西端を南北に縦断する。埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物としては土師器銅片等がある。

SD7 幅1.0～5.6mの東西方向へ走る溝で、西壁付近が最も広い。検出面からの深さは20cm前後である。埋土は暗褐色粘質土である。山茶椀(53)の底部や土師器皿片等が出土した。

B. 土坑

SK8 ほぼ中央に位置し、平面形は最長6mの不定形を呈する。検出面からの深さは10～20cm前後で、底部に起伏がある。埋土は焼土である。焼土中から土師器杯(28)・皿(33)が出土した。

SK9 SK8の東約1mにあり、平面形は長径1.7m、短径0.4mの長円形を呈する。検出面からの深さは20cm前後で、底部は平坦である。埋土は焼土である。焼土中から土師器杯(29・30)・甕(35)が出土した。

SK10 SK8の北東約4mに位置する。平面形は長径1.0m、短径0.7mの長円形を呈する。検出面からの深さは16cm前後で、底部は平坦である。埋土は暗褐色土である。土師器皿(32)等が出土した。

SK11 SK9の南約1mに位置し、平面形は最長88cmの不定形を呈する。検出面からの深さは16cmである。埋土は焼土である。焼土中から土錘(40～49)が出土した。

SK12 SK8の東約40mに位置する。平面形は直径96cmのほぼ円形を呈する。検出面からの深さは約10cmである。埋土は礫混褐色土である。ほぼ完形の土師器甕(34)が出土した。

C. その他の遺構

P1 SK8の西約10mに位置する。平面形は直径44cmのほぼ円形を呈する。検出面からの深さは12cmである。埋土は灰褐色粘土で炭化物をわずかに含む。製塩土器(36・37・39)が出土した。

(2) 遺物

出土量は整理箱で約10箱であった。それぞれの他区で特色があるため、以下地区別に記す。

1. 西区出土の遺物

南東を中心に全て包含層からの出土である。石製品は早期の縄文土器と同じ礫混褐色土層から出土した。

A. 包含層出土遺物

① 縄文時代の遺物

縄文土器

1～13は早期の高山寺式と思われる押型文土器である。深鉢底部の13と口縁部の一部である5以外は部位は不明である。胎土は比較的良く焼成も良い。色調は外面が赤褐色(1～3、6～9、13)、暗褐色(5・11)、明褐色(12)を呈し、内面は明褐色(1～3・5・10・11)、赤褐色(6・8・9)、褐色(4)、暗褐色(7・12・13)を呈する。

14は早期の鵜ヶ島台式土器と思われる。器種や部位は不明である。外面には細い隆帯文が施され、内面に条痕がある。胎土、焼成は良い。色調は外面が黄褐色、内面が褐色を呈する。

15・16は早期の条痕文土器と思われる。器種や部位は不明である。胎土は比較的良く焼成も良い。色調は外面が赤褐色(15)と褐色(16)、内面が黒褐色(15)と褐色(16)を呈する。

17は早期の捺糸文土器と思われる。器種や部位は不明である。胎土・焼成は良い。色調は外面が明赤褐色、内面が暗褐色を呈する。

18は中期の小竹管刺突文土器の口縁部と思われる。竹管による刺突隆帯文が施されている。胎土・焼成は良い。色調は外面が褐色、内面が赤褐色を呈する。

石製品

有孔石製品(20) 材質が結晶片岩で、縦16.5cm、横9.8cm、厚さ約1.0cmの若干反った薄い板状を呈する。孔の径は約1.0cmである。色調は青灰色を呈する。

剝片(19) チャート製で二次調整が見られる。

最大長2.6cm、最大幅1.9cm、最大厚0.6cmである。

② 古墳時代の遺物

台付甕(21) 台部が南西の包含層から出土した。内面ナデ、外面ケズリ調整が施され、胎土、焼成は良い。色調は内外面明褐色である。外面に煤が付着する。

2. 中央区出土の遺物

掘立柱建物の柱穴や付近のピットから鎌倉時代後半から室町時代にかけてと思われる土師器小皿(22)・鍋(23)の細片が出土した。また、建物周辺の包含層から青磁碗(24・25)、陶器茶碗(27)や土師器鍋・小皿が少量出土した。

A. 包含層出土遺物

① 鎌倉時代の遺物

土師器

小皿(22) 口縁部を1/8残す。器高は1.7cmである。胎土、焼成は良い。色調は灰白色を呈する。

鍋(23) 口縁端部を残す。口径、器高は不明である。口縁端部を内側へ折り返し、強いヨコナデを施す。胎土は砂粒を含む。焼成は良い。色調は灰白色である。

磁器

青磁器(24～26) 24は低部を1/3、25・26は口縁部の一部を残す小片である。24は台径6.0cmの削り出し高台で、見込みに草花文、外面に蓮花文が施される。釉は縁灰色を呈する。龍泉窯系と思われる。25は口縁端部が鋭く外反する。施文はなく、釉は縁灰色を呈する。26は口縁端部が外反し玉縁状を呈する。施文はなく、釉は灰オリーブ色を呈する。東海道遺跡に類例^①を見ることができる。

② 桃山時代の遺物

陶器

黄瀬戸茶碗(27) 口縁部1/4が残存する。口径は約16cmである。胎土は良いが焼成はやや軟である。明黄灰色の釉が施される。

3. 東区出土の遺物

A. 遺構出土遺物

区内東寄りのSK12から弥生時代のものと考えられる台付甕(34)が出土した^②。

焼土が埋土であるSK8・9・11からは平安時代前期の土師器杯(28~30)や皿(33)、甕(35)、製塩土器(38)、土錘(40~49)が出土した。

SK8から北東に約4m離れたSK10からは土師器皿(32)が、南西に約5m離れたP1からは、製塩土器(36・37・39)が出土した。焼土出土のものと同様に^③。

また、SD7から平安時代前期と思われる皿や平安時代末期と思われる山茶椀(53)の底部等が出土した^④。

① 弥生時代の遺物

台付甕(34) 口径10.8cm、台部が欠損する。口縁部は「く」字形に短く外反し、無文でやや肩がはる。外面はハケメ、内面はナデ調整が施されている。胎土は砂粒を含む。焼成はやや軟である。色調は淡茶灰色を呈する。外面に煤が付着する。

② 平安時代の遺物

土師器

杯(28~30) 口径約14cm~約18cm、器高は28が2.7cm、29・30は不明である。口縁部はヨコナデされ、内面はやや粗いナデ、外面は指オサエされる。30には内面に斜放射状暗文が認められる。胎土、焼成は良い。色調は明赤褐色を呈する。

皿(32・33) 口径は約16cm、器高は約2.5cmである。口縁部はヨコナデされ、外面はナデ、外面指オサエされる。胎土、焼成は良い。色調は32が褐色を呈し、外面に煤が付着する。33は内面が黒く外面は明赤褐色を呈する。

甕(35) 口径18.0cm、器高は不明である。口縁部はヨコナデされ外反する。胴部外面はハケメ(2本/cm)が施され、底部近くにヘラケズリがなされる。胎土、焼成は良い。内外面に煤が付着する。色調は明灰褐色を呈する。

製塩土器(36~39) いずれも残存が少ないため口径、器高は不明で、外面は指オサエにより指頭圧痕が残り、内面はナデられている。胎土は0.5~3.0mmの小石を含み、焼成は軟である。色調は褐色を呈する。38は体部、36は体部立ち上がり部分、37・39

は体部から口縁部にかけての部分が残存する。

陶器

山茶椀(53) 台径7.0cm、口径・器高は不明である。ロクロ成形で、糸切り痕が残る。腰部から体部にかけて丸みをもつ。高台は雑な貼り付けで、端部はややつぶれて、粉殻痕が残る。胎土、焼成は良い。色調は明灰色を呈する。

土製品

土錘(40~49) ピット中より一括出土したものである。すべて両端がすぼまり中央部がふくらむ細長いもので、長さは3.6~5.5cmで大小さまざまである。すべて外面ナデ成形で、胎土、焼成は良く、色調はにぶい橙色を呈する。

B. 包含層出土遺物

北西からは土師器鍋(50)、青磁椀(54)、白磁椀(55)が出土した。北寄りからは土師器杯(31)や灰釉陶器(52)、灰釉皿(51)が出土した。

① 平安時代の遺物

土師器

杯(31) 口径約16cm、器高3.3cmである。口縁部はヨコナデし、内外面ナデの調整である。胎土、焼成は良く、色調は淡黄色を呈する。

陶器

灰釉陶器(52) 台径7.0cm、口径・器高は不明である。高台はケズリダシしている。

② 鎌倉時代の遺物

土師器

鍋(50) 口径約28cm、器高は不明である口縁部をヨコナデし、その端部を内側に折り返す。胎土は1mm大の石英、砂粒を含む。焼成は良い。色調は褐色を呈する。

磁器

青磁椀(54) 小片で内面に2本の沈線と草花文らしきものが施される。色調は灰緑色を呈する。

白磁椀(55) 小片で施文はない。口縁端部が鋭く外反する。色調は白色を呈する。

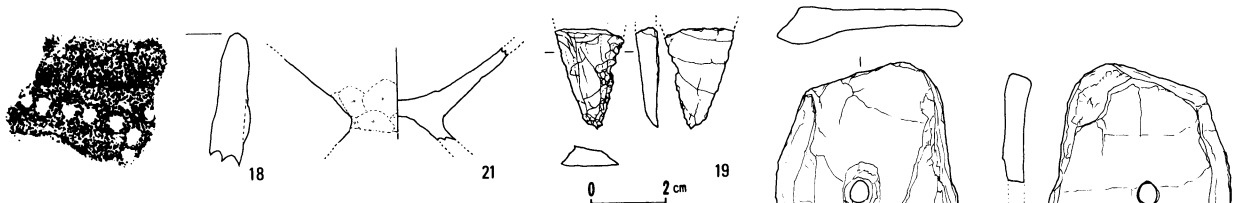
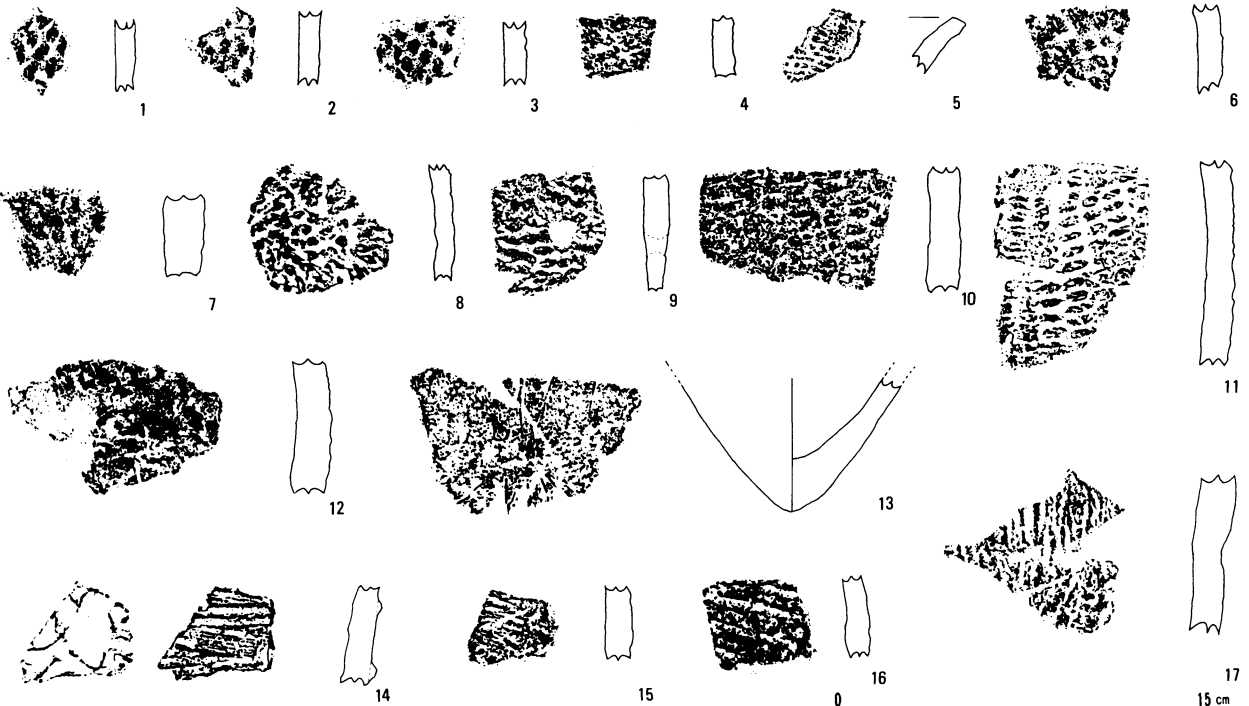
③ 江戸時代の遺物

陶器

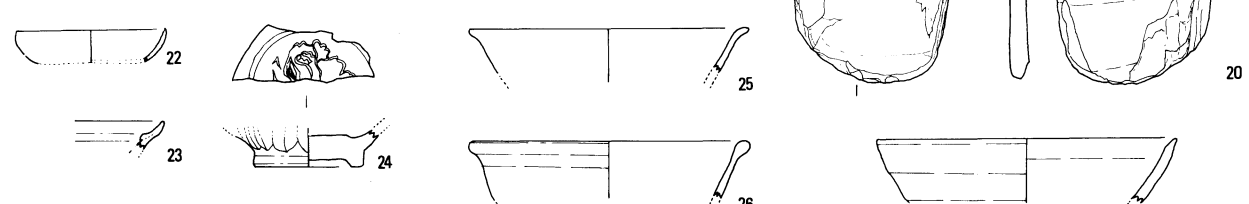
灰釉皿(51) 口径9.2cm、器高1.8cm、台径5.0cmである。ロクロナデ成形で糸切り痕が残る。高台はケズリダシしている。釉は見込み部分が蛇ノ目にはぎ

とられている。釉の色調は灰オリーブ色を呈する。

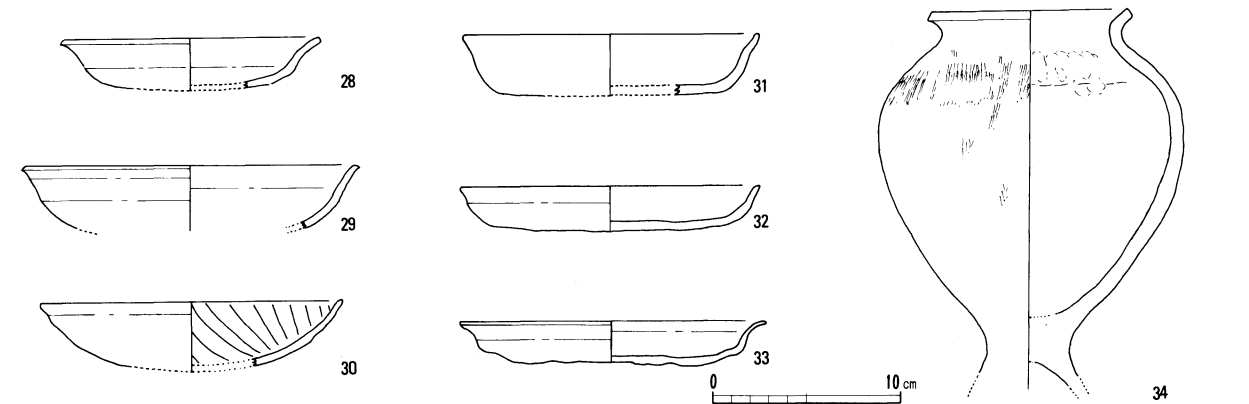
<西 区>



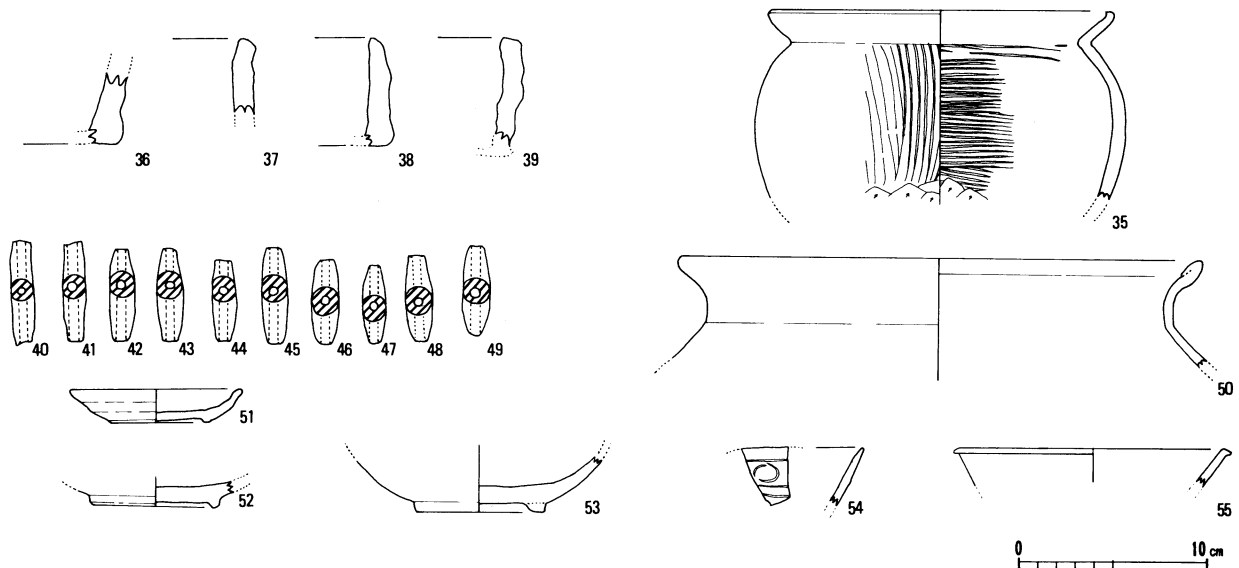
<中央区>



<東 区>



第14図 出土遺物実測図 (1~18は1:3、19は1:2、20~34は1:4)



第15図 出土遺物実測図（1：4）

(3) 結 語

ここでは、各地区の遺構について若干ふれままとしたい。

(1) 西区

溝SD4・5の時期は、付近の包含層から早期の縄文土器片が出土しているものの、溝出土の遺物がないため不明である。その溝については東西に延びることが推測されるが、東側にあたる中央区や東区とは遺構検出面が違うため同定できない。西側にあたる牛バサマA遺跡の西区では包含層から当地区と同時期の早期の縄文土器が少量出土し、溝も2条検出されているが、同一の溝とは断定できない。

(2) 中央区

掘立柱建物SB1・SB2・SB3が検出された。出土遺物は鍋が新田編年の第6類^⑤に、小皿が新田編年の第Ⅲ期A^⑥に比定される。時期は鎌倉時代後半

から室町時代前半に相当すると思われる。柱穴が一箇所重複しているSB1とSB2の新旧関係はその切り合い関係からSB1の方が古い。また、SB1とSB2については、柱掘形が大きく総柱建物であることから倉庫として利用された可能性も考えられる。

(3) 東区

溝2条、土坑3基と一定数のピットが検出されたが建物跡は見られなかった。

溝SD6・7からはいずれも平安時代前半から鎌倉時代前半にかけての遺物が出土していることから同時期の溝で、少なくとも平安時代前半から鎌倉時代前半の間は存在していたことがうかがえる。

土坑SK8・9・11については平安時代前半の遺物が出土していることから、平安時代前半のものと考えられる。

(江尻健・角谷泰弘)

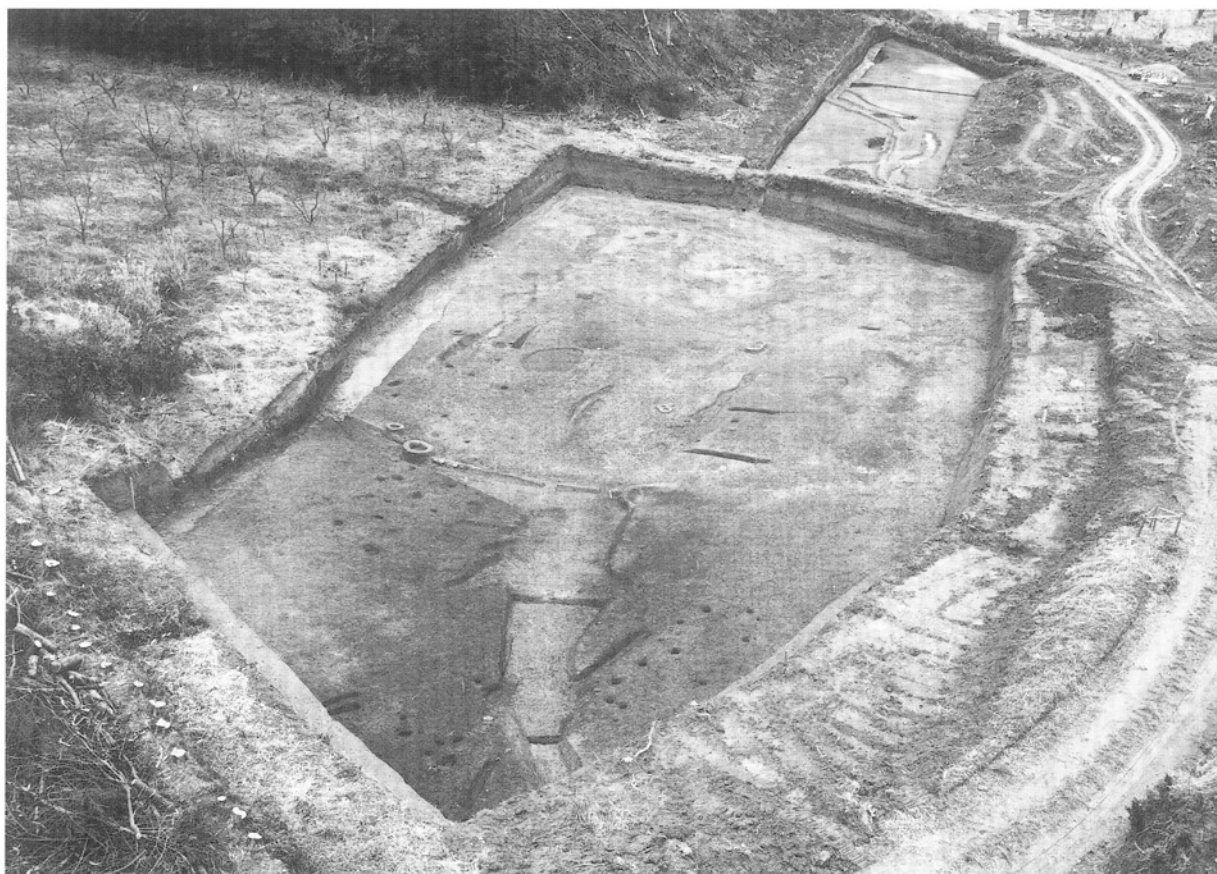
〔註〕

① 伊藤裕偉「磯部大王自転車道整備事業に伴う東海道跡発掘調査報告」三重県教育委員会 1989.3
 ② 「三重県齋宮跡調査事務所年報1984 史跡齋宮跡 発掘調査概報」三重県教育委員会 三重県齋宮跡調査事務所 1985.3
 ③ ②に同じ
 ④ 藤澤良祐「瀬戸古窯跡群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館 1982

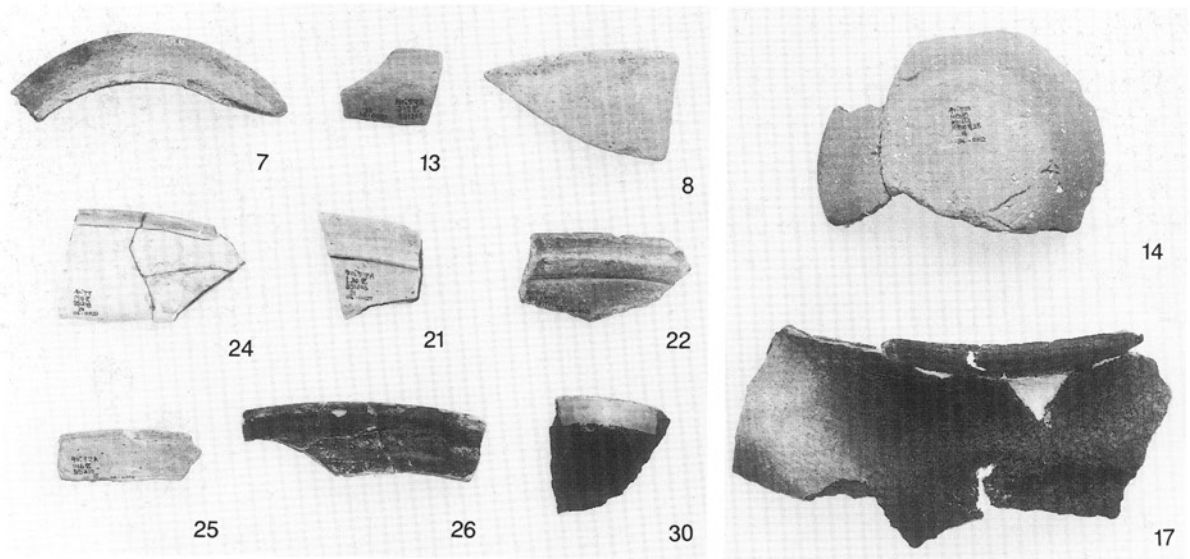
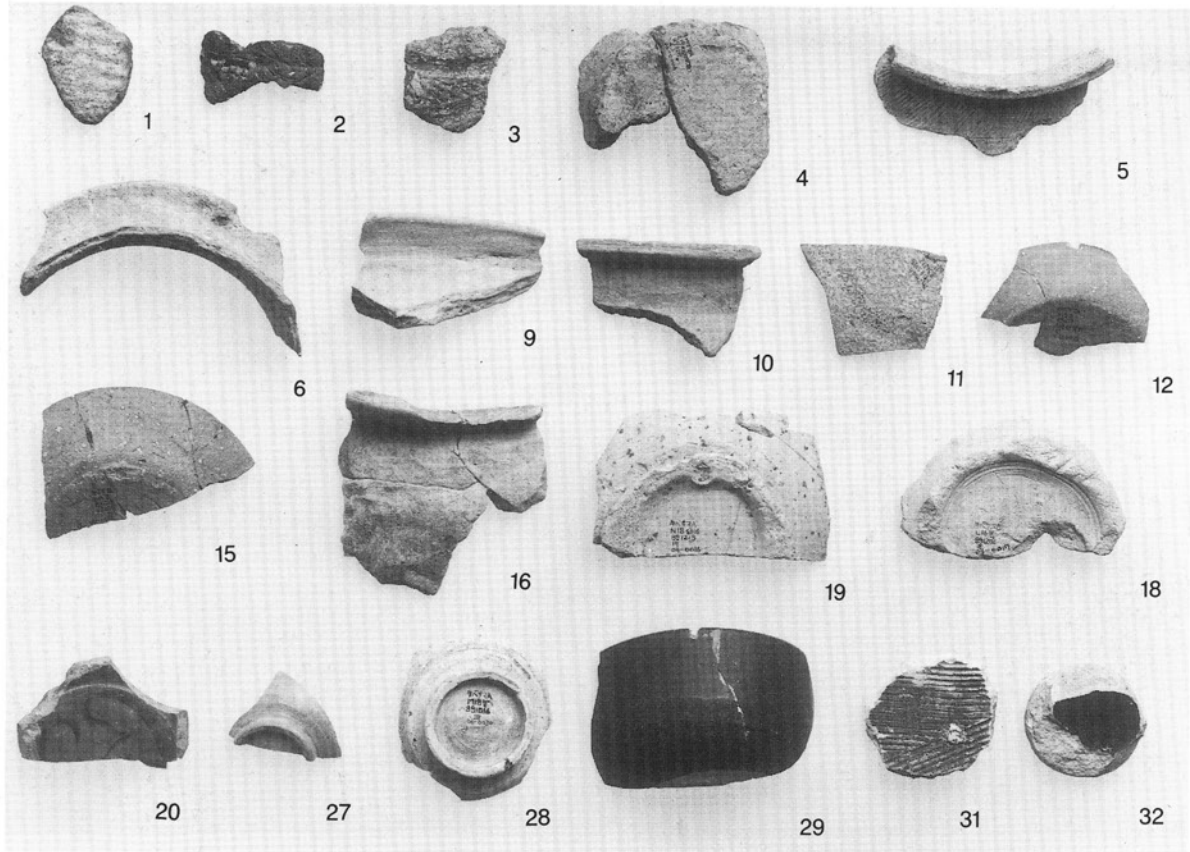
⑤ 新田洋「平安時代～中世における煮炊用具―「伊勢型」鍋―に関する若干の覚書」『三重考古学Ⅰ』三重考古学談話会 1985
 ⑥ 新田洋「三重県における古代末～中世にかけての土器様相―特に土師器についての素描―中・南伊勢における中世土師器―特に「在地系」皿―の変遷と地域色解明への一視点」『マージナルNo.9』愛知考古学談話会 1988.10



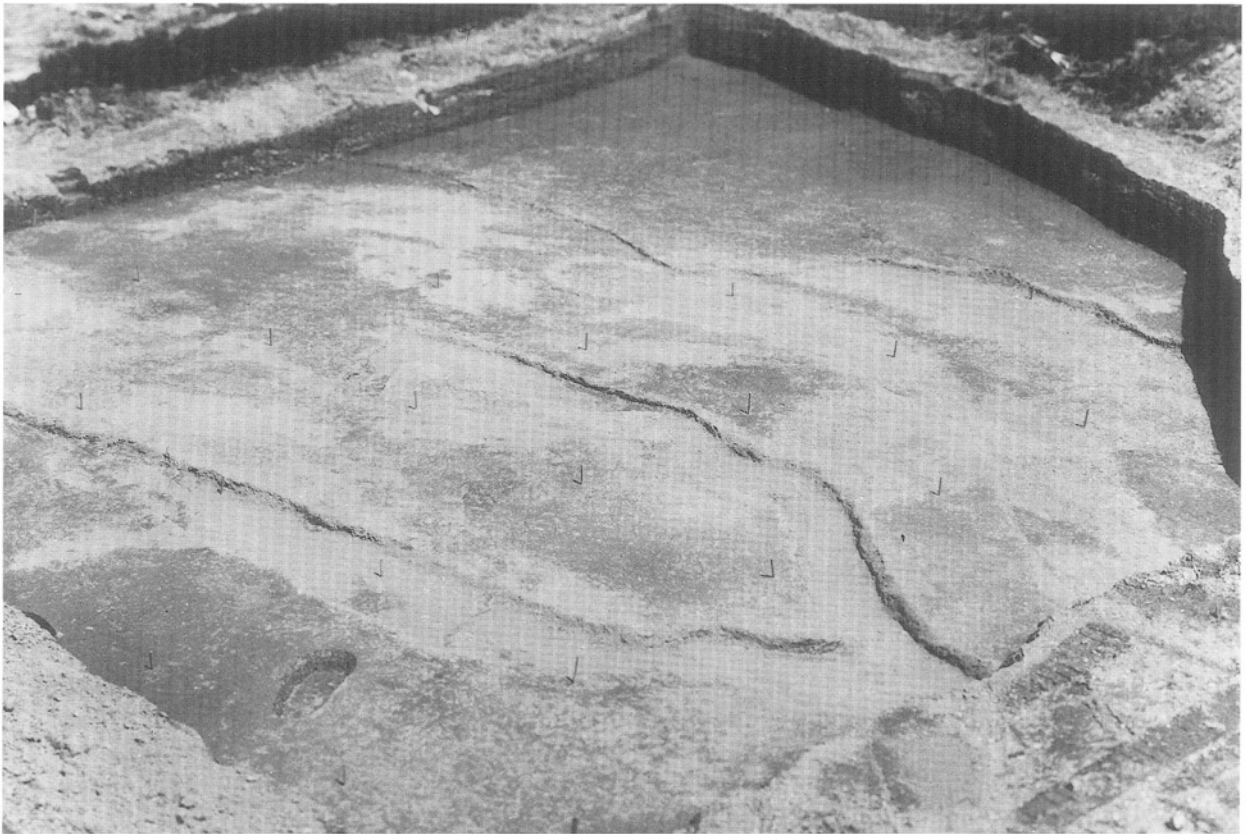
牛バサマA遺跡東区全景（西から）



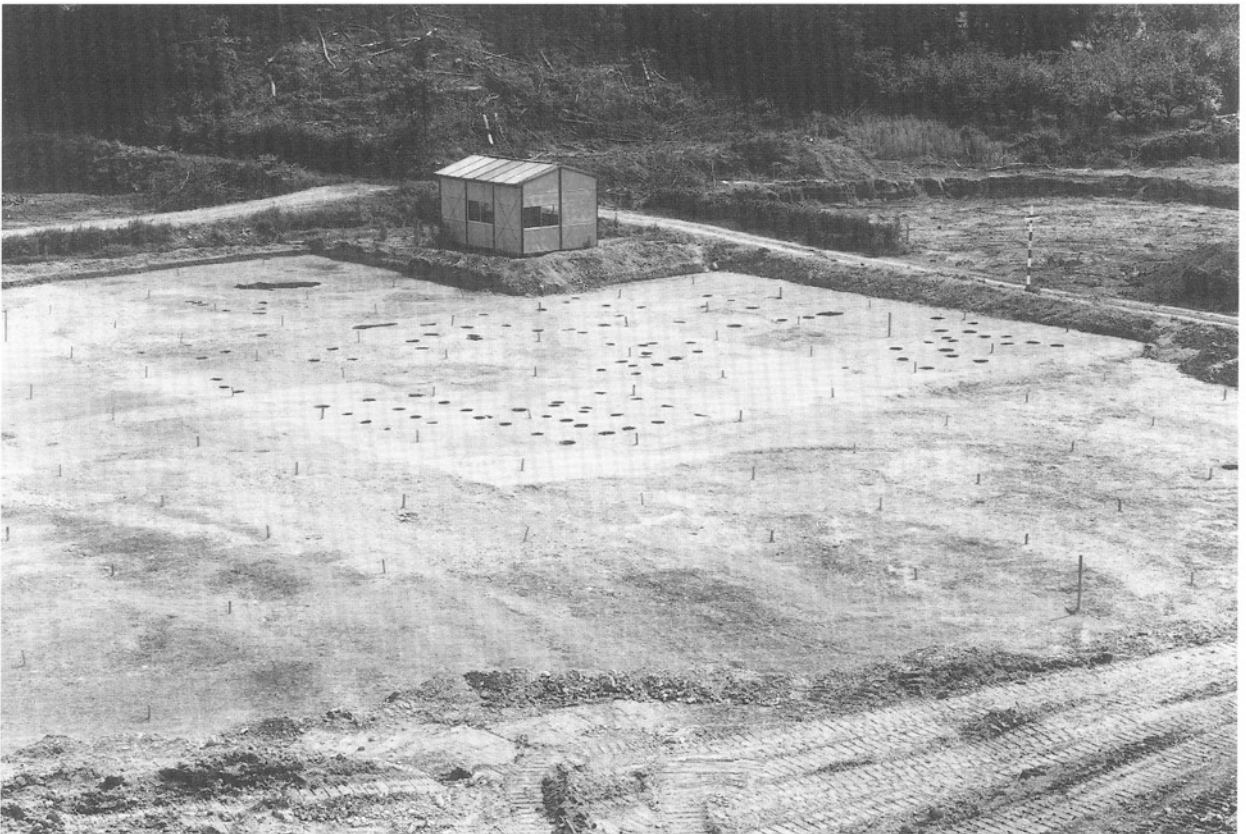
牛バサマA遺跡西区全景（西から）



牛バサマA遺跡出土遺物 (1 : 3)



牛バサマB遺跡西区全景（北西から）

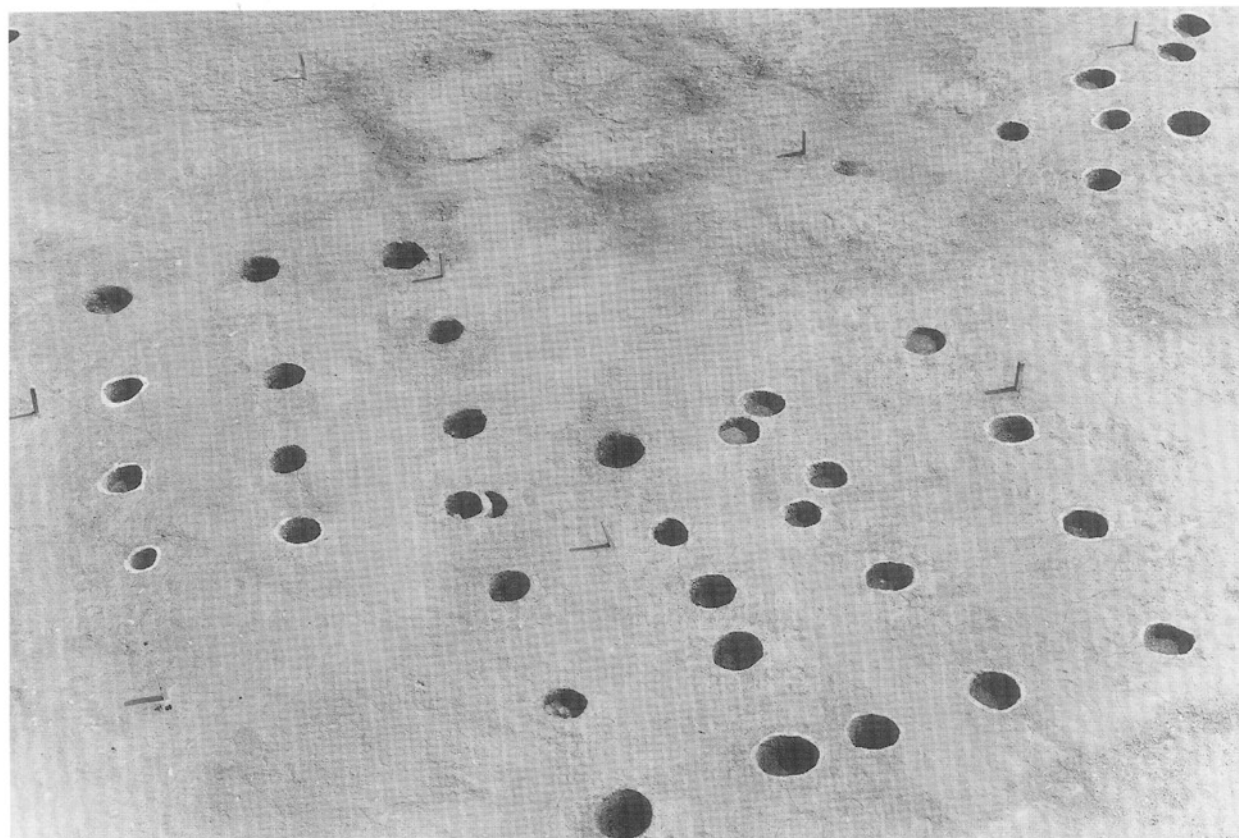


牛バサマB遺跡中央区全景（北東から）

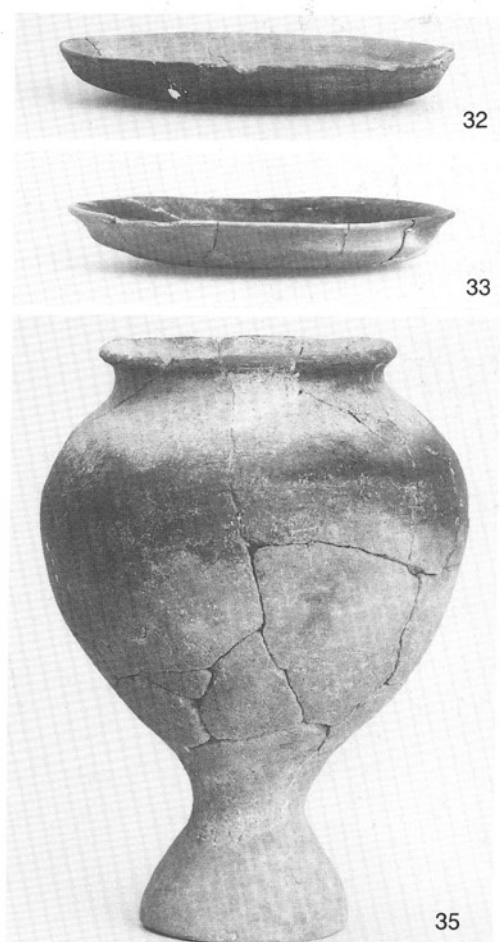
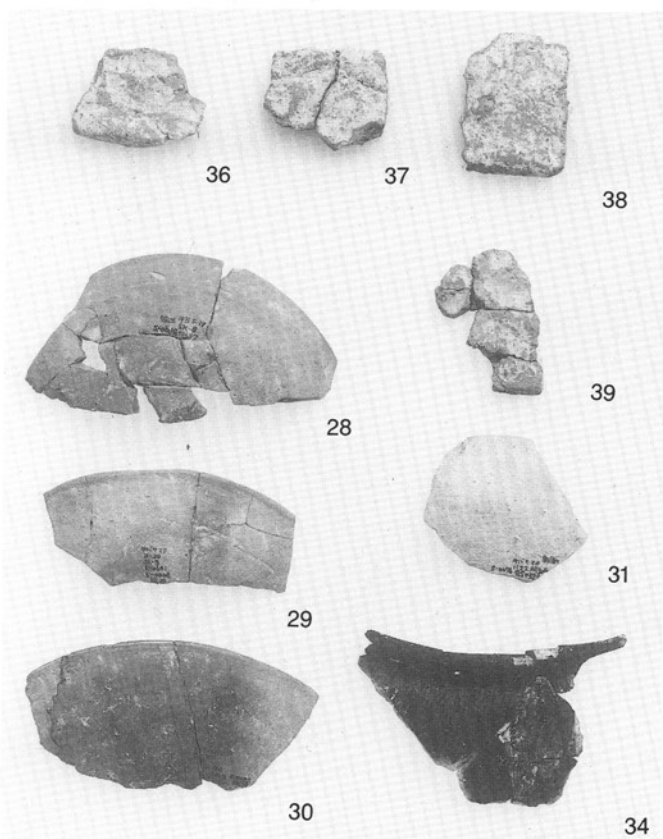
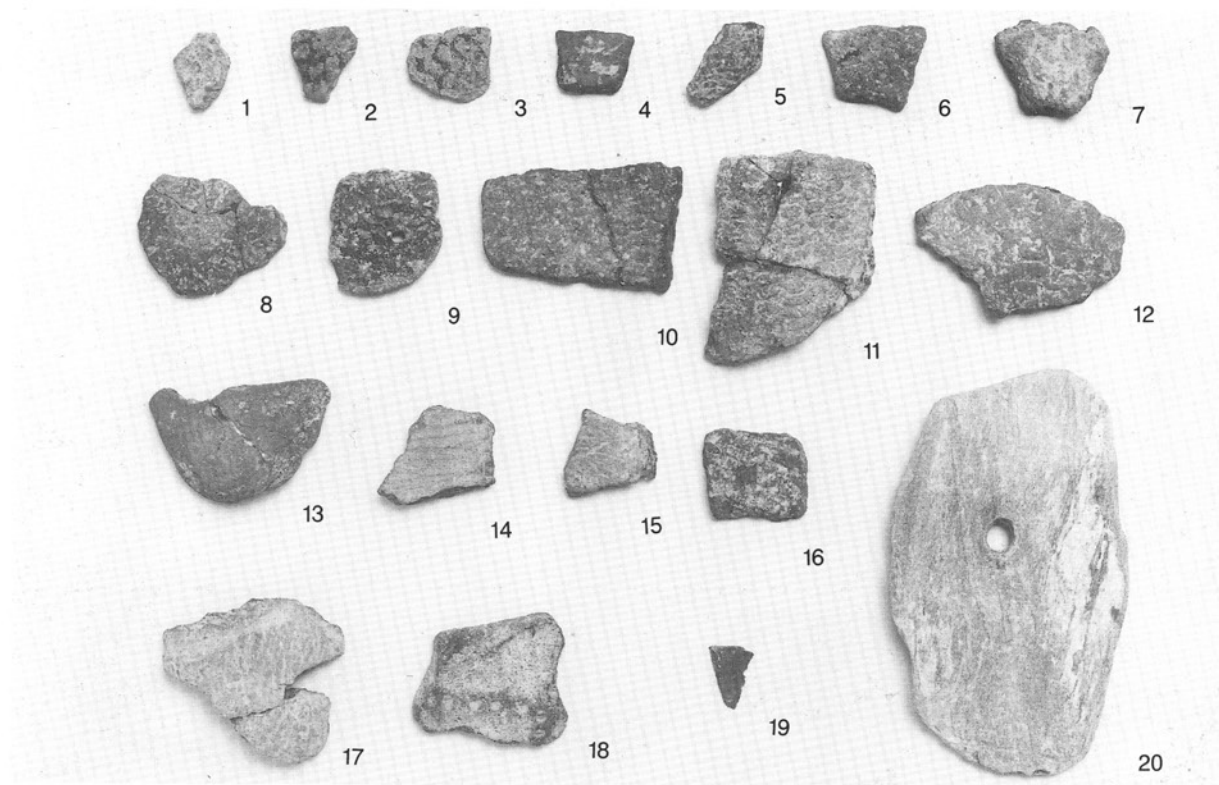
PL 4



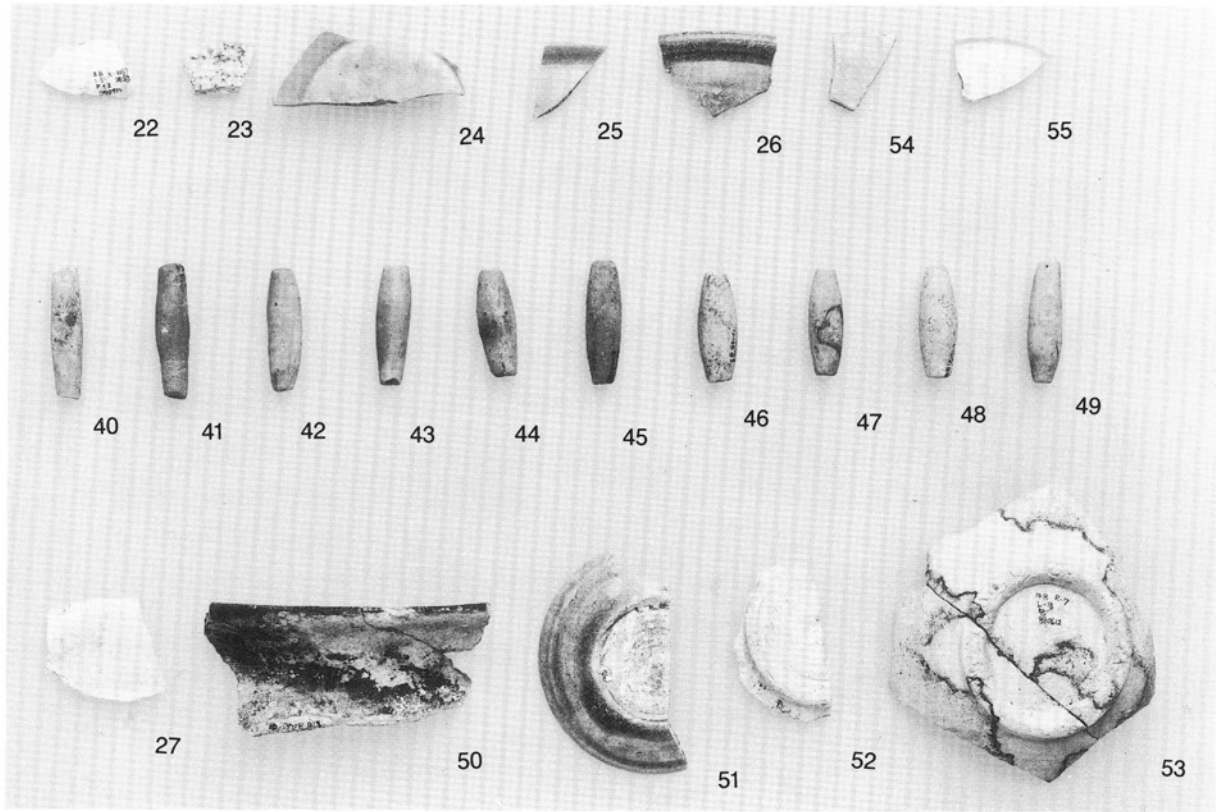
牛バサマB遺跡東区全景（西から）



牛バサマB遺跡中央区SB1・SB2（北から）



牛バサマB遺跡出土遺物 (1 : 3)



牛バサマB遺跡出土遺物 (1 : 3)

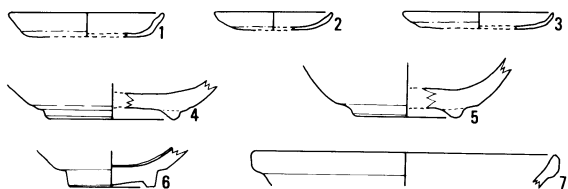
V. 範圍確認調査遺跡

1. 多気郡多気町前村 おうじたに 王子谷遺跡

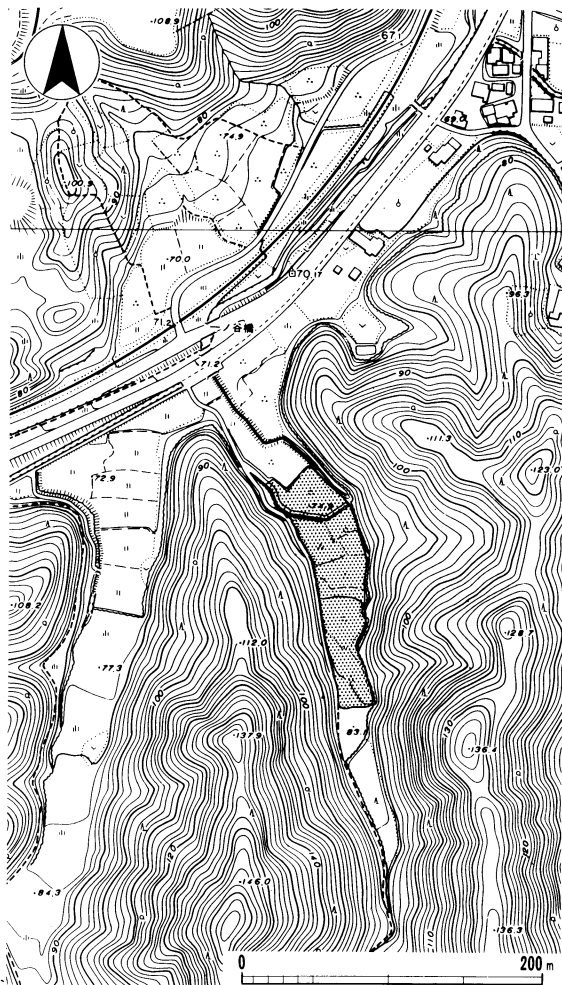
調査区は多気町大字前村字王子谷にある。東西を山脈に挟まれた南北に細長い谷水田に位置する。調査は1989年2月6日～7日と、1990年1月12日～18日にかけて2次にわたった。試掘グリッドは計12カ所（196㎡）である。

調査区の層位は最上部20～30cmが表土（耕作土）であり、その下は数カ所のグリッドで淡青灰色混礫土が20～30cm認められ、黄褐色系の混礫土層の基盤層に達する。遺物は基盤層上の2層中に鎌倉時代頃の陶器（山茶碗）や白磁、江戸時代頃の土師器・陶器が含まれていた。これらは全て細片で、磨耗しているものが多い。遺構は全く認められなかった。

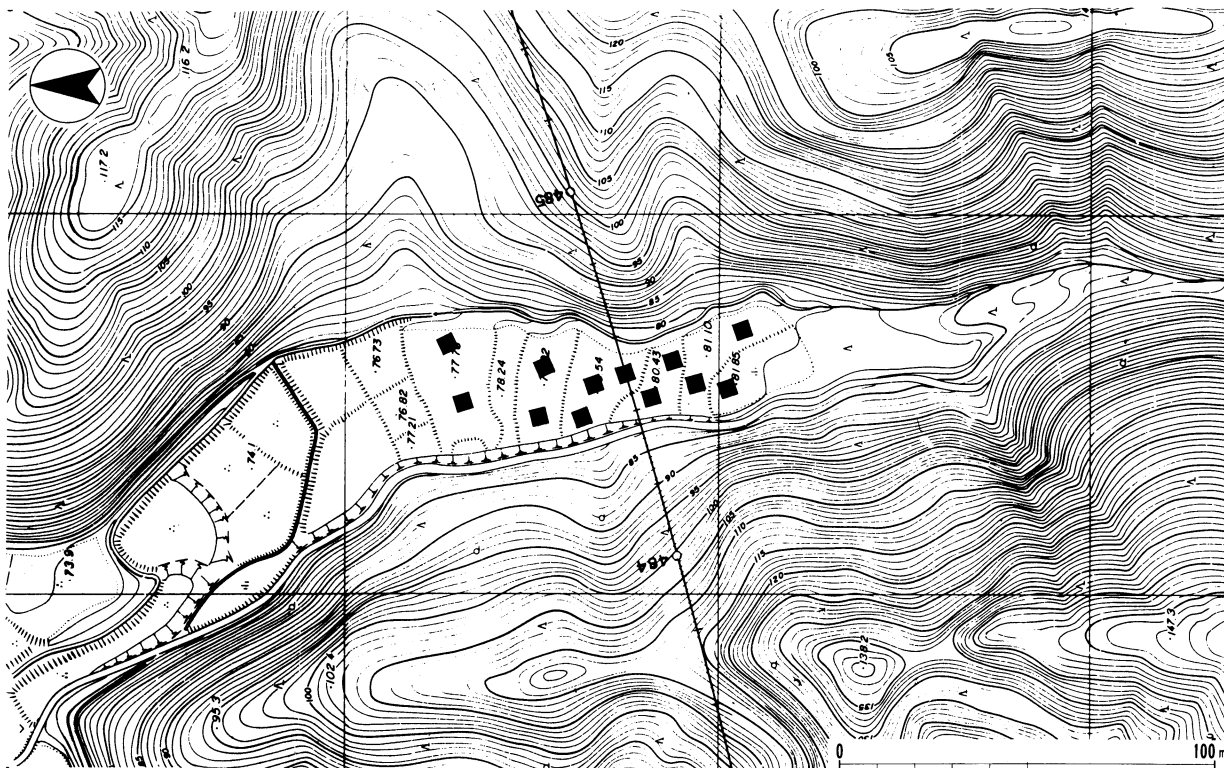
（伊藤裕偉）



第16図 出土遺物実測図（1：4）
1～3 土師器小皿、4・5 山茶碗、
6 天目茶碗、7 白磁碗

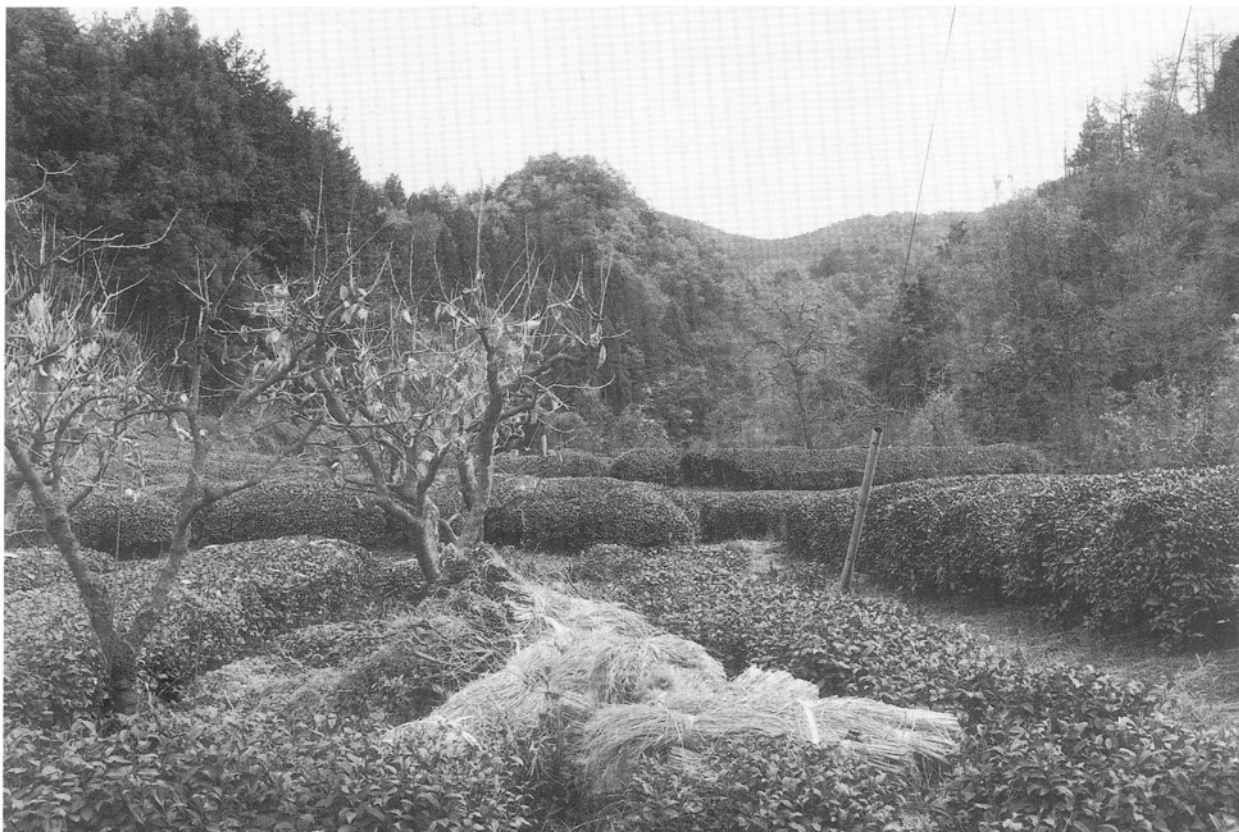


第17図 遺跡地形図（1：5,000）



第18図 発掘区位置図（1：2,000）

PL 1



調査前風景（北から）



調査前風景（南から）

2. 多気郡多気町前村 ^{ももたに} 桃谷 (古墳)

調査区は多気町大字前村字桃谷・大字五桂字ツジにある。山脈状に東西方向に広がる山塊から北方に派生した一支脈の先端最頂部にある。調査は古墳状隆起の部分に十字トレンチ（約27㎡）を設定し、1990年1月18日～22日にかけて行った。

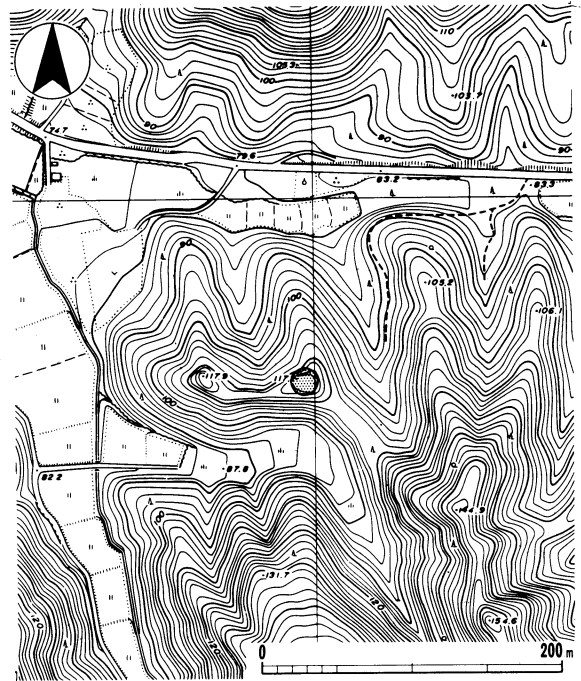
調査区の層位は表土直下が黄褐色系統の岩石媒乱土で、遺構・遺物は全く認められなかった。したがって、当地点は古墳ではないと判断した。

なお、同一丘陵の北端斜面にて、平安時代末頃と思われるロクロ製の土師器を2点採集している。この地点の地形からは同時代の墓地在存在する可能性が高いと考え、道路用地内の丘陵上平坦部にトレンチを設定した。表土10～20cmで岩盤となっており、埋土に焼土、炭を含むピットを1箇所検出したのみである。

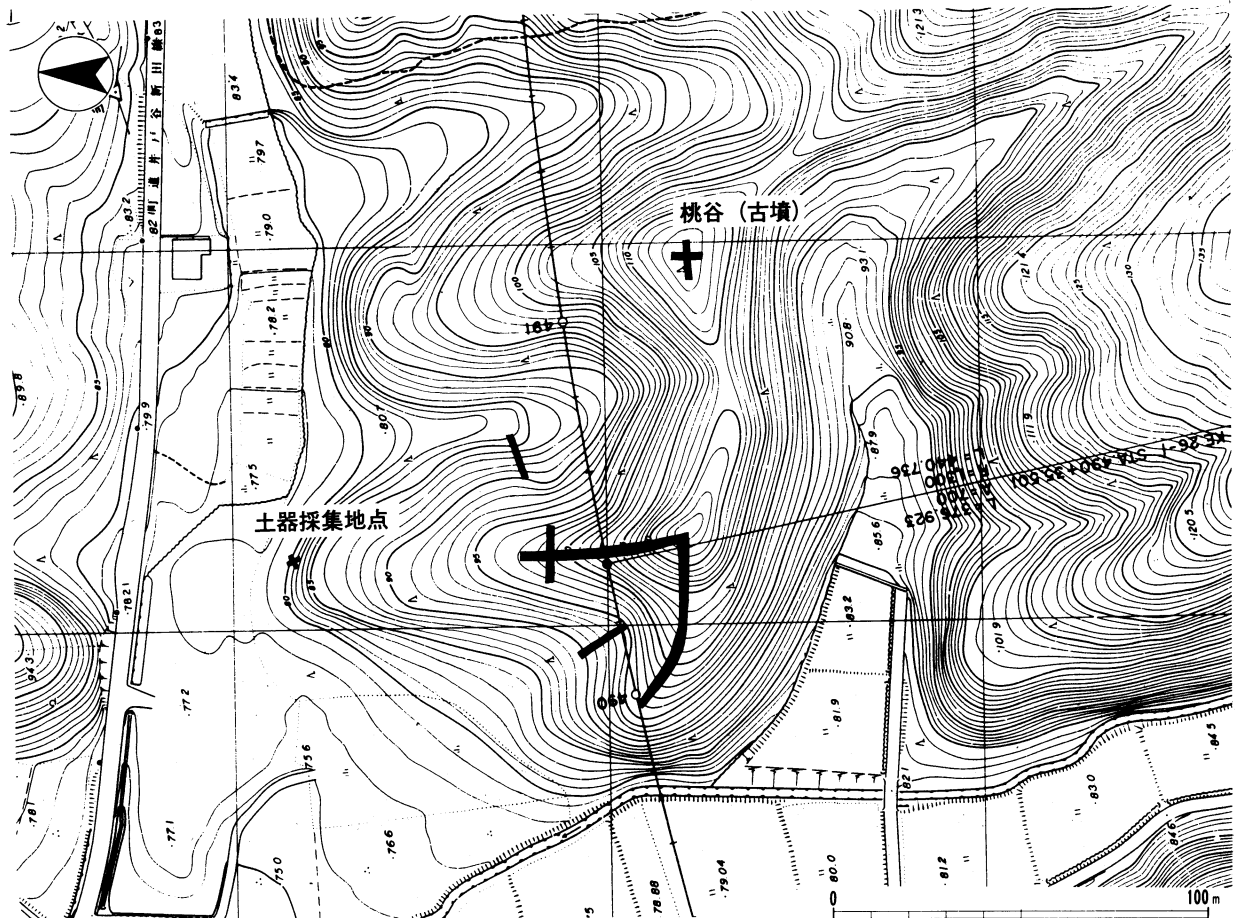
(伊藤裕偉)



第19図 採集遺物実測図 (1 : 4)



第20図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第21図 発掘区位置図 (1 : 2,000)

PL 1



調査トレンチ



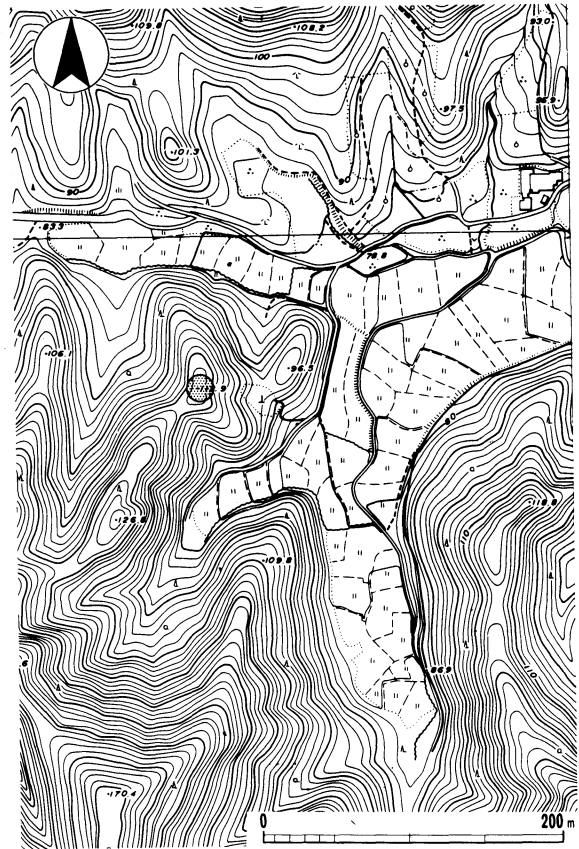
土器採集地点

3. 多気郡多気町五桂 ツツジ(古墳)

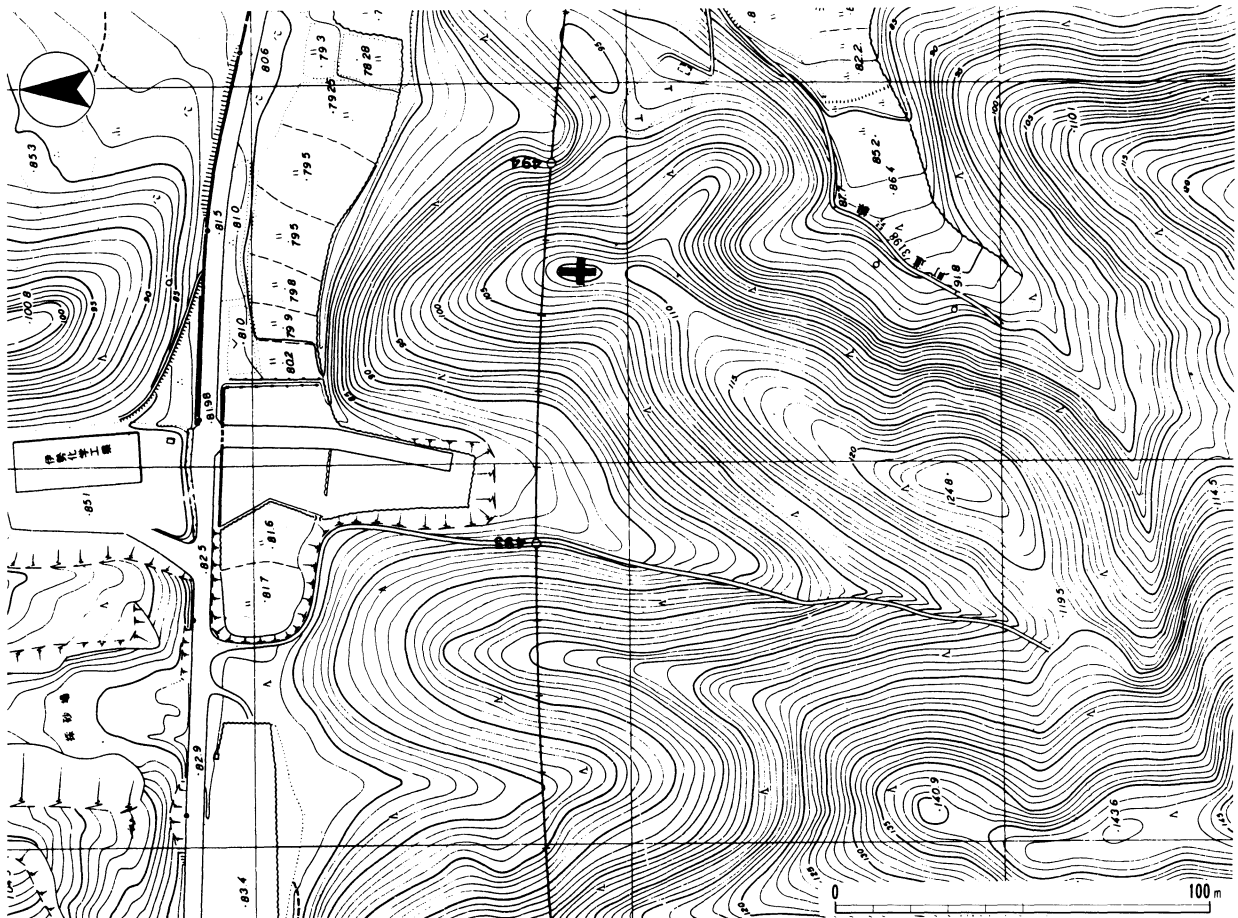
調査区は多気町大字五桂字ツツジにある。立地的な環境は桃谷の調査区と類似している。調査は墳丘状の高まり部分に十文字にトレンチ（約20㎡）を設定し、1990年1月22日～23日にかけて行った。

調査区の層位は表土直下が黄褐色から淡灰色系統の岩石媒乱土であり、遺構・遺物は全く認められなかった。したがって当地点は古墳ではないと判断した。

(伊藤裕偉)



第22図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第23図 発掘区位置図 (1 : 2,000)

PL 1



調査前風景



調査トレンチ

4. 度会郡玉城町原 ヒジヤ口^{ぐち}遺跡

調査区は玉城町大字原字ヒジヤ口に所在する。玉城町と度会町の境に位置する国東山の北麓にある幅200mほどの北向きの谷あい水田にグリッド18カ所(計288㎡)を設定し、1988年11月28日～12月1日にかけて調査を行った。

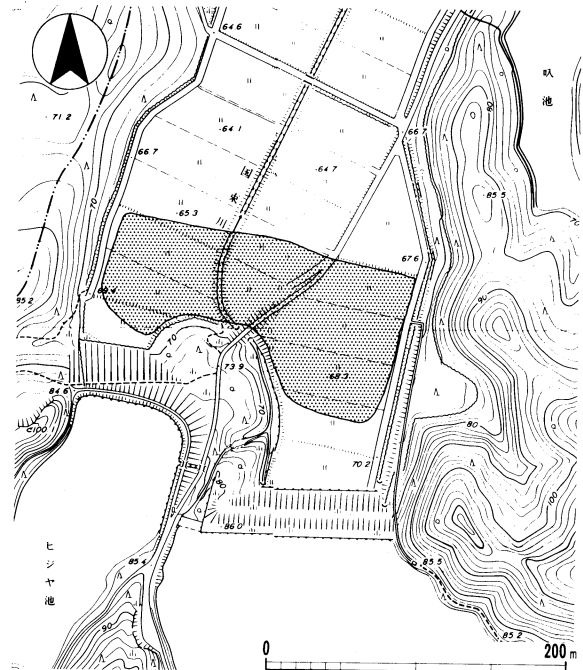
分布調査では山茶碗・陶器片が散布しており、また、圃場整備の際に多量の土器が出土したとのことで、中世の住居跡の可能性も考えられた。しかし、その圃場整備によって旧地形の削平や置土がみられ、また水路の敷設などによって全面的に攪乱を受けており、どのグリッドも耕作土から深さ30～40cmまでは圃場整備時の置土の層で遺物はほとんどなく、その下はすぐ拳大の礫を含む層となり、遺構は検出されなかった。

山茶碗(1・2)は、分布調査時の表面採集遺物である。

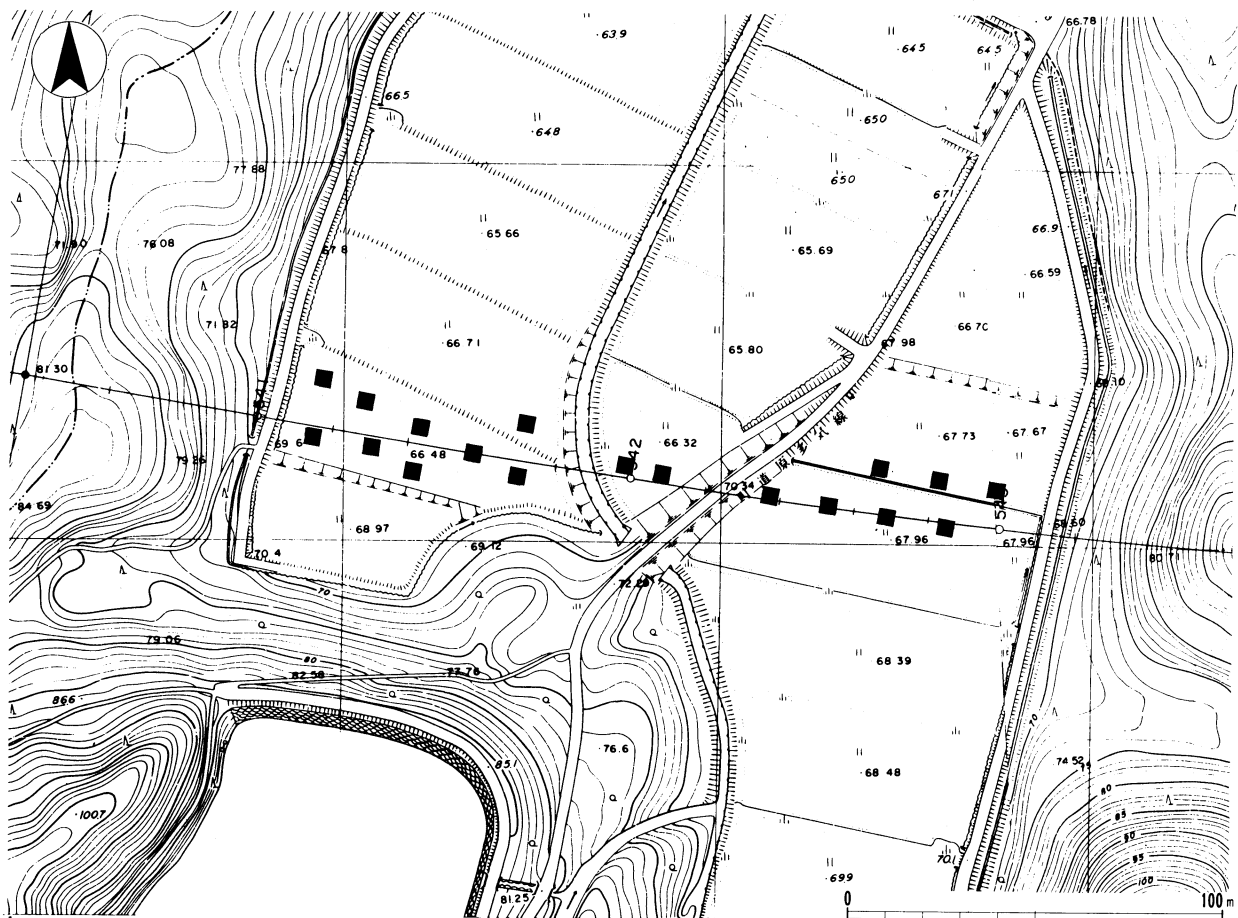
(小坂宜広)



第24図 採集遺物実測図(1:4)



第25図 遺跡地形図(1:5,000)



第26図 発掘区位置図(1:2,000)

PL 1



西半部調査前風景（東から）



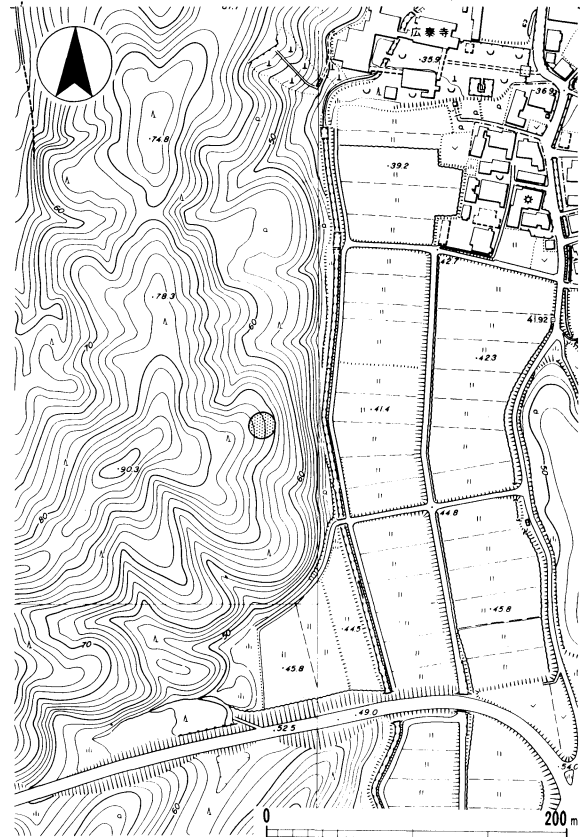
東半部調査前風景（西から）

5. 度会郡玉城町宮古 ^{やぐらどまえ} 矢倉戸前(古墳)

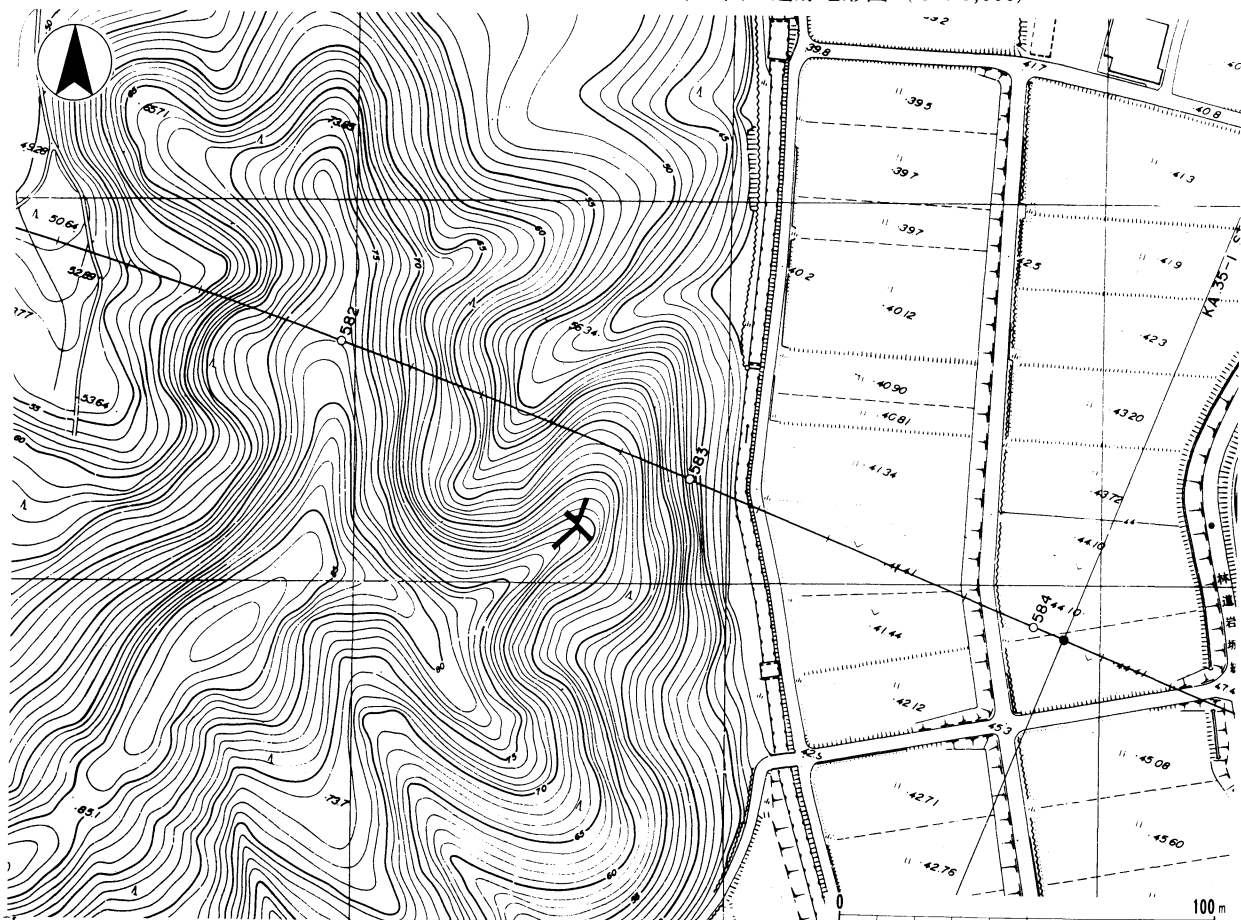
調査区は玉城町大字宮古字細谷に属し、地形的には玉城町北部の山塊から北方へ派生する尾根の一支脈上にある。調査は墳丘状の高まり部分に十字字にトレンチ (20m²) を設定し、1989年9月1日～6日にかけて行った。

層位は表土の直下が明褐色系統の花崗岩媒乱土であり、遺構・遺物とも確認されなかった。したがって古墳ではないと判断した。

(伊藤裕偉)



第27図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第28図 発掘区位置図 (1 : 2,000)

PL 1



調査前風景（北から）



調査トレンチ（南西から）

VI. 付 編

1. 佐奈水銀鉱山跡の地質学的調査

三重県立津西高等学校

磯部 克

1. はじめに

近畿自動車道建設に伴い本鉱山は消滅する状況となり、ここに過去の記録をもとに現状を調査し、記録を残して置きたいと思い着手した。その結果を以下に述べる。

2. 位置

松阪市南西の国道42号線と、平成2年末に開通した近畿自動車道の合流点より東へ約1km離れた所である(図1)。国道42号線より約40m南方の東西に位置し、その分布は谷間にできた水田の東側(No. 1~5、及びNo. 9)と、西側(No. 6~8)とで、合計9カ所ある。

No. 1の位置が海拔85m付近にあるので、以下の廃坑の位置は推定できよう。

3. 経過

公に残っている記録としては表にあるのみで鉱業権者である佐藤作次が現在どういう状況にあり、ど

佐奈鉱山	
鉱業権登録番号	三重試登第2090号
鉱業権者	佐藤作次
位置・交通	三重県多気郡佐奈村井戸谷にあって、紀勢線佐奈駅から約3kmで近くまで自動車を通ずる。
沿革	昭和18年に探鉱を始めたが生産をみず、終戦となった。
地質	御荷鉾系、石墨千枚岩・絹雲母片岩からなる。
鉱床	石英千枚岩・絹雲母石英片岩に胚胎する数條の層状鉱脈で、中央構造線の南方数100mをこれに平行に、千枚岩の走向に沿って、2kmにわたって追跡される。(昭和18年12月現在)

表(本邦の水銀鉱床より)

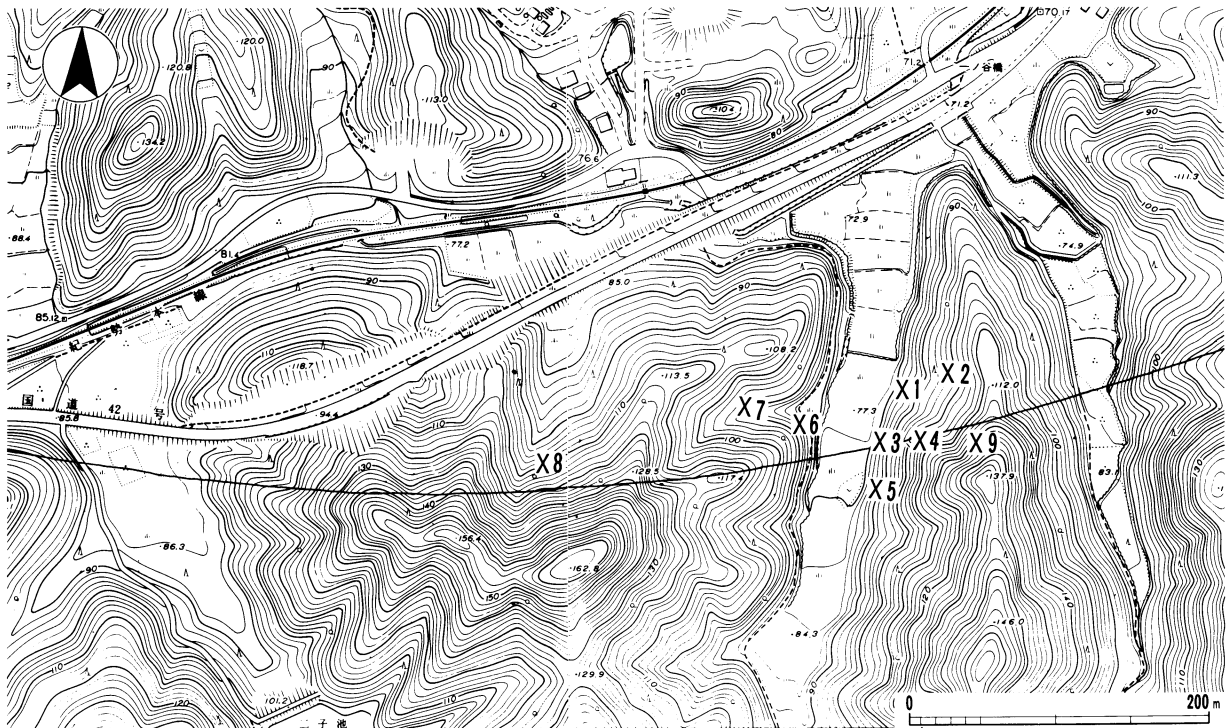


図1 佐奈鉱山付近の地図(1:5,000)

のような鉱山に関する書類を保存しているかは不明である。

鉱業権登録番号が「三重試登」となっているので、三重県商工部に問い合わせたが中部鉱山監督署の方からは鉱山に関する資料は送られず、報告のみで詳細は不明であるとの返事であった。

又、通産省工業技術院地質調査所を退職された岸本文男氏に聞いたら、「我々専門官でも当局は教えてくれない」との返事であった。それは多分、財産が絡んでくるので、秘密事項として取り扱っているのではないかと想像される。

4. 地質と鉱床

本鉱山跡付近の地質は中央構造線の南方にあるため、三波川帯の結晶片岩帯にする。岩石は石墨千枚岩を主とし、緑泥片岩・絹雲母片岩・赤鉄鉱石英片岩・緑泥石緑簾石片岩が少々という状況である（図2）。

片理は一般に東西に発達し、傾斜は東西方向であるが、これは結晶片岩の特徴である微小の褶曲によ

るものである。地表付近は風化が激しくかなり粘土化を示し、茶褐色の土壌となっている。

堀純郎は鉱床について次のように述べている。

「佐奈型と名付けられたもので、絹雲母石英片岩の片理に沿って石英・絹雲母・辰砂等の無秩序な集合が層状に沈殿しており、標識的なブロック構造を形成している」と。又、鉱脈について「石墨千枚岩に介在する絹雲母石英片岩に胚胎する数条の層状鉱脈で、千枚岩の走向に沿って2kmにわたって追跡される」と述べているが、これは表の年代である昭和18年より後で述べているので、鉱業権の申請書類の内容及びその他の文献（例えば7万5千分の1野後）から引用したように思われる。

1991年1月の工事中には大規模な露出面が出現したが（図6）、概観したがぎりでは辰砂・鶏冠石・輝安鉱等は見当たらなかった。田端 茂は「結晶片岩中の石英脈・粘土脈に鶏冠石に伴って産し、微粒で、鉄・マンガン等の酸化物で赤褐色又は黒褐色化した部分に多い」と述べている（三重県鉱物誌）。

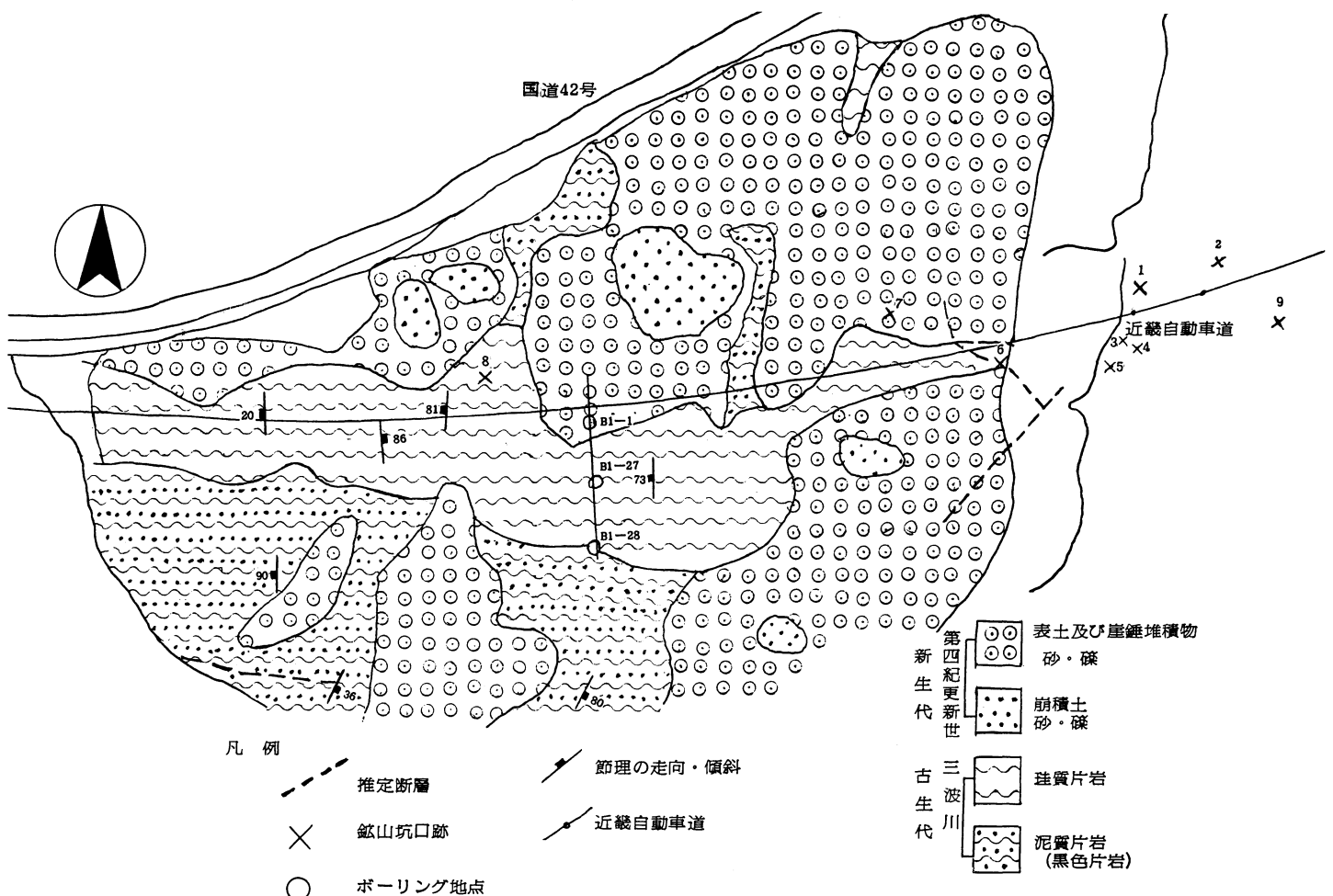


図2 多気郡多気町前村付近の地質（近畿自動車道基礎調査報告書より作成）

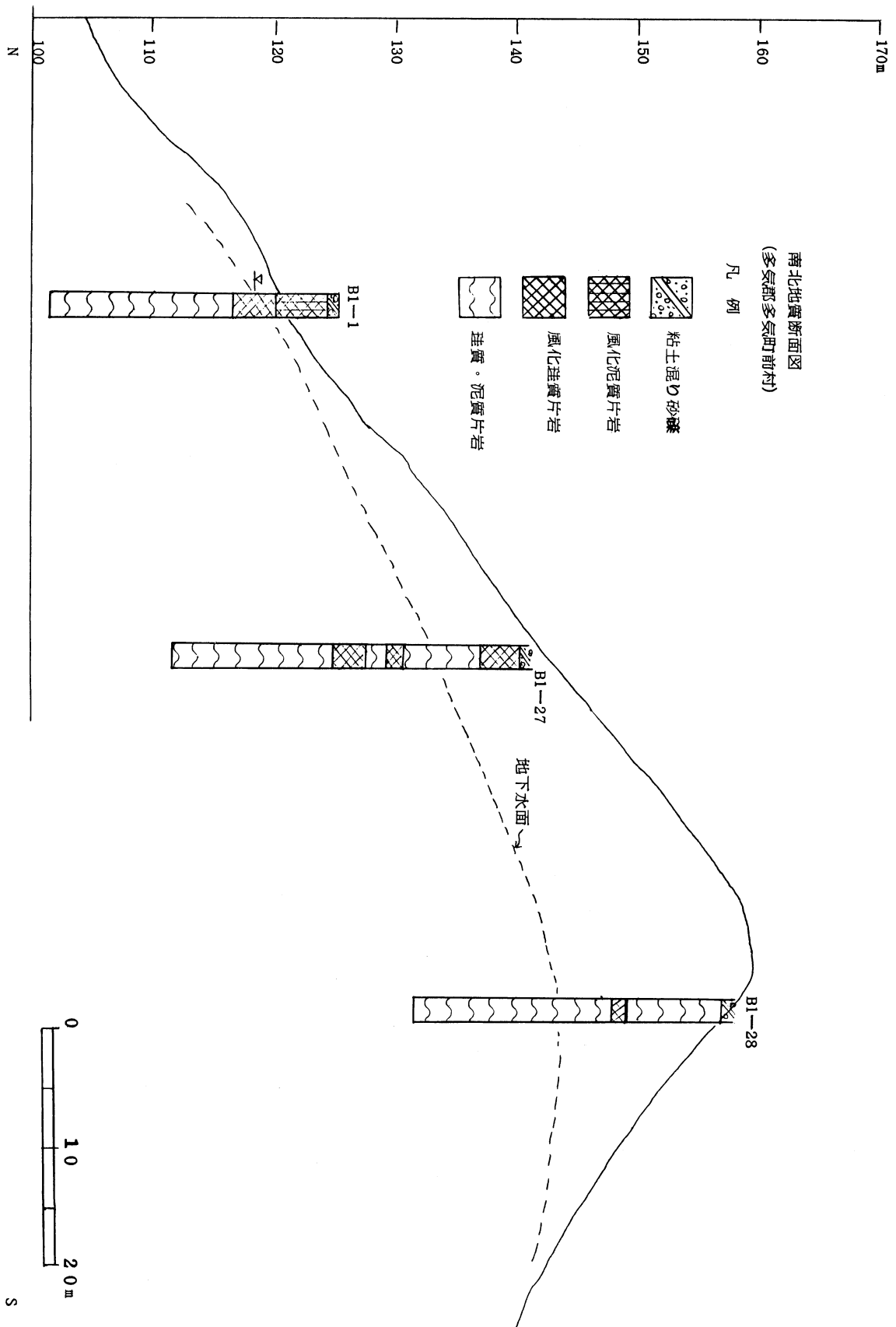


図3 図2の南北断面図 (近畿自動車道基礎調査報告書より作成)

5. 鉾山跡 (No. 1 ~ 9) 各論

●No. 1

坑口付近は高さ3mばかりの切り割りがあり、右には下向き約30度傾斜の坑道があるが、埋没のためその深さ(延長)は不明である。又坑口左手上方には45度傾斜の上向き坑道もあるが、その奥は不明である。坑口は高さ1.2m、幅1.5mで、人が立って歩

ける大きさである。走行・傾斜はN80度W、70度NEで、走行にはほぼ直角に掘られている。これは、鉾脈を見つけるのには都合のよい方法である。

この中央構造線に沿う鉾山は、鉾脈が一般に走向に平行に胚胎しているからである。坑口から約13m、水平かつ直線的に南に延び、そこから水深10cmばかり地下水があり、左へ3mばかり進むと45度折

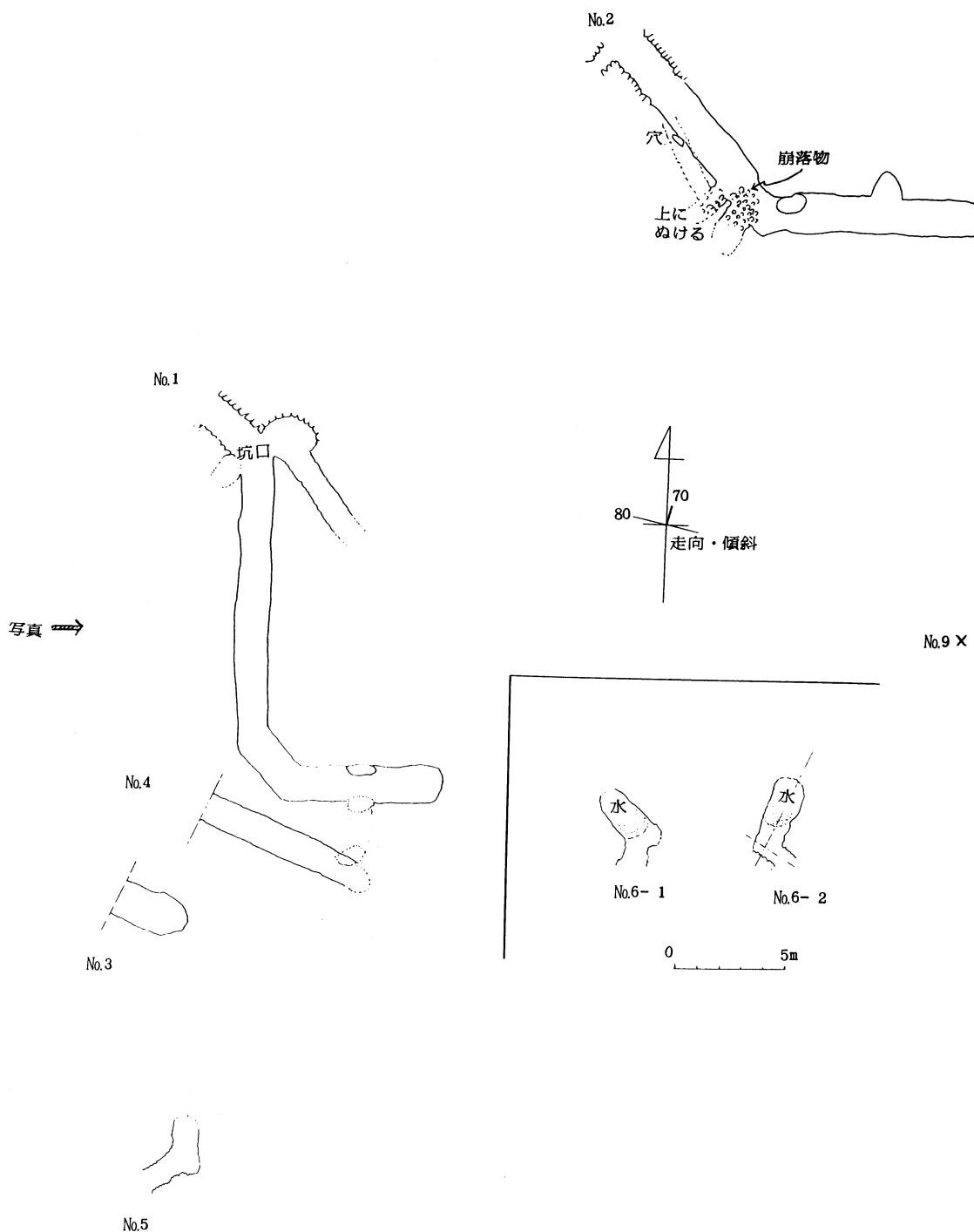


図4 佐奈鉾山跡分布図 (1989年7月21日調査)

れ、さらに東へ向かって6.5m程で行き止まりとなっている。行き止まり少し手前3mの左側に少々窪地があり、下へ掘り進んだ可能性が見られる。一方その右側斜上に向かって空洞がある。この空洞はNo. 4に続いていることが確認できた。坑道内は石墨千枚岩、石英片岩が主としてあり、辰砂は見当たらなかったが厚さ2～3mmの石墨が採集できた。

●No. 2

No. 1より左斜め上に位置する。(図5)北西の坑口から南東へ向かって水平に約8m掘り進んでいる。坑口手前の切り割りの右側に試掘跡か、上方へ通じる坑道が崩落して不明だが1か所ある。坑口から3mの所に空洞が下にあり、これは6m程掘り進んだ所で右側の坑道を逆方向に通じる部分である。又、6mと7mとの所に空洞があり、上方にあき一部坑内に崩落している。この地点より左に折れ、10.2mで行き止まりとなる。折れ曲がる地点左下に水没跡がある。又、それより数m先左側に、高さ1.4m、奥行(長さ)1.2m程の坑道がある。走向、傾斜等はNo. 1と同じである。

●No. 3

No. 1の右側を回ったやや下方に位置する。坑口の高さ1.2m、奥行3mで、約10度下方に傾斜して行き止まりとなっている。

●No. 4

No. 3からほぼ真上へ3～4mの位置に坑口はある。南東方向へ水平に7.5m入れるが、その先は崩落で不明。この崩落地点の左下に空洞があり、No. 1に続



図5 西方より東を撮る
(1990年5月23日撮影 図4参照)

いている。この坑道はNo. 1～3に比べて高さ1m位という低い高さである点が異なる。

●No. 5

工事がやや進み樹木の伐採が始まってはじめて坑口(高さ、幅共に80cm)が判明したものである。No. 3より右へ数mの所にあり、1m入って間もなくつき当たり、左(北向)斜下方40度延びているが、埋没してその先は不明である。

●No. 6-1

南側から北へNo. 6-1のようにあり、北向きに掘り、すぐ左60度西下方40度で掘り進んでいる。しかし水没しており、その先は不明である。

●No. 6-2

No. 6-1と隣り合わせにあって、南東方向より北西方向に2mばかり道路上に掘り、そこから右へ(N20度E)、そして下方へ40度で掘り進んでいるが、水没のためその長さは不明。

●No. 7

工事前に公団の事前調査で分かっていたが、調査時間がなく記録出来なかった。

●No. 8

No. 7と同様事前調査で分かっていたが、海拔150m付近であるため樹木が伐採され、工事が始まって

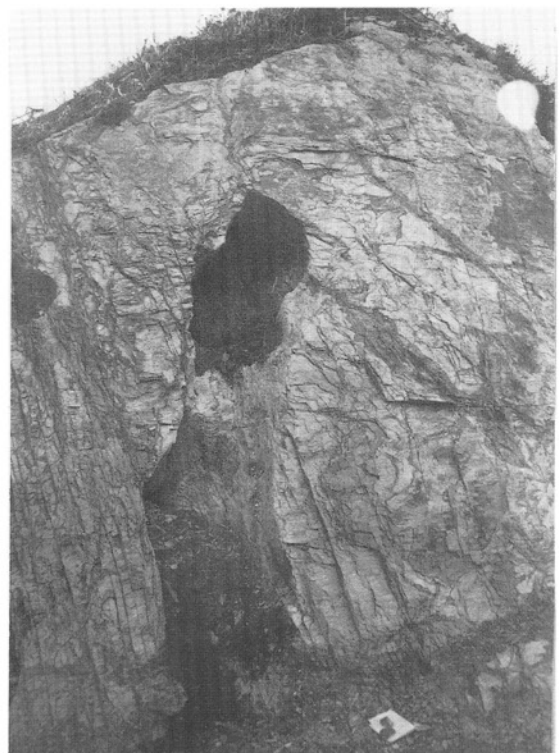


図6 No. 8坑口 (1991年1月3日撮影)

はじめて坑口が露出した(図6)。図6で分かるように上下2段になって南北に掘られた上は幅1.2m、高さ1.8m、下はそれより小さく上下共に南に向かってやや下向きに掘ったようでその規模は不明である。

6. 鉱石と脈石

記録によると、黒辰砂が結晶片岩中の粘土脈に鶏

冠石、辰砂に伴い少量産する。

辰砂は結晶片岩中の石英脈又は粘土脈に鶏冠石に伴い産し、微粒で鉄・マンガン等の酸化物で、赤褐色又は黒褐色化した部分に多い。その他として黄銅鉱・白鉄鉱・鶏冠石・黄鉄鉱等の記録がある。

[参考・引用文献]

1. 堀 純郎(1958) 本邦の水銀鉱床 地調報告No.154
2. 田端 茂(1967) 三重県産鉱物目録 三重科学第6号
3. 磯部 克・田端 茂(1986) 三重県産鉱物誌 三重県高等学校理科研究会地学部会
4. 日本道路公団(1987) 近畿自動車道調査報告書

2. 水谷鉦山跡の地質学的調査

三重県立津西高等学校
磯部 克

1. はじめに

場所は勢和村インター料金所の北側で、「三重県地質鉦産図」に休鉦山のマークが記されている。しかし、この地図を手がかりに調査したところ、その所在は少し西にずれていたことが判明した。この鉦山に関する公の記録は残っていないようである。

高野孝悦氏によると、当時の鉦山経営者の関係者が奈良県に健在であるということをお教えされた。このような事情の中で、筆者が調査した記録をここに報告したい。

2. 地質と鉦山分布

鉦山跡は結晶片岩帯（三波川帯）にあって、特に多い石墨千枚岩帯にある。走向と片理がほぼ東西であることから、鉦山跡は $N50^{\circ}\sim 80^{\circ}W$ の北西から南東方向に掘り進んでいることは、ほぼ佐奈鉦山と同様である。全部で13カ所の坑口が確認できたが、以下それらについて述べる。

3. 各論

●No. 1

図3に記されていないが、小さい凹地があることから推定したまでである。つまり掘った可能性はあるが、土砂で埋没したのではと判断したものである。

●No. 2

坑口は $N80^{\circ}W$ の北西から南東に掘っている。幅1m、奥行1.2mまでは確認できるが、その先は埋没



図2 鉦山跡 (No.10, 1991年2月2日撮影)

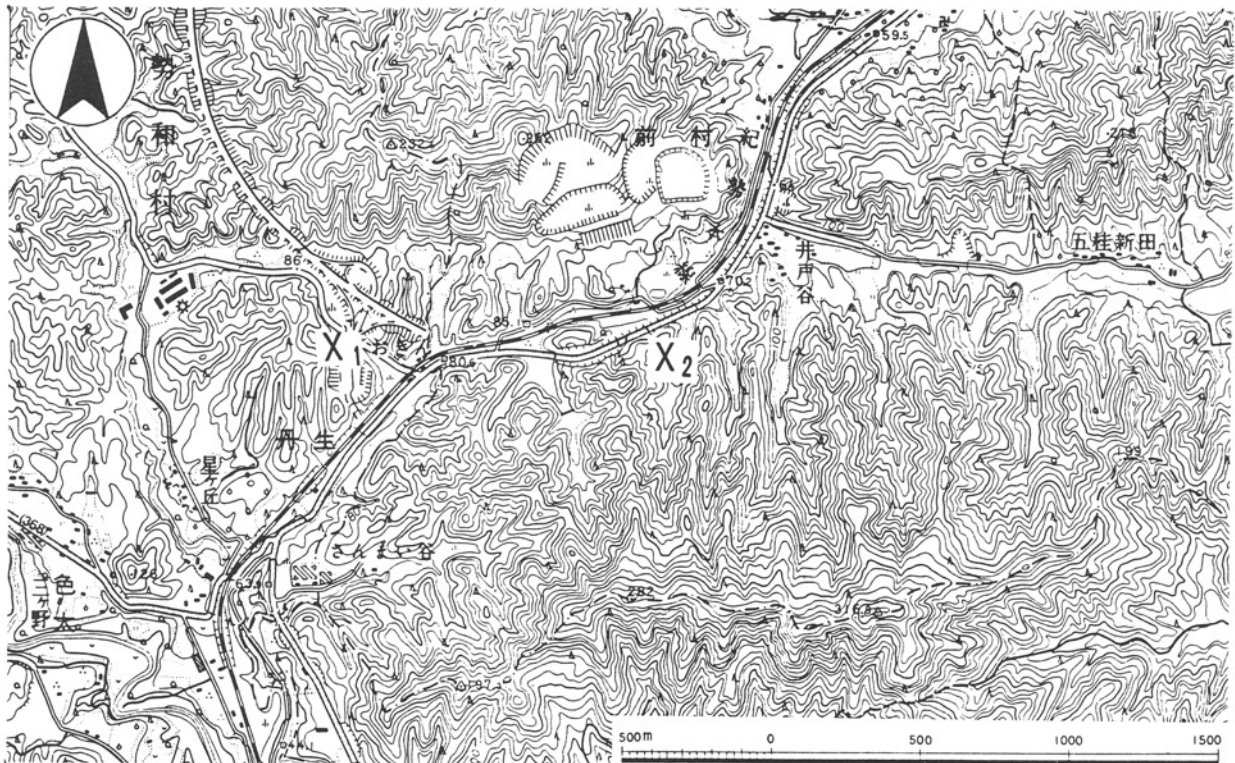


図1 水谷鉦山調査付近の地形図 (1 : 25,000 X1-水谷鉦山、X2-佐奈鉦山)

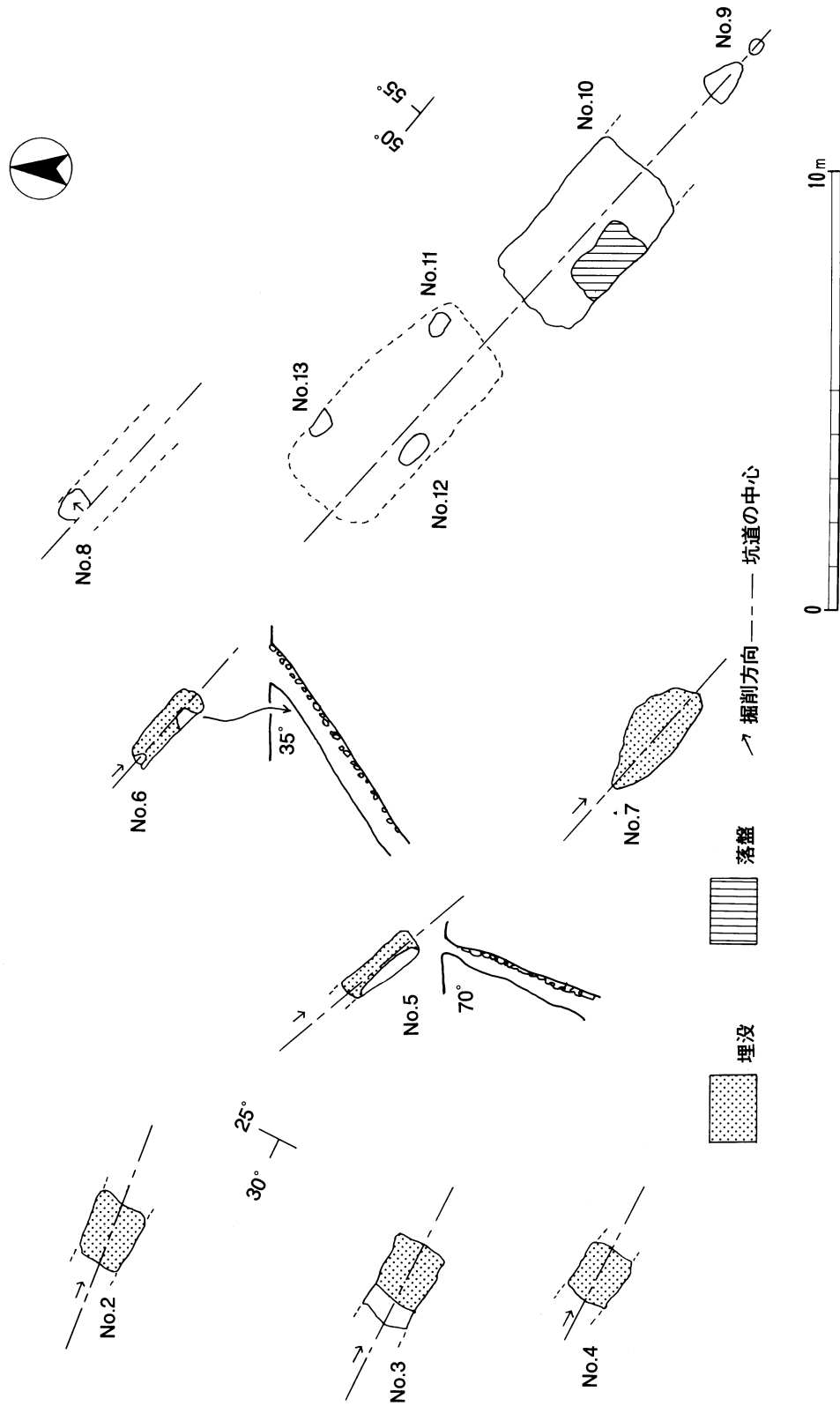


図3 水谷鉾山坑口規模（1：150，図4との配置図とは多少異なる）

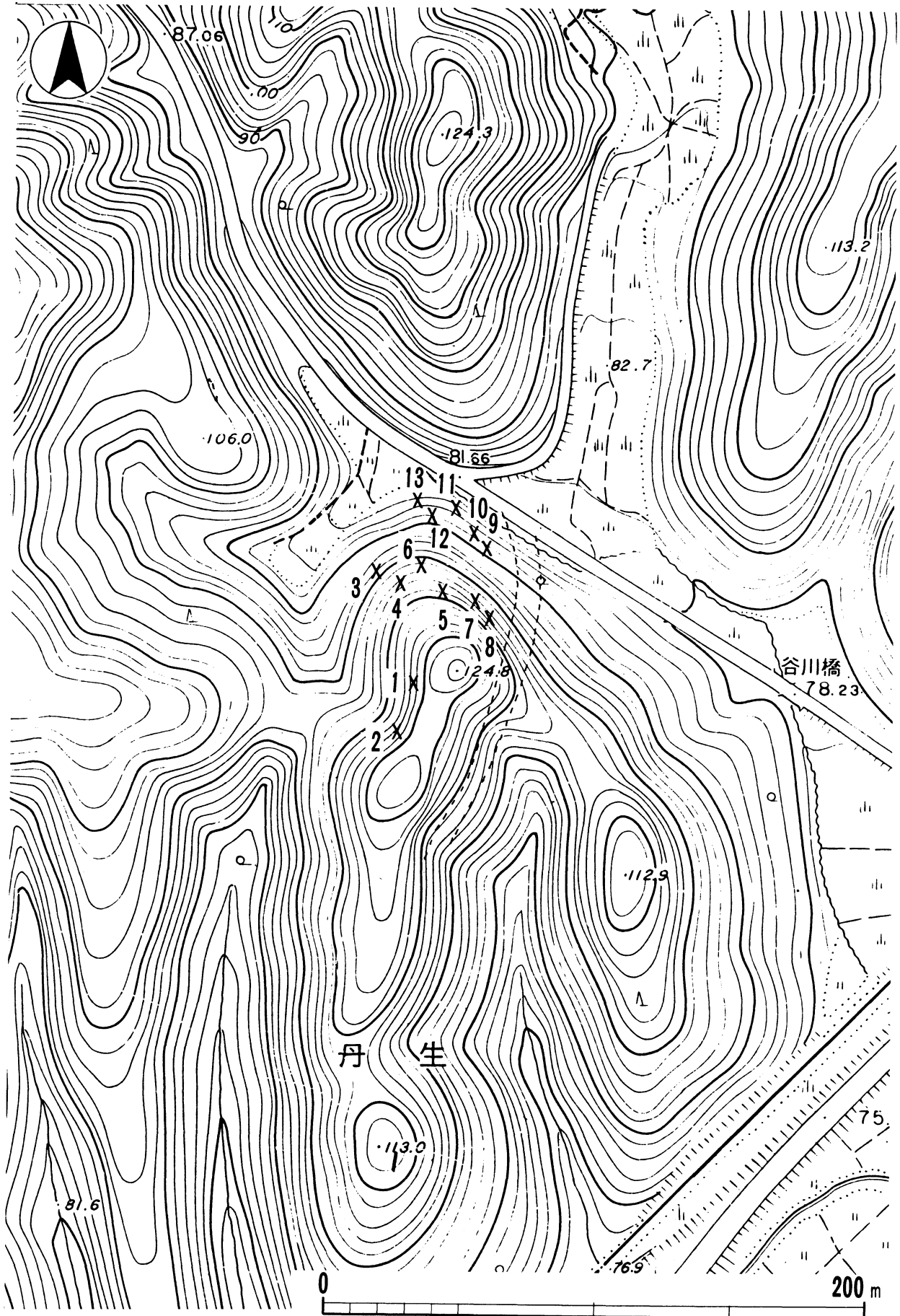


图4 水谷鉾山坑口分布图 (1 : 2,000)

して不明である。

●No. 3

No. 2より10数m東にあって、坑口の向きはNo.2と同様である。石英片岩（走向N25° E、傾斜30° NW）の中を掘削し、幅1.4m、坑口0.5mでその先は埋没している。

●No. 4

坑口の向きはNo.2、No.3と同様で、幅1.5m、奥行1m余り先は埋没している。

●No. 5

坑口はN50° Wから南へ約70°下方に掘り、幅0.6m、奥行2m位でその先は埋没している。

●No. 6

No. 5と同様の方向で、35°傾斜で下方に掘り進んでいる。幅0.6m、奥行2mでその先は埋没している。●No. 7

坑口の向きはNo.6と同じである。幅1.1m、長さ3m、左下方垂直に掘ってあるが、数m先で埋没している。

●No. 8

No. 5から数m上方にあって、この間幅1mの溝ができています。坑口は1m前後の円形で、北東下方に掘ってあるがその先は狭く不明である。この先は伊勢自動車道の誘導路で、勢和インター料金所となりノリ面となっている。そのノリ面に怪0.5×0.4mの穴があいているが、これがNo.8の延長かと思われる。

●No. 9

No. 9からNo.13までは同一方向にある。試掘当時は溝でつながっていたと思われる。No. 9は幅0.6m、長さ5m、左下方垂直に掘ってある。10数m下で水没している。

●No.10

この鉱山では最大規模と思われる。幅3m、長さ5mの間は凹地となっていて、一部落盤しているが垂直に掘っておることがよく分かる。しかしその深さは水没のため不明である。

●No.11～13

幅3m、長さ6mの長方形の凹地の中に3ヶ所小さな坑口があり、いずれも垂直に掘ってある。いずれも水没していることからその深さは不明である。

4. あとがき

鉱山の開発は佐奈鉱山の時代とほぼ同じ頃の、昭和18年頃から終戦までの間と推定される。規模は図3、図4からも分かるように小規模で、結局は試掘段階で終わったのではないと思われる。その理由は佐奈鉱山と同様、中央構造線の南側、つまり三波川帯に位置し、丹生鉱山の産状とタイプを異にするからである。

最後にこの鉱山から小規模ながら産した鉱物を列挙すると次のようなものが記録にある。

辰砂・黒辰砂・鶏冠石・石黄（雄黄）である。

〈参考文献〉

1. 三重県（1964）三重県地質産図
2. 磯部克・田端茂（1986）三重県鉱物誌 三重県高等学校理科研究会地学部会

3. 中央構造線付近（多気町前村～伊勢市楠部町間）の地質・鉱物及び岩石

三重県立津西高等学校

磯 部 克

1. 概要

図1における地域での地質の特徴は、中央構造線が東西に走っていることである。そして、それを境にして北側の内帯と南側の外帯に分けられ、両者が地質を全く異にすることである。つまり北側の内帯は領家帯（片麻岩帯）であり、南側の外帯は三波川帯（結晶片岩帯）であることである。今回の自動車道は中央構造線を避け、南側の三波川帯（結晶片岩帯）を通ることで土質力学上当然といえよう。

又、伊勢市前山町～藤里町間に朝熊ヶ岳断層による断層破碎帯がボーリングで確認されている。なおこの朝熊ヶ岳断層は宮川以東の中央構造線を称す。

鉱山跡はおきん茶屋の西に位置する水谷鉱山跡と東に位置する佐奈鉱山跡があるが、いずれも試掘段階で終わっている。なおこの両者については別項目で取り上げた（不編1・2）。

鉱物はこの両鉱山跡を除いた地域では、伊勢市円座や辻久留の碎石場で産し、化石は徳川山を中心に産する。本文ではこれらを中心に述べたい。

2. 変成帯

(1) 御荷鉾緑色岩類

伊勢市内の内宮付近から南方2～3kmの間に分布する。関東産地の御荷鉾山を模式地とする三波川帯と秩父古生層との間に分布する低変成度の塩基性岩類である。

本地域に産する塩基性岩類は角閃岩や異剥石斑糲岩、カンラン岩があり、片状岩となっているものもあるが塊状岩も多い。例えば伊勢市内の養命の滝付近では枕状溶岩も見られ、火山活動に係りて形成されたと思われる。これらは三波川帯の変成作用がまだ完全に終了しないうちに貫入したという考えと地向斜内の火山活動を示すと考える説とがある。

(2) 三波川帯変成岩類

本地域での分布は、一般に中央構造線の南側に沿って秩父古生層との間の東西にある。この岩帯は大きく黒色片岩と緑色片岩とに分けられ、黒色片岩は砂

岩や泥岩を起源とする低変成度の石墨千枚岩で代表され、他に珪質（石英片岩）、雲母片岩、赤鉄鉱石英片岩が挟在する。一方緑色片岩は塩基性岩類～凝灰岩類を起源とするもので、緑色片岩、緑廉片岩で代表される。その他黒色片岩中に砂岩片岩が挟在する。

成因は中生代ジュラ紀前期に、古生層の凝灰岩や泥岩、礫岩が佐川造山運動によって変成した。一般に片理や微褶曲構造が著しく発達し、片理の方向はN70°W～E-Wで、傾斜は北側に70°～90°、南側に80°～90°との両方に発達している。

●伊勢線ルートにおけるボーリングコアからの報告

多気町前村（勢和インター付近）では地表より約4～7mは礫混じりの崖錐でおおわれ、それ以下が黒色片岩であるが上部2.5m位は風化し、褐灰色をなし一部粘土化している。

佐奈水銀鉱山跡付近の標高140mでは、地表より17.8mまでは石英片岩で、これ以下は砂岩片岩と緑色片岩とが交互の産状を深さ30mまで示す。

多気町成川は標高102mあり、地下30mまでは上から粘土混じりの砂礫（層厚1.6m）、強く風化した石英片岩（約2m）、強風化緑色片岩（6.5m）、風化緑色片岩（6m）、砂岩片岩（1m）、黒色片岩（1m）、緑色片岩（3.5m、途中約1mの圧砕岩）、黒色片岩（4m）、圧砕された砂岩片岩（0.8m）、黒色片岩（1.2m）となっていて、黒色片岩と緑色片岩とが互層の形であることは三波川帯の成因を研究するのに注目すべきことではないだろうか。

玉城町山神の深さ14mのボーリングによると、地表より10mまで黒色片岩を源岩とする風化片岩となり、これより以下2mで緑色片岩、そして層厚0.6m程の断層粘土、同じく1.3mの黒色片岩となっている。

玉城町宮古の標高80mより地下12m間のボーリング結果ではすべて黒色片岩で、中間あたりまで風化

し、その下に圧砕帯があり、10～12m間に新鮮な黒色片岩がある。

玉城町岩出地内（中角池付近）では、地下21mまで砂岩片岩で、途中強く風化をとところどころで受けている。この付近では緑色片岩が出現しないのは注目される。一方、上記より東へ1km離れた宮川付近では、地表から10mまでは緑色片岩となっている。

伊勢市左八町の標高34mより地下1.4mまでシルトで、以下10mまでは黒色片岩となっている。伊勢市前山町地内の標高71.65mの地表より1.6mまでは礫混じりの砂質粘土であるが、以下11mまでは次のようになっている。風化片岩（層厚0.8m）、砂岩片岩（2.5m）、黒色片岩（0.6m）、砂岩片岩（0.7m）、黒色片岩（0.4m）、砂岩片岩（2.6m）、黒色片岩（1.9m）で、緑色片岩がないのが注目される。

伊勢市藤里町地内の標高74.39mの地表より2.4mまでは砂礫混じりの粘土である。以下12mまでは前山町と同じである。

伊勢市勢田町地内の標高8.8mでは粘土混じり砂礫で、これより17mまでは上から礫混じり粘土（層厚2.8m）、粘土混じり砂礫（7.5m）、厚さ20cmばかりの砂岩片岩を2枚挟み、全体として黒色片岩である。又色調は、上部は暗黄色で下部は暗灰色となっている。

伊勢市中之町地内の標高35.1m付近は砂礫で、これより下の約10mは砂礫混じり砂質粘土、風化片岩（層厚3.3m）、黒色片岩（3.3m）となっている。

伊勢市楠部町の標高9.2m以下では5.4mまで低位段丘層と思われる礫混じり粘土で、以下12mまではシルトと砂の互層をなし、その下1.3mは緑色片岩で17mまでは黒色片岩となっている。

図1の地質図と図2断面図とは若干異なる部分があるが、これは三波川帯の中で黒色片岩と緑色片岩とが地層上ははっきり区別されていない、つまり層の中で漸移しているためやむをえないと考える。

3. 古生代二疊紀新期～白亜紀

(1) 圧砕岩類（ミロナイト）

本地域での分布は中央構造線の北側（幅約50～100m）にあって、勢和村おきんから伊勢市佐八町の宮川の手前までである。これらの活動時期は、中生代白亜紀末かそれ以後と考えられている。

これらの岩類は圧砕のためにもろくて風化が早く、緑色から茶褐色に変色している。そのため顕微鏡で見るとほとんどの斜長石が粘土化して汚れて見え、粘土化した斜長石や石英との隙間には圧砕作用で生じた微粒方解石の集合体が見られる（図7）。

(2) 花崗岩類

本地域ではおきん茶屋北方の領家帯に分布する。

これらの岩石は畑井トータル岩帯に属し、やや片麻状の発達する粗粒の花崗岩である。丹生付近の櫛田川右岸にその露路がある。

(3) 花崗閃緑岩類

多気町佐奈・仁田を中心に分布する。花崗岩中に角閃石を含むため花崗閃緑岩と称せられるが、中央構造線に近くなる程片麻上組織が発達している。なお3の(2)、(3)については「近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告第1分冊1」の中の「櫛田川中流域の地質の岩石」に詳述したので本論では省略する。

4. 新生代

(1) 第三紀中新世、一志層群

本地域での分布は五佐奈、田丸（田丸層）、高倉山（高倉層）と小規模で点在する。

伊勢市の高倉山近くの通称徳川山は、砂岩、礫岩からなる高倉層（層厚約250m）で、下位から砂岩を伴う礫岩、礫岩と砂岩の互層、メタセコイアを含む砂岩、礫岩、最上部に海生動物を含むシルト岩となっていて、それぞれ厚さ20cm位で構成されている。

又、メタセコイアを含む地層からは同時にカシワ、クルミ類の葉？、アバマキ、スゲの一種？、コケ？、プラタナス、ヨシ、ヒノキ、イスノキ、その他樹皮、茎、毬果等、多数の植物化石が採集されている。

上部の動物化石の産する地層では、二枚貝（クルミガイ、チリロウバイ科、トヤマガイ科、ニッコガイ科、ツノガイ科）、巻貝（キリガイダマシ科）、ウニ、カニ、生痕（巣穴？）等が採集されている。

(2) 第四紀更新世

○高位段丘層（古市礫層）

伊勢市古市町・桜木町・倭町の市街地や高度40～20m付近に分布し、主に礫層で中・下部ではシルトや砂・粘土を含む。

礫種はチャート、ホルンフェルス、砂岩、花崗岩類、結晶片岩類で、一部クサリ礫となっている。伊勢市浦口町付近の粘土層（下部）からはモミ、ヒノキ、イスノキ、ヨシ、ヒシの一種が産する。

○中位段丘層（楠部礫層・上地礫層）

楠部町、中村町付近の御幸道路沿いに、層厚3～5mの礫層がある。木村一朗、大西一夫等はこれを中位段丘としたが、図1には小規模なため記載しなかった。

○低位段丘層（大倉礫層）

宮川右岸の大倉から辻久留にかけて砂礫層が分布する。沖積面より1～2mの比高を有する高まりはこの地一帯に分布するが、宮川の自然堤防と考えられ低位段丘に含めた（この項、木村、大西等の見解）。

しかし、古期沖積層という見方もあるため図1には沖積層とした。

（3）第四紀完新世—沖積層

分布地域は主に宮川流域を中心とした伊勢市内から玉城町の田園地帯である。粘土やシルトで構成している。礫種は主に結晶片岩類、花崗岩類、チャート等である。

5. 鉱物

（1）方解石

○伊勢市宇治館町西行谷

蛇紋岩が断層で破碎され、その割れ目や空洞に結晶を産する。一般に無色透明で柱状結晶をなし、大きさは普通直径1.5～2mm、長さ5mm内外である。晶相は大別して2種あって 大部分は三角、又は六角柱状であるが、中には柱面は平滑な頂面で切られ、頂面と柱面との交わる部位に菱面体の小面がアクセサリー的に現れる。

○伊勢市円座町

蛇紋岩体中に蛇紋石、透輝石の脈中に産する。

○伊勢市辻久留

（2）アラレ石

○伊勢市宇治館町水晶谷

蛇紋岩及びこれに接する変成岩類の割れ目や空洞に二次的に生成しており、脈状又は擬晶洞をなして産する。針状、放射状、放射束状～放射球状、柱状、サンゴ状、縞状等多彩な外観を呈し、脈幅は最大10cmを超える。方解石や他の炭酸塩類及びジュエイ石

等を伴う。一般に白色～淡黄色であるが、中には紫外線で燐火を発するものがある。

○伊勢市宇治館町西行谷

蛇紋岩の割れ目に長さ4cm、径8mmに達する無色透明～半透明の柱状結晶を産する。

（3）蛋白石

○伊勢市辻久留

蛇紋岩に接する角閃石との境界付近に生じた緑泥片岩及び局部的に珪化作用を受けた下部の石墨千枚岩の変質部分に含まれて産する。

一般に片理や割れ目を充たすドロマイト、蛋白石小脈をなすドロマイトを覆う形で後成的に沈澱しており、時に玉髓、又は玉髓質石英に移化し縞状を示す。脈幅は1cm前後で、その空洞中に乳白色半透明の小球状、ブドウ状の集形で点在する。

（3）木化珪石（珪化木）

○伊勢市浦口町3丁目旧伊勢電トンネル付近

高倉層を構成する粗粒花崗岩質砂岩～礫岩質層内にまれに見られ、外殻が炭化、内部にゆくにしがって珪化した径20cm以上の植物樹幹の一部を埋没状態で産する。

産地別では次の2ヶ所が有名である。

○伊勢市宇治館町水晶谷・西行谷

異剥石、斜長石、ハイドロガーネット、ジュエイ石、硬蛇紋石、蛇紋石、菱沸石、水苦土石、ソーダ珪灰石、滑石、水滑石、透輝石、苦土緑泥石、パイロオウロ石、磁鉄鉱、黄鉄鉱

○伊勢市辻久留3丁目、新谷土建工業「切り堀り」方解石、苦灰石、黄鉄鉱、武石、辰砂、石英（水晶）、緑簾石、緑泥石、蛇紋石、透輝石、曹長石、石綿、石墨、忍石、玉滴石、珪ニッケル鉱

○伊勢市円座砕石場

方解石、石綿、蛇紋石、透輝石、滑石、緑泥石、灰バンザクロ石

その他、伊勢市内に産する鉱物は次のものが報告されている。

黄銅鉱、赤鉄鉱、二酸化マンガン鉱、褐鉄鉱、高師小僧、クローム鉄鉱

6. 岩石

（1）石墨千枚岩（図3）

黒色片岩を代表するこの岩石は昔から石墨千枚岩

とか石墨雲母千枚岩とかいわれてきた岩石で、片理がよく発達している。時には石英の脈が入り込んだり絹雲母が入り込んだりして、中央構造線に沿って分布している。

県下では鳥羽地方や多気郡勢和村桜峠付近、さらには高見峠あたりまで露出していて緑色片岩と並んで有名である。

(2) 緑色片岩 (図4)

緑色片岩を代表するこの岩石は濃緑色状で、時には磁鉄鉱を含む。表面は滑石ができていたためか脂感がある。

この岩石プレパラートの作成は薄くなると水を含み膨潤し、スライドグラスからはがれやすくなることと、磁鉄鉱を含むことによって他の部分が軟らかいため磁鉄鉱が研磨剤と共に回転し、他の部分を傷つけたりして困難を極める。

緑色部は藍色の干渉色が緑泥岩 (ch)、粒状黄色が緑簾石 (ep)、繊維状黄褐色が陽起石である。

(3) 異剥石斑糲岩 (図5)

全体には緑黒色に見えるが、淡緑色の部分と緑黒

色の部分とがある。時には1mm大の金属鉱物も含む2mm大のへき開を示すものが異剥石 (d) である。

顕微鏡下では裂開を示し、干渉色は黄～黄褐色を呈し、圧力をうけたためか異常屈折を示すものがある。他にカールスパット双晶を示す斜長石は粗晶であるが、ソーシユル石化をうけている。

(4) ダナイト (図6)

本岩は90%以上のカンラン石からなる岩石で、肉眼では新鮮な破面が淡黄色を呈し、脂肪～^は玻璃光沢を示す。風化すると鉄分が多いためか茶褐色に変わる。カンラン石の他にクロム鉄鉱、磁鉄鉱、チタン鉄鉱、紅ザクロ石、尖晶石を含む。数%程度の輝石が含まれていても、分類上はダナイトである。まるい粒状カンラン石の集合体で、蛇紋石化してもカンラン石の仮象を残していて組織からダナイトであることが分かる。

後から変成作用をうけると、蛇紋石から透角閃石、直閃石、滑石等を生ずる場合がある。なおこの岩石の呼び方にはダンカンラン岩、ゾンカンラン岩、純カンラン岩などがある。

〔参考・引用文献〕

1. 孫福正 (1961) 伊勢徳川山の化石 P.11 伊勢ライオンズクラブ
2. 木村一朗・孫福正・大西一夫 (1965) 伊勢市内の新生代層について 地学研究16-8
3. 木村一朗・竹原平一 (1965) 伊勢湾南部沿岸の段丘 第四紀研究 4-2, P.69~81
4. 森岡靖 (1965) 伊勢市宇治館町に産する方解石について 地学研究16-5
5. 岩井田黎一郎・前川良雄 (1970) 宮川用水御系線第2号トンネルの地質について 応用地質11-1
6. 南平秀生 (1979) 伊勢の鉱物 (上) 三重科学 第18号 P.31~34
7. 南平秀生 (1981) 伊勢市内地学ガイド
8. 南平秀生 (1983) 伊勢の鉱物 (下) 三重科学 第22号
9. 南平秀生 (1983) 伊勢市の地質
10. 南平秀生 (1988) 伊勢志摩国立公園万手帳
11. 三重県鉱業会 (1980) 三重県地質産産図 (第2版)
12. 木村多喜生・南平秀生 (1981) 三重県伊勢市辻久留三丁目産タンバク石 地学研究 7-12 P.153~160
13. 磯部克 (1981) 顕微鏡下で見た三重の石
14. 磯部克・田端茂 (1986) 三重県鉱物誌 三重県高等学校理科研究会地学部会
15. 基礎地盤コンサルタンツKK名古屋支社 (1986) 近畿自動車道伊勢線 勢和～伊勢間ノリ面対策基礎調査報告書

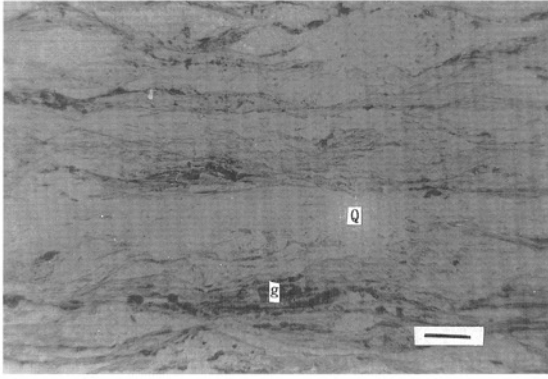


図3 石墨千枚岩 Q:石英、g:石墨 単ニコル
スケールは0.3mm、以下図7まで同じ

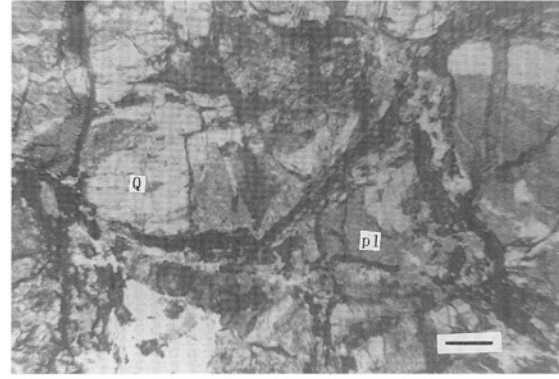


図7 圧砕岩(ミロナイト) Q:石英、pl:斜長石 単ニコル

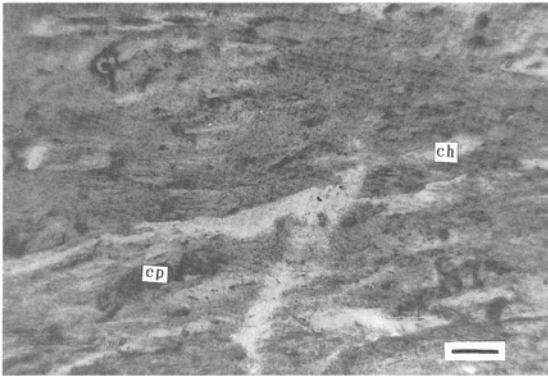


図4 緑泥片岩 ch:緑泥石、cp:緑簾石 単ニコル

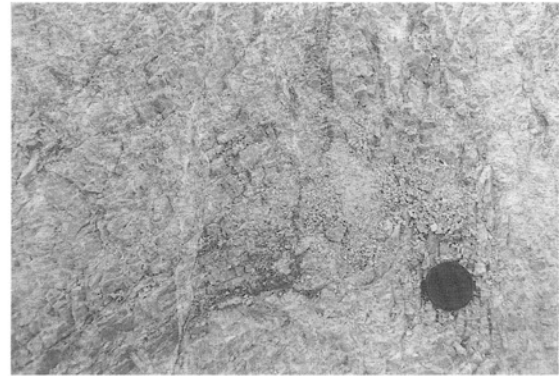


図8 中央構造線圧砕岩中に生じた輝安鉱の網状脈
多気町野中(南平秀生撮影)

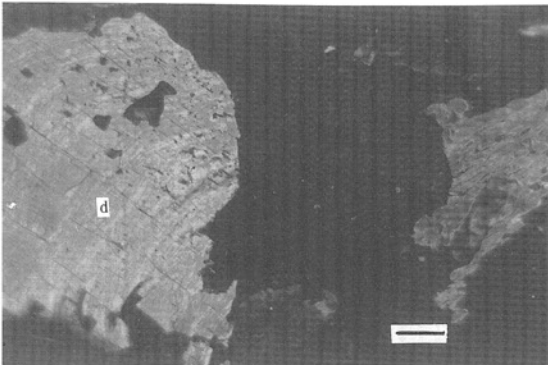


図5 異剝石斑糲岩 d:異剝石 クロスニコル



図9 いろいろな鉱物を変した伊勢市円座の砕石場
(1991年12月撮影)

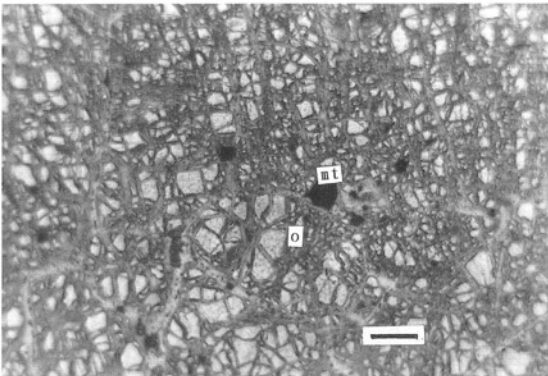


図6 ダナイト(ヅンカンラン岩) o:カンラン石
mt:磁鉄鉱



図10 高位段丘層 伊勢市前山町付近(1991年12月
撮影)

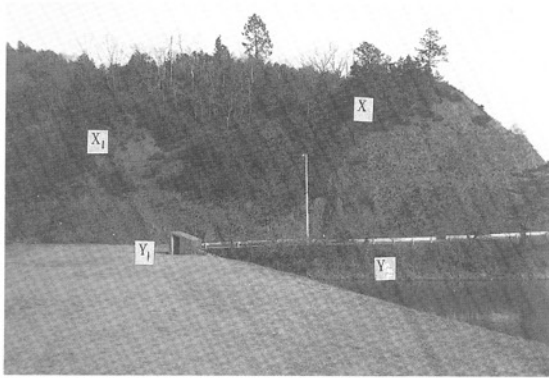


図11 X-Yより右(南側)三波川帯、同左X1-Y1までが破碎帯、多気町五桂池付近(1991年12月撮影)



図12 工事中の近畿自動車伊勢線における黒色片岩の露頭・玉城町勝田南方(1991年12月撮影)

4. 佐奈水銀鉱山跡の写真測量

埋蔵文化財の写真測量は、測定用カメラで撮影を行うのが一般的である。しかし比較的狭い範囲での図化は、非測定用カメラを使用することも可能であり、次の方法で写真測量および図化を試みた^①。

1. レンズの検定

レンズの収差の計測を行い、図化作業に使用できるものかどうか判断し、さらにレンズ収差の補正係数を算出する。なおカメラは同一機種であってもレンズ収差はそれぞれ違うので、測定用として使用するカメラは固定した方が望ましい。

2. 標識設置

遺跡内に基準点を設置する。基準点は、理論的には、ステレオモデル内に三次元的に配置された基準点が三点あれば図化が可能であるが、制度を高めるためには、均等に4～6点以上配置されているのが望ましい。

3. 基準点測量

セオドライト、光波距離計等を使用し、各標識の座標を計測する。使用機器はGUPPY GTS-3である。

4. 撮影

写真撮影を行う。使用カメラはNIKON AF (f=35) [本体NO.5951062, レンズNO.3085611] である。

5. 写真処理

写真処理を行う。

6. 細部図化

解析図化機により、図化を行う。使用機器はアビオリットBC2である。鳥瞰図は、地上写真から直接、解析図化機により座標を収録し、計算処理を行い作成した。

(河北秀実)

[註]

① 測量および図化については愛知玉野情報システム株式会社の御協力を得た。

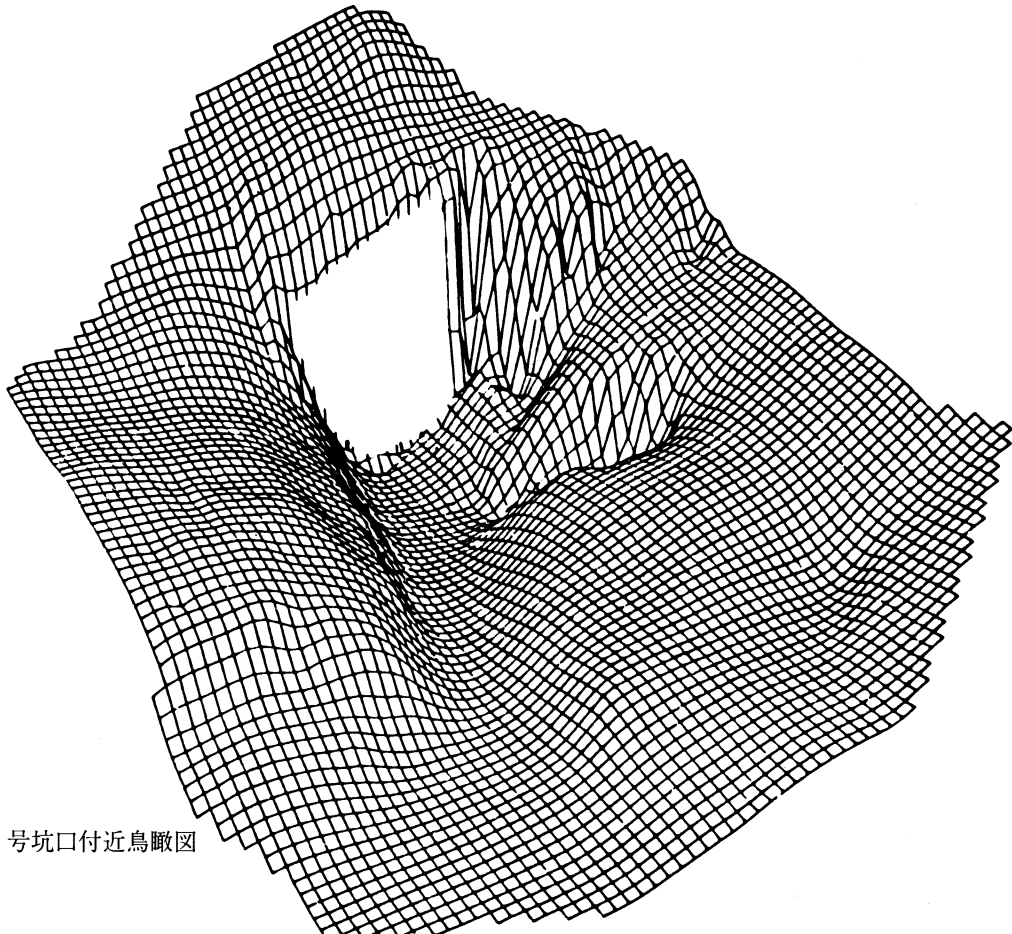


図1 1・2号坑口付近鳥瞰図



图2 1·2号坑口付近测量图

平成4(1992)年に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告101-1

近畿自動車道（勢和～伊勢）

埋蔵文化財発掘調査報告

－第1分冊－

1992（平成4年）3月31日

編集 三重県教育委員会

発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 東海印刷株式会社
